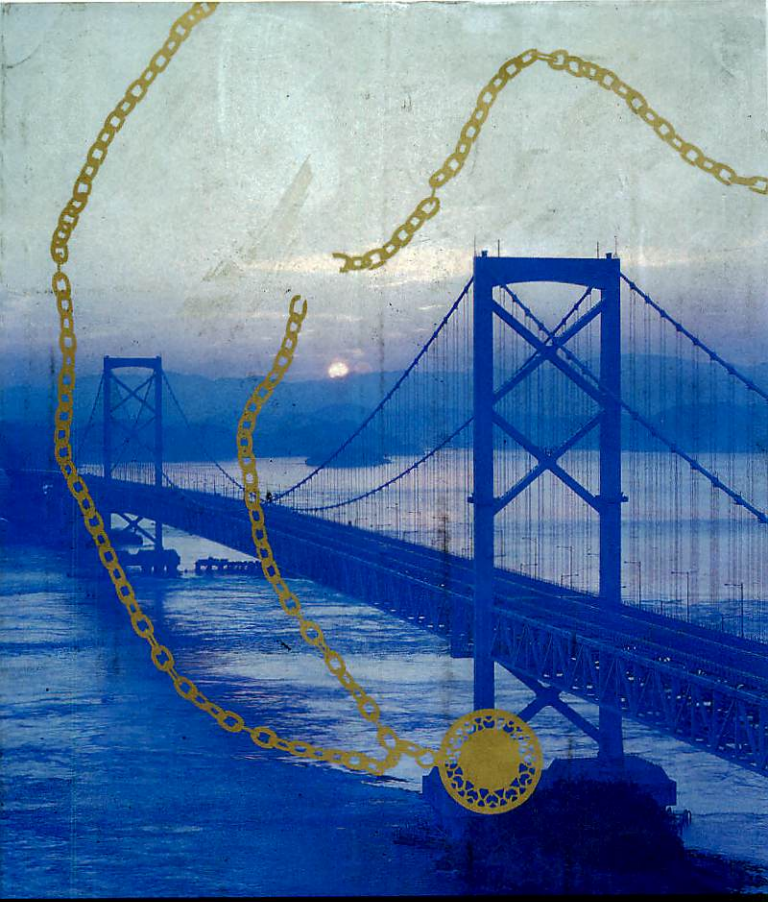


十津川警部シリーズ③

十津川警部の逆襲

（とつがわ）

西村京太郎

KOBUNSHA

二十年以上も前になるが、徳島の新聞に連載小説を書いていたので、徳島や鳴門に取材に出かけた。夏だったので、小さな連に入れてもらい、阿波踊りにも参加させてもらったが、いちばん印象に残ったのは、初めて見た鳴門の渦潮の大きさだった。当時は、もちろん連絡橋もなかったし、車の数も少なかったから、一層、渦潮は新鮮に見えたのかもしれない。最近、四国に取材に行くと、その変容に驚くのだが、鳴門の渦潮だけは、変わらないなといつも思う。そんなことを考えながら書いたのが、「阿波鳴門殺人事件」である。

「著者のことば」

カバー・デザイン　安彦勝博
カバー・写真　林　正男

カバー印刷　近代美術

十津川警部シリーズ③

十津川警部の逆襲

西村京太郎



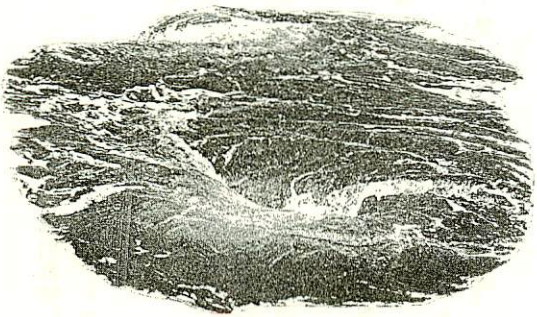
カッパ・ノベルス

十津川警部の逆襲　目次

阿波鳴門殺人事件……5
死体は潮風に吹かれて……125
ある刑事の旅……179

イラストレーション　辰巳四郎（たつみレろう）

阿波鳴門（あわなると）殺人事件



第一章　陽光の下で

1

すでに晴天が三日続いて、五月二十三日も暑かった。

朝から雲一つない青空が広がり、鳴門の町も海も、もう夏の気配だった。

淡路島との間に大鳴門橋が完成してから、鳴門には、新旧二つの名物ができた。一つは、もちろん東洋一の吊橋であるこの連絡橋で、もう一つは、渦潮である。

わずか一・三キロの幅しかない鳴門海峡に、海水の干満によって激しい流れが生まれ、それが巨大な渦潮を作る。

一日四回である。

この渦潮の見物のため、観潮船が出ているが、大鳴門橋ができてからは、橋の上に車をとめて、眼下の渦潮を見物する人もいる。しかし、橋の上は駐車禁止だから、違反である。

もう一つの見物の方法は、橋の袂にある鳴門公園から、望遠鏡を使うことだった。

ここには、いくつかの観潮用の展望台がある。海に面して、千畳敷展望台、お茶園展望台、七州園展望台、それに鳴門山展望台などである。この四つ

の展望台には、鳴門公園バス停から歩いて行ける。

千畳敷展望台の近くに土産物店があって、鳴門わかめや、阿波の竹人形、でこ人形などを買う観光客で賑わっていた。

大阪から車でやって来た若いカップルも、この土産物店で阿波踊りの人形を買ったあと、千畳敷展望台に向かって歩いて行った。

午後三時に近く、暑かったので、二人ともアイスクリームをなめながら歩いた。

大鳴門橋に続く本州四国連絡道路の下まで来たとき、一人の男が、よろめきながら、自分たちに向かって、近づいてくるのにぶつかった。

頭から血を流している男を見て、女は、悲鳴をあげて、青年にしがみついた。なめていたアイスクリームは、地面に落としてしまった。

青年のほうは、黙って、血だらけの男を睨みつけた。

男は、助けを求めるように、右手を二人に向かって差し出し、何かいった。が、その声はか細くて、カップルには聞こえなかった。

男の頭からは、血が流れ続け、蒼白い顔が真っ赤に染まっていた。

「おい、大丈夫か？」

と、青年はやっと声をかけた。怯えから、声がかすれている。

だが、男は、小さく唸り声をあげて、その場に崩れ折れてしまった。

男の身体が、小さくけいれんを続けている。それは、まるで、虫ピンに刺された昆虫のように見えた。

若いカップルが、あわてて一一九番しに走ったのは、男が倒れてから二、三分してからである。

2

救急車が駈けつけ、男を鳴門市街の救急病院に運んだのは、さらに五十分以上たってからだった。鳴門市街から現場の鳴門公園まで、片道だけでも、車で二十五分はかかるからである。

男は、救急車の中で死んだ。

男は、頭部に深い裂傷を負っていた。

鳴門警察署から、パトカーで、徳島県警の刑事が病院に駈けつけた。

時刻は午後四時を回っていた。

刑事たちは、眉をひそめながら、死体を見つめ、その死体の所持品を調べた。

「この人、知ってますよ」

と、若い刑事が、指揮をとっていた三浦警部にいった。

「本当か？」

「確か、トラベル・ミステリーを書いている作家ですよ。名前は、北川京介」

「その名前なら知っているよ。北海道を舞台にした小説を読んだことがある。しかし、作家の顔は知らなくてね」

と、三浦はいった。

（それにしても、殺人事件を書く人間が殺されるとは、皮肉なものだな）

三浦は、そんなことを考えながら、被害者のポケットを調べていった。

財布には、三十万近い金が入っていた。カルチエの腕時計もそのままだから、物盗りの犯行とは思えない。

同じ内ポケットから、二つに折った封筒が出てき

た。

〈北川京介様〉

となっている。若い田中刑事のいうとおり、この被害者は、やはり、作家の北川京介のようである。

三浦は、手袋をはめたまま、封筒の中身を取り出した。

〈僕は、徳島県鳴門市に住む高校一年生です。北川先生の本は、出ると必ず買って、読んでいます。いつも面白くて、夢中で読んでしまいます。それで、先生にお願いなんですが、僕の住んでいる鳴門を舞台にして、書いてくれませんか？　鳴門の渦潮で有名ですし、大鳴門橋が完成して、淡路島ともつながりましたから、面白い小説になると思います。ぜひ、書いてください。

鳴門市撫養町××　木島功〉

封筒の消印を見ると、一カ月前になっていた。

（こんなファンレターが来たので、今日、取材に来たということなのだろうか？）

と、三浦は改めて死体を見直した。

その他、被害者のポケットにあったものを、三浦はテーブルに並べていった。

キーホルダー

煙草（ラーク）二十本入りで、十五本残っている

百円ライター

運転免許証

百円玉二枚、十円玉三枚

CDカードなどカード五枚（これは、財布に入っていた）

サインペン

「北川京介が鳴門に取材に来たとすると、ひとりで、

というのはおかしいですね」
と、田中刑事がいった。
「作家の取材というのは、ひとりでやるんじゃないのか？」
「それは知りませんが、出版社の人間が、ついてくるんじゃありませんか？　ひとりで来たのなら、カメラかノートを持っているはずですよ」
「なるほどな。すぐ鳴門公園に行って、聞き込みをやってみてくれ。目撃者を探すんだ。被害者に連れがいたかどうか、知りたいからな」
と、三浦はいった。
田中刑事の他に、二人の刑事がパトカーで現場の鳴門公園に飛んで行き、聞き込みを開始した。
土産物店の女店員が、被害者を覚えていた。
「もう一人、三十二、三の男の人と一緒だったわ」
と、彼女はいった。
「ここで、何か買ったのか？」
と、田中刑事がきいた。
「買いに寄ったらしいんだけど、年上の人が、おみやげは仕事をすませてからでいいといって、二人で千畳敷展望台のほうに、歩いて行ったわ」
「三十二、三の男のことを、話してもらいたいんだ。人相は？」
「細面で、眼鏡をかけてたわ。どっちかというと、おとなしい感じ」
「服装は？」
「背広で、ネクタイをしてたわ。きちんとしてた」
「持ち物は？」
「持ち物？」
「そうだ。カメラは、持っていなかった？」
「ええ、持ってたわ。カメラとボストンバッグね」
「その他に、何か覚えてることはないかな？」

と、田中がきくと、女店員は、「そうねえ」と首をかしげて考えていたが、

「眼鏡の人が、もう一人のことを、先生と呼んでたわ」

「先生ね。二人が、何で来たかわからないかな？バスで来たのか、それともタクシーか？」

「そりゃあ、タクシーよ」

「なぜ、タクシーとわかるんだ？」

「だって、眼鏡の人が、『先生、タクシーを待たせておいたほうが、よかったんじゃありませんか』って、いってたもの。だから、いってあげたの。タクシーなら、すぐ呼べますよって」

と、彼女は得意そうにいった。

3

夕方には、二人を乗せたタクシーの運転手も、見つかった。

JR鳴門駅前に営業所のあるタクシー会社の運転手で、午後二時過ぎに、二人を乗せたといった。

「鳴門公園まで乗せて行きましたよ。着いたのは、二時四十分頃でしたね。待っていましょうかって、聞いたんですが、いいよといわれたんで、帰って来たんです」

「車の中で、二人がどんな話をしていたか、覚えているかね？」

と、三浦警部は運転手にきいた。

「車の中では、年上のお客に、いろいろと質問されましたよ。一日に何人ぐらい客を乗せるのかとか、新婚さんは、どんなルートを廻るのかとかですよ。なんで、そんなことを聞くんですかって、私が聞いたら、若い方が、小説に書くんでいろいろと取材し

ているんだって、いっていましたね。年配の小柄な男の人が、小説を書く先生みたいでしたよ」

と、運転手はいった。

「二人は、仲が良さそうだったかね？」

「仲がいいかどうかは知りませんが、作家の先生は、やたらに威張ってましたよ。小説家というのは、あんなに威張るものなんですかねえ」

「若い男のことを、小説家は、何と呼んでいたね？」

「久保君とか、呼んでいたと思いますが、確かじゃありませんよ」

と、五十二、三の運転手はいってから、

「あのお客が、どうかしたんですか？」

「小説家のほうが、千畳敷展望台の近くで殺されたんだ」

「へえー。それじゃあ、一緒にいた若い男が、犯人ですか？」

「それは、わからないが、とにかく、見つけて、聞きたいことがあるんだ。あんたも、見つけたら、すぐ警察に連絡してほしい」

と、三浦はいった。

他にも、目撃者は見つかった。問題の若い男と思われる人間が、ひとりで、鳴門公園から鳴門駅の方角に向かって、歩いているのを見たという地元の人の証言である。

時間は、北川京介が襲われた直後と思われ、「青い顔をして、何かに追われるように歩いていた。すれ違うとき、顔をかくすようにしました」ということだった。

この男の似顔絵も、作成された。それを見ながら、三浦は、

（これは、簡単に解決しそうだな）

と、思った。

明日、東京の各出版社に照会すれば、この男の身元は、すぐ割れるだろう。どこかの出版社の人間に違いないからである。そして、出版社は、東京に集中している。

だが、翌日まで待つ必要はなかった。深夜になって、問題の男が、捜査本部の置かれた鳴門警察署に、出頭してきたからである。

土産物店の女店員やタクシーの運転手が証言したとおり、痩せて、眼鏡をかけた三十二、三歳の男だった。

彼は、疲れ切った顔で、三浦警部に対して、

「東京の東文社の久保守です」

と、名乗り、名刺を差し出した。

三浦は、相手を椅子に掛けさせてから、

「自首してきたわけかね？」

と、高飛車に出た。

久保の顔が、一層、青くなった。

「自首って、何のことです？　僕は、北川先生を殺してなんかいませんよ」

「じゃあ、なぜ、今まで、逃げ廻っていたのかね？」

「どうしていいか、わからなかったからです。北川先生と二人だけで鳴門へ来て、先生が突然殺されれば、僕が疑われる。そう思うと、怖くて仕方がなかったんですよ。といって、逃げれば、一層、疑われると思って、こうして出頭したんです。事情を説明しようと思ってですよ」

「ぜひ、説明してほしいね」

と、三浦はいい、テープレコーダーを持ってこさせ、スイッチを入れた。

「録音するんですか？」

久保が、怯えたような眼になって、三浦を見た。

「殺してないんなら、構わないだろう？」

「それはそうですが、――」
「じゃあ、始めよう。被害者とは、古くからの知り合いなのかね？」
三浦は、あくまでも、高飛車なきき方をした。
「ここ五、六年のおつき合いです。僕は、雑誌の編集をやっていまして、うちの社は、北川先生の本を、年間二冊前後、出させてもらっています」
久保は、その本のタイトルをいくつか口にした。三浦の知らないものもあれば、知っているものもあった。彼が読んだ、北海道を舞台にした作品も入っている。
「鳴門には、取材に来たんだね？」
「そうです。北川先生のところに、鳴門の高校生からファンレターが来まして、それに、鳴門を舞台にした作品を書いてほしいとあったんです。今まで、先生の作品には、鳴門を書いたものがなかったんで、ぜひ、行きましょうということになりまして」
「いつも、被害者と二人で、取材旅行に行くのかね？」
「編集次長が同行して、三人で行くこともあります。僕が北川先生と取材旅行をしたのは、今回で三度目です」
「いつも、上手くいってたのかね？」
「ええ。上手くいっていましたよ」
「ケンカになることも、あったんじゃないのか？」
三浦がきくと、久保は、顔色を変えて、
「そんなことはありません。北川先生は、僕が気に入っていて、久保君と行くと、リラックスできていいといわれてたんです。うちの編集次長に、聞いてもらえばわかりますよ」
「じゃあ、今日のことを話してもらおうか。何時に、東京を出たんだ？」

「先生とは、東京駅で待ち合わせて、午前七時〇四分発の『ひかり73号』に乗りました。切符の手配なんかは、僕がやりました」
「午前七時ねえ。早いんだな」
「北川先生は、忙しい方なので、今回も二泊三日の日数しか取れなくて、それで、最大限の取材をしようとすると、どうしても、朝早く東京を出発しなければならなかったのです」
と、久保はいう。
三浦は、じろりと久保を見て、
「そんなに忙しいのなら、飛行機を使えばよかったんじゃないのかね？　東京―徳島間に、一日片道五便が飛んでいる。飛行機なら、一時間十五分で徳島に着くよ」
「北川先生は、飛行機が嫌いなんです」
「なるほどね。午前七時〇四分発の新幹線に乗ったあとは、どうなったんだ？」
と、三浦は先を促した。
久保は、手帳を取り出して、それを見ながら、
「乗ったのは、グリーン車です。午前八時過ぎに食堂車へ行って、少しおそい朝食をとりました。これが、そのときの領収書です」
「いつも、領収書を貰うのかね？」
「取材旅行ですから、かかった費用は、すべて領収書をつけて、会社に報告します」
「わかったよ。そのあとは？」
「岡山に着いたのは、一一時二〇分です。ここから、一一時二八分発の徳島行『うずしお7号』に乗りかえました。高松駅で駅弁を買って食べ、池谷（いけのたに）駅で鳴門線に乗りかえ、鳴門に着きました。鳴門駅に着いたのは、時刻表どおり一四時〇一分です」
「駅前でタクシーを拾って、鳴門公園へ向かったん

だね？　運転手が証言してるよ」
「そうですか。鳴門公園に着いてから、土産物店で、鳴門の渦を見るのに一番いい場所を聞いたら、千畳敷展望台と教えられて、歩いて行きました。その途中で、急に北川先生が、煙草がないから買ってきてくれないかといわれたんで、僕は、土産物店に引き返し、自動販売機で煙草を買って戻りました。そうしたら、北川先生が血まみれで倒れ、若いカップルが騒いでいたんです。僕は、動転してしまって、逃げだしてしまったんです」
「なぜ、逃げたんだ？　殺してないんなら、逃げることはないだろう？」
「確かにそのとおりなんですが、あのときは、反射的に逃げてしまったんです。そのあと、どこをどう歩いたかわかりません。やはり、事情を説明したほうがいいと考えて、こうして出頭したんです」
「もう一度、聞くが、被害者が、急に煙草を買ってきてくれといって、君は、ひとりで土産物店に引き返し、自動販売機で煙草を買って、戻ったのかね？　そうしたら、被害者が、血まみれで倒れていた。そうかね？」
「そのとおりです」
「嘘をいうんじゃない！」
と、三浦は久保を怒鳴りつけた。
「嘘なんかついていませんよ」
久保は、必死の顔でいった。
三浦は、背後のキャビネットから、透明なポリ袋に入ったラークの箱と百円ライターを取り出して、久保の前に置いた。
「これは、被害者の上衣のポケットに入っていたものだ。ラークは、まだ十五本残っているんだ。ライターもある。それなのに、なぜ君に、煙草がないか

MILD SEVEN

ら、買ってきてくれと頼むんだ？」
と、三浦がいうと、久保は、驚いた顔でラークの箱を見ていたが、
「これは、本当に、北川先生が持っていたんですか？」
「そうだ。これでも、まだ嘘をつくのか？」
「しかし、先生が煙草を買ってきてくれといったのは、間違いないんですよ。これが、そのとき買った煙草です」
久保は、自分のポケットから新しいマイルドセブンを出して、三浦に見せた。
三浦は、相変わらず厳しい顔で、
「ラークじゃないな」
「僕の行った自動販売機には、外国煙草がなかったんです。それで、マイルドセブンを買いました。確か、北川先生は、国産ならマイルドセブンがいいと、おっしゃったことがありましたから」
「嘘をつくんじゃない！」
と、三浦は怒鳴った。
「嘘なんかついていませんよ。僕は、本当のことをいってるんです。北川先生がラークをまだ持っていたのは、知りませんでした。多分、勘違いで、僕に煙草を買ってきてくれと頼んだんだと思います。片方のポケットになかったんで、煙草が切れたんだと、勘違いしてですよ」
久保は、必死の顔色でいった。
三浦は、皮肉な眼つきで、久保を見すえた。
「片方のポケットに入ってなければ、もう一方のポケットを探すもんだよ。おれは、ヘヴィー・スモーカーだから、よくわかるさ。それとも、被害者は、煙草がたくさん残ってても、不安になって、余分に買いに行かせる癖があったのかね？」

「そんなことは、ありません」

「それなら、おかしいじゃないか。君は、日頃から、横暴な被害者に腹を立てていた。今度の取材で、鳴門へ来たとき、それが、我慢の限界まで来た。千畳敷展望台へ行く途中、君は思わず、被害者の背後から、後頭部を殴りつけたんだよ。あの辺りに落ちていた石の塊りでも拾って、それで殴ったんだろう。だが、血が吹き出したとたんに、君は怖くなって、逃げだした。しかし、逃げていては、かえってまずいと思い、下手な嘘を考えてから出頭した。違うのか？」

「違いますよ。僕は、北川先生を殺してなんかいない。信じてください。怖くなって逃げたのは、間違っていましたが、僕は、本当のことをいってるんです。信じてください」

4

三浦は、久保をそのまま留置し、翌二十四日から、裏付け捜査に入った。

久保は、北川京介との今回の取材旅行のスケジュールを話したが、それが果たして本当かの確認である。

五月二十三日は、渦潮を見物したあと、鳴門市内を見て、市内の「鳴門グランドホテル」に泊まることになっていたという。

三浦が部下の刑事に確認させたところ、間違いなく、そのホテルに、北川京介他一名で予約がされていた。

二十四日は、午前九時にチェック・アウトし、タクシーで池谷駅に出て、九時四七分発の「うずしお

6号」に乗る。
高松着一〇時四九分。高松発一一時一〇分の「いしづち9号」に乗車し、松山に向かう。松山着が一四時〇七分。松山市内を見たあと、タクシーで道後温泉に行き、「ホテル道後」に一泊。
これも、確認がとれた。「いしづち9号」の乗車券、特急券も、久保は持っていた。
二十五日は、道後温泉を出発して、帰京するのだが、この切符も、久保は用意している。
二泊三日の取材だから、当然の用意だが、そのことが、三浦を考え込ませた。
しかし、だからといって、久保は無実ではないかという方向に、思考は動かなかった。むしろ、逆だった。
これだけ、スケジュールを煮詰めておきながら、北川京介を殺したということは、よほど腹にすえかねたに違いないと、三浦は思い、また、日頃の恨みつらみを晴らすために、もっともらしく、スケジュールを立てたのではないか、とも考えた。
「久保の逮捕状を、出してください」
と、三浦は捜査本部長の林に要請した。三浦のつもりでは、すぐにでも応じてくれると思ったのだが、林本部長は、意外にも、
「今の状況では、無理だよ」
と、いった。
三浦は、眉をひそめて、
「なぜですか？　久保以外に、犯人はいませんよ」
「証拠は、あるのかね？」
「財布も、現金も、CDカードも盗られていないから、物盗りの犯行じゃありません。そして、あの時刻に、あの場所に、被害者がいるのを知っていたのは、久保だけです。また久保は、煙草の件で嘘をつ

いています」

と、三浦は並べていった。

眼がきつくなっているのは、慎重な林の態度に、腹を立てていたからである。

久保が、マスコミ関係者だから、必要以上に慎重になっているのだと、三浦は、思っていた。

「凶器も、まだ見つかっていないんだろう？」

と、林がきく。

「久保が出頭してきたのは、夜になってからです。その間に、海にでも捨ててしまったんでしょう。見つからなくても、不思議はありません」

と、いってから、

「あの男以外に、犯人は考えられません」

と、繰り返した。

「証拠が必要なんだよ、三浦君。こういう事件では、マスコミの扱いも大きくなるから、慎重の上にも慎重に捜査を進めるようにと、県警本部長も、いっておられるんだ」

「マスコミが、怖いということですか？」

「そうじゃない。証拠さえあれば、どうということもないんだ。だから、証拠を見つけるんだ。白昼の殺人なら、目撃者だっているかもしれんじゃないか」

と、林はいった。

「目撃者が見つからなければ、令状は、出ませんか？」

「地検だって、慎重なんだよ。君は、久保が犯人に間違いないというが、考えてみれば、状況証拠だけだろう。決定的な証拠が欲しいんだ。まだ時間があるんだから、それを見つけたまえ」

と、林はいった。

5

翌日、昼前に、北川京介の妻が、飛行機で飛んできた。

三十五歳のまゆみは、北川にとっては後妻で、彼女自身も仕事を持っていた。三浦にくれた名刺には、インテリア・デザイナーの肩書がついている。

「昨日、ご自宅に電話したんですが、お留守のようでしたが？」

と、三浦はきいた。留守番電話だったので、鳴門で北川が亡くなったことを入れておいたのだ。

まゆみは、堅い表情で、

「その名刺に書いてありますけど、私も、自分の事務所を持っていますの。主人が二泊三日で取材旅行に出かけたので、私一人、家にいても仕方がないので、事務所のほうにいたんです」

「なるほど」

と、三浦は、肯いてから、

「ご主人が、東文社の久保編集員と一緒に、取材旅行に行くことはご存じでしたか？」

「出版社の方が一緒ということは、主人に聞いていますけど、名前は知りませんでしたわ」

と、まゆみはいった。

「久保に会ったことは？」

「家に見えたとき、二、三度、お会いしていますわ。でも、お話ししたことはありません。主人のお知り合いですから」

「ご主人と彼とは、うまくいっていましたか？　それとも、うまくいってなかったか、どちらです？」

と、三浦がきくと、まゆみは、当惑した顔になって、

「私たち夫婦は、お互いの仕事には、干渉しないことにしていましたから、わかりませんわ」
「しかし、ご主人が、何かのときに、洩らしたことはありませんか？　東文社の久保は気に入らないとか、いったことをですが」
「申しわけありませんけど、何も聞いていませんわ」
と、まゆみはいった。
午後になると、久保の上司で、編集次長をやっている青木が、これも飛行機を利用して駈けつけた。
弁護士も、一緒だった。
頑丈な身体つきの青木は、三浦に向かって、
「うちの久保君が、北川先生を殺すはずがありません。久保君は、北川先生のお気に入りで、今回の取材旅行でも、先生が、久保君に同行してほしいと、名指しだったんですよ。それなのに、なぜ、殺したりしますか？」
と、怒ったような声でいった。
「すると、久保は、被害者と仕事を離れても、つき合いがあったわけですか？」
「北川先生は、酒がお好きでしてね。久保君は、ときどき、おつき合いしていましたよ」
「その間に、何か確執になるようなことが、あったんじゃありませんか？」
と、三浦はきいた。
「そんなことは、ありません。第一、それなら、北川先生が怒って、久保君以外の編集者を連れて行ったはずです」
「そうでもないでしょう」
と、三浦は、意地悪い眼で、青木を見返した。
「どういうことですか？」
「私は、小説家という人種とつき合いはないが、多

分、非常識で、わがままな人間だと思いますね。また、自分勝手でなければ、小説というのは、書けないんじゃありませんか。とすれば、北川京介が、自分で気づかずに、編集者の久保を深く傷つけていたことだって考えられる。そうでしょうが。しかも、久保のほうは、それを口にできない。相手が悪意がないだけに、余計に手に負えないわけですよ。手に負えないし、腹も立ってくる。そうした感情が積み重なっていたら、どうですか？」

と、三浦はいった。

三浦は、自分でいったとおり、小説家に知り合いはいない。だが、親戚に一人、画家がいた。

画家と作家が同じかどうかわからないが、この画家がわがままで、よく迷惑をかけられていた。

当人に悪意はないのだろうと思うのだが、勝手な行動が、他所から見ていると、迷惑このうえない。突然、訪ねてきて、そのまま何日も泊まり込んだり、パリへ行ってくるので犬の世話を頼むといい、仔犬を押しつけて、出国してしまう。三浦の妻など、その画家の名前を聞いただけで、眼を三角にしてしまうのだ。

北川京介も、あの親戚と似た神経の持ち主だったのではあるまいか。

「いや、北川先生は優しい方で、久保君は、尊敬して仕事をやっていましたよ」

と、青木はいった。が、三浦は、その言葉を鵜呑みにはできないのだ。

「第一、彼は、嘘をついているんですよ」

三浦は、煙草の一件を青木にぶつけた。

青木は、首をひねっていたが、

「そんなことで、久保君が嘘をつくとは思えません。きっと、北川先生が煙草を買ってきてくれと、いっ

たんだと思いますね」

「まだ、十五本も入った煙草があるのにですか？」

「勘違いということもありますしね」

「私も煙草をやめられないほうですが、のみたいときは、ポケットを全部探しますよ。ズボンの尻ポケットに入れてたって、見つけます。被害者は、上衣のポケットに入れていたんです。それに、箱型のラークで、ペシャンコにはなっていなかったんです。それなのに、あるのがわからなくて、買ってきてくれといったというのは、信じられない。久保は、自分が犯人じゃないと信じさせようとして、苦しまぎれの嘘をついたんですよ。他に、考えようはありませんよ」

と、三浦は決めつけた。

事件の報道は、派手だった。人気作家が、ただの死ではなく、取材先で殺されたからだろう。

逮捕状は出ないので、容疑者として、久保の名前は、イニシアルでも出なかった。「警察は、殺人事件とみて、捜査中」と、型どおりの言葉が、新聞に出ただけである。

解剖の結果も、告げられた。死因は、やはり、後頭部裂傷による出血多量である。犯行推定時刻は、五月二十三日の午後二時四〇分から三時だ。

三浦の主張は通らず、久保は、結局、釈放された。

第二章　一人旅

1

東京の警視庁では、徳島県警からの要請で、この事件の解決に協力することになった。

要請があったのは、殺された北川京介の身辺調査だった。

特に、三浦警部からは、十津川に電話があって、被害者と東文社との関係、一緒に取材旅行した久保との関係を、念入りに調べてもらいたいといわれた。

「三浦警部は、久保以外に、犯人は考えられないといっている」

と、十津川は部下の亀井刑事にいった。

「いちばん拘っているのは、煙草の件ですか？」

「そうらしい。久保が、自分が犯人でないことにしようと、下手な嘘をついたに違いないと思っているんだな」

「確かに、おかしいことはおかしいですよ。煙草があるのに、煙草を買ってこいというのは」

と、亀井がいった。

「北川京介が、久保に煙草を買いに行かせて、その間に、誰かと会おうとしたんじゃありませんか？それなら、北川が嘘をつくケースだって、十分に考えられると思いますが」

と、いったのは、若い日下刑事だった。
「誰にだい？」
と、十津川がきいた。
「奥さんなら、いつでも会えるわけですから、奥さん以外の女性じゃありませんか？」
「取材にかこつけて、浮気か？」
「そうです」
「それは、考えられないよ」
と、亀井が即座にいった。
「なぜですか？」
と、日下がきく。
「いいかね。煙草は、すぐ傍の土産物店傍の自動販売機で、売っていたんだ。久保が、買って戻って来て、五、六分だよ。もし、その間に、女が北川京介と会ったとして、久保に姿を見られたくないんだから、すぐ立ち去らなければならない。会って話ができるのは、二、三分になってしまう。北川たちは、鳴門のホテルに泊まるんだから、夜になってから、ゆっくり会えばいいんだ。なにも、二、三分の間に、せわしない思いをすることはないじゃないか」
と、亀井はいった。
「そういえば、そうですが――」
と、日下は肯いた。
「北川京介という作家の性格を調べれば、果たして、煙草があるのに、煙草を買いに行かせるような人間かどうか、わかってくるんじゃないかね」
十津川は、二人の間に割って入る形でいった。
亀井たちは、十津川の指示で、北川京介の周辺の人間から聞き込みを開始した。
作家仲間、出版社の人間、北川がよく飲みに行くクラブのママやマネージャー、あるいは大学卒業後、今でもつき合っている同窓生など、対象は広範囲に

わたった。
刑事たちが会って話を聞いた相手は、五十人を越えた。
その結果、北川京介という作家の人間像が、浮かび上がってくることを期待したのだが、こうした調査でありがちなように、正反対の話が多く出てきてしまった。
常識的な人間だという声のある反面、あんな非常識な男はいないという声があるといった具合である。たいていの人間は、二面性を持っているものだから、仕方がないのだが、これをどうするかだった。
今度の事件の捜査権は、あくまでも徳島県警にある。それを考えれば、十津川たちが、勝手に結論を出すわけにはいかなかった。
そこで、十津川は、集めた証言をそのままコピーして、徳島県警の三浦警部宛に送ることにした。
十津川がそうしたもう一つの理由は、彼と部下の刑事たちが、続発する都内の事件の捜査にも、当たらなければならなかったからである。
五月二十九日。鳴門で北川京介が殺されて一週間目に、調布市深大寺の境内で人が殺され、十津川たちは、この事件を捜査することになった。
二十九日の午後十一時を過ぎていた。
この日は、一日じゅう初夏の陽気だった。
殺されていたのは、若い女である。
年齢は、二十歳ぐらいか、あるいは、もっと若いかもしれない。
夏物のセーターにサンダル姿で、頭から血を流して死んでいた。
運転免許証と財布、それにキーホルダーが、ジーンズのポケットに入っていた。
名前は、小西麻子、免許証から十九歳とわかった。

サンダルばきということで、この近くに住んでいるのではないかと思ったが、意外に離れた場所で、三鷹市内のマンションとなっていた。

「車で来たのかもしれませんね」

と、亀井がいい、刑事たちが探すと、五十メートルほど離れた場所に、赤いミニクーパーがとまっているのが、見つかった。

それが、彼女の車だった。

三鷹からこの深大寺まで、車でやって来て、何者かに殺されたのだろう。

念のために、赤いミニクーパーの車内の指紋を採るように頼んでおいて、十津川と亀井は、パトカーで三鷹に向かった。

JR三鷹駅から、歩いて十五、六分の所にあるマンションだった。

十津川は、被害者の持っていたキーでドアを開けた。

1DKの部屋だが、若い女の部屋らしく、華やかに飾られていた。

机の上には、若い男と一緒に写っている写真が立てかけてあった。

それに、教科書。

「女子大生のようですね」

と、亀井が部屋を見廻しながらいった。

「ああ、M大の学生だ」

十津川は、学生証を見つけて、亀井に見せた。

「今は、学生もいい生活をしているんですねえ。マンションに住み、車を乗り廻しているんだから」

と、亀井が溜息まじりにいった。

「カメさんも、これから大変だよ」

「うちの子が、大学に行くまでには、まだだいぶありますよ。それに、こんな贅沢はさせません」

と、亀井がいった。
「どうかな。カメさんは、子供に甘いから」
と、十津川は笑ったが、壁にかかったカレンダーに眼をやって、「おや？」という表情になった。
「どうされました？」
「この五月二十一日から二十四日までのところに、四国旅行と書いてあるんだ」
「そうですね。今の若い娘は、旅行好きですからね」
亀井は、そっけないいい方をした。
「しかし、四国旅行だよ」
「珍しいですか？」
「五月二十三日に、鳴門で、北川京介が殺されている」
「あれと、何か関係があるとお考えですか？」
「ないと思うが、気になってね」
と、十津川はいった。
亀井も、急に眼をこらして、カレンダーを見つめた。
「今度の被害者、小西麻子が、五月二十三日に四国の何処にいたかが、問題ですね」
「それに、一人旅だったか、それとも、あの写真のボーイフレンドと行ったかも知りたいね。カップルで旅行したのなら、多分、前の事件とは無関係だろう」
と、十津川はいった。その場合は、同行した男が、容疑者ということになるだろう。
二人は、机の引出しや、本棚、押入れなどを調べていたが、亀井が急に手を止めて、
「何かおかしいですね」
と、十津川にいった。
「何かって？」

「われわれより先に、誰かがこの部屋を家探ししたんじゃないか、そんな気がするんですが」
「カメさんも、そんな気がするかね？」
「写真や手紙が、少ない感じがするんです。特に二十一日から二十四日にかけて、四国へ旅行してきたはずなのに、その写真が一枚もありません。これは、おかしいですよ」
「われわれは、キーホルダーのキーの一つで、ここのドアを開けたが、もう一つキーがあったということかな？」
「そう思います」
「彼女を殺した犯人が先廻りして、四国めぐりの写真やメモなどを、持ち去ったということかな？」
「断定は、できませんが」
「この写真のボーイフレンドに、話を聞いてきてくれないかね。なんとか探して、話を聞いてきてほしい」
と、十津川は机の上の写真を亀井に渡した。
朝になってから、亀井が日下刑事と、写真を持って出かけて行った。
調布署に捜査本部が設けられて、三上刑事部長が捜査本部長になった。
昼前に電話が入ったが、亀井からではなく、徳島県警の三浦警部からだった。
「ご協力ありがとうございました」
と、三浦はまず礼をいってから、
「あの中に、被害者北川京介の行きつけのクラブの関係者の証言があります。それによると、北川京介は、女に優しいというか、甘いというか、で、奥さんの他に、女性がいたんじゃないかと思うんですが」
「その点は、調べました。そちらにお知らせした銀

座のクラブのホステスの一人が、北川京介と関係があったようです。名前は、太刀川ゆき。二十六歳です」

「編集者の久保は、独身ですから、彼が、その太刀川ゆきが好きだったとすると、久保が、北川京介を恨む可能性も考えられるでしょう？」

と、三浦はいった。

「確かに、あり得ますが」

「明日、上京します。その点を調べたいので」

「わかりました。私の部下を一人、あなたにつけて、ご案内させましょう」

と、十津川は約束した。

三浦は、礼をいってから、

「十津川さんは、今、新しい事件を抱えられたそうですね？」

「十九歳の女子大生が殺された事件ですが、ひょっとすると、そちらの事件と関係があるかもしれません」

「本当ですか？」

「明日までに何かわかれば、三浦さんが来られたとき、お話しできると思います」

と、十津川はいった。

夜になって、やっと、亀井たちが戻って来た。

「写真の男に、会えました」

と、亀井は弾んだ声でいった。

「やはり、ボーイフレンドか？」

「そうです。彼はK大の四年生で、六月一日からアメリカへ行くところでした。小西麻子が殺されたことに、ショックを受けていましたね。もちろん、彼が犯人ならうまい芝居ですが」

と、亀井はいった。

「名前は？」

「有沢哲也で、四国には誘われたが、都合があって行けず、小西麻子はひとりで行ったそうです。彼女から絵ハガキが届いていて、それを借りてきました。警部が予想されたとおり、五月二十三日に、彼女は、鳴門へ行っています」

と、亀井はいった。

彼が借りてきたのは、高知の桂浜の絵ハガキである。ボーイフレンドの有沢哲也宛で、次のように書いてあった。

〈今夜は高知泊まり。明日は、鳴門へ出て、渦潮を見物する予定です。

哲也クンと来られたらよかったのに。

五月二十二日　高知「名月荘」にて　麻子〉

十津川は、その文面に眼を通してから、

「彼女が殺されたことで、有沢哲也は、何かいっていたかね？」

「有沢の話では、旅行には、必ずカメラを持って行く女性だったそうです。だから、四国の写真がないのはおかしいと、いっていました」

「犯人の心当たりは？」

「それは、まったくないそうです」

「四国から帰って来てからは、二人は、会っていたんだろうか？」

「二十六日の夕方会って、食事をしたそうですが、そのときは、別に脅かされているとか、妙な電話があるとかいう話はしてなかったそうです」

「鳴門のことは、どんなふうに話してたんだろうか？」

「そのことは、大事なので、有沢にしつこく聞いてみました。北川京介のことは、ショックだったとみえて、熱心に話していたそうです。二十三日に鳴門

へ行き、その日の夜は、徳島市内で泊まり、旅館のテレビで知って、びっくりしたといっていたそうです。彼女は、別に北川京介のファンではないらしいんですが、自分が見物してきた場所で、作家が殺されたというので、びっくりしたんだと思うと、有沢は、いっていました」

「問題は、彼女が、二十三日の何時頃、鳴門にいたかということだな」

と、十津川はいった。

もし、北川京介が殺された時刻に、あの近くにいたとすると、彼女が犯人を目撃した可能性が、出てくるからである。

亀井は、肯いて、

「その点も、しつこく聞いてみました。が、有沢は覚えていないといっていましたね。彼女がいわなかったのかもしれませんし、有沢が忘れたのかもしれません」

「すると、彼女が鳴門にいた時刻は、まったくわからずか？」

「正確には、わかりませんが、だいたいの計算はできます」

と、亀井はいった。

「どんなふうにだね？」

「二十二日に泊まった高知の旅館はわかっていますから、電話して、彼女が、二十三日の何時にチェック・アウトしたか、聞いてみます。それがわかれば、なんとか推定はできそうです」

と、亀井はいった。

そのあと、亀井は、電話で高知の旅館に問い合わせたりしていたが、

「高知の旅館をチェック・アウトしたのは、二十三日の午前八時頃だということです。旅館からＪＲの

高知駅までは、歩いて十五、六分といっています。若者ですから、歩いて行ったと思いますね」
「すると、高知駅に着いたのは、八時十五分から二十分か」
「そうですね。JR高知駅に、八時二十分に着けば、八時二八分発の特急『しまんと2号』に乗れます。これに乗ると、高松着が一一時一五分です」
「そこから、徳島行きに乗るわけだな？」
「そうです。高松発一二時三一分の『うずしお7号』に、ゆっくり乗ることができます」
「その間に、他の列車はないのかね？」
「普通列車が一本ありますが、途中までしか行きませんから、乗っても仕方がありません。多分、小西麻子は、この間に昼食をとってから、『うずしお7号』に乗ったと思います。一時間十六分ありますから、ゆっくり昼食がとれます」
「特急『うずしお7号』か」
と、十津川は呟いてから、
「その列車は、北川京介と久保が乗った列車じゃなかったかね？」
「そのとおりです。二人は、岡山から乗っています」
と、亀井はニッコリ笑った。
「すると、北川京介と小西麻子は、同じ時刻に鳴門駅に着いたことになる」
「そのあと、北川と久保は、タクシーで鳴門公園に行っています。小西麻子は、多分、バスに乗ったと思いますので、鳴門公園に着いた時刻に、多少のずれはあると思います」
「すると、小西麻子が事件の何かを見た可能性は、あるわけだな」
「問題は、何を見たかです」

「犯行そのものを見たのなら、すぐ、その日のうちに、警察に連絡しているんじゃないかな」
「それに、四国から電話で、ボーイフレンドに話していると思います」
と、亀井もいった。
「すると、どういうことになるんだろう？」
十津川は、難しい顔で、じっと考え込んだ。
「私がわからないのは、ボーイフレンドの有沢に何も話してないことなんです」
と、亀井がいった。
「本当に、何も話してなかったのか？」
「そうなんです。有沢は、彼女があの事件について、何かを見たとか、何かを知ってるみたいなことは、一言もいわなかったというのです」
と、亀井はいった。
「しかし、彼女は、あの事件に関連して、殺されたような気がしてならないがね」
と、十津川はいった。

2

「写真ですね」
と、間を置いて、亀井がいった。
「同感だね。関係があるからこそ、彼女が四国で撮った写真が、盗まれたんだ」
「彼女が鳴門で何気なく撮った写真が、犯人にとっては、命取りになるものだった。だから、犯人は、深大寺に彼女を呼び出して殺した。そういうことになるのかな」
「私も、そう思いますが――」
「思いますが、何だい？」
「それに、彼女は、気づかなかったんでしょうか？

もし、気づいていたとすると、なぜ、ボーイフレンドか警察に話さなかったのかという疑問が、わいてきます」

と、亀井がいった。

「まさか、ボーイフレンドの有沢という学生が、犯人じゃないだろうが――」

十津川は、小さく呟いた。

「有沢が、どうかしましたか？」

「いや、違うとは思うが、理屈としては、合うと思ってね」

「と、いいますと？」

「有沢は、用があるから、一緒に四国に行けないといったんだろう？」

「アメリカ行きの費用を稼ぐので、アルバイトに忙しかったといっています」

「ところが、鳴門で撮った写真に、よく見ると、有沢が写っていた。当然、彼女は、有沢に電話をかける。なぜ、自分に嘘をついて、鳴門へ行ったのかときく。有沢は、その説明をするといって、彼女を深大寺に連れ出して、殺した――」

「つまり、有沢が北川京介殺しの犯人だということですか？　小西麻子の写真で、自分のアリバイが崩れてしまうので、口封じに殺したと」

「理屈としては、合うんだ。これなら、有沢が、彼女は何もいわなかったと、カメさんにいったわけが説明がつく」

と、十津川はいった。

「しかし、学生の有沢が、北川京介を殺す動機がわかりません」

と、亀井はいった。

「動機ね」

「もう一度、有沢という学生のことを調べてみます。

北川京介と関係がなかったかどうか、五月二十三日に、本当に東京でアルバイトをしていたかをです」

と、亀井はいった。

翌日、徳島県警の三浦警部がひとりで上京し、調布署に訪ねて来た。

三十五歳の若い警部を、十津川は、笑顔で迎えた。大きな可能性と危なっかしさの両方を、同時に感じるからだった。

「合同捜査になる可能性が、出てきましたよ」

と、十津川は三浦にいった。

「こちらの被害者が、五月二十三日に鳴門にいたわけですか？」

三浦は、若い顔を輝かせてきいた。

「そのとおりです」

と、十津川は、今までにわかったことを三浦に説明した。

三浦は、自分の手帳にメモしながら、聞いていたが、

「深大寺と吉祥寺とは、遠いですか？」

と、十津川にきいた。

「直線距離なら、そう遠くはありませんね」

「それなら、小西麻子という女子大生を殺したのは、例の久保の可能性が強いと思いますよ。確か彼の住所は、吉祥寺のはずです」

「そうでしたね」

「近くなら、深大寺のことをよく知っているでしょうから、呼び出す場所として、指定したことが納得できます」

と、三浦は勢い込んでいった。

十津川は、日下刑事を三浦につけて、送り出してから、

（若いから、一直線か）

と、小さな溜息をついた。

三浦は、犯人は久保と決めて、迷っていない。それが、羨ましくもあったのである。

アイス・コーヒーをいれて、それを飲みながら、今度の事件を考えているところへ、亀井や西本たちが戻って来た。

十津川は、亀井たちに、アイス・コーヒーをいれてやりながら、

「雨は降りそうにないね」

「ありがとうございます」

と、亀井は美味そうにアイス・コーヒーを口に運んでから、

「有沢と北川京介の関係は、今までのところ、まったく出てきません。大学も違いますし、有沢は、純文学が好きで、ミステリーは、読まないようです」

「五月二十三日のアリバイのほうは、どうなったね？」

十津川がきくと、今度は、西本刑事が、

「有沢は、五月十三日から、アパートの近くの二十四時間営業のスーパーで働いています。一日おきの勤務で、二十三日は、ちょうど休みで、一日じゅう自分のアパートで寝ていたそうです。午前六時に交代してから、自宅に帰り、夜まで寝ていたというのです。それを証明する人間はいません」

「有沢のアパートは、何処にあるんだ？」

「四谷三丁目です」

「地下鉄に乗れば、東京駅まで十二、三分で行けるね」

「そうなんです。午前六時に交代していれば、午前七時には、ゆっくり東京駅まで行けて、北川京介の乗った『ひかり73号』に、乗ることができます。飛行機を使えば、もっとゆっくりと、鳴門へ行けるは

ずです」
「どうも、面倒なことになってきたな。時間的には、有沢も容疑者の一人か」
十津川は、渋面を作った。容疑者が増えていくのは、ありがたくない。
「動機は見つかりませんが、警部のいわれるとおり、この大学生も容疑者の一人になりそうです」
と、亀井がいった。
「カメさんから見て、どんな男だね？」
と、十津川はきいた。
「外見はいかにも現代風で、女の子にもてそうな感じです。喋り方は丁寧で、優しい感じですが、意外と冷たいかもしれません。ガールフレンドの小西麻子が死んだことを話したとき、びっくりはしていましたが、それほど、悲しんでいるようには、見えませんでしたから」
「なるほどね」
「アメリカ行きを、止めようともしませんしね」
「仲間の評判は、どうなんだ？」
「悪くありません。今の若い連中は、誠実さとか、力強さで評価するんじゃなくて、どんなに面白い奴かで評価するみたいです。その点、有沢は、明るくて、面白い男だという評判ですから」
と、西本がいった。
「問題は、やはり、北川京介との関係だな。もし、有沢が犯人なら、北川を恨む理由があるはずだ」
と、十津川はいった。

3

徳島県警の三浦警部が戻って来たので、その夜おそく、正式に合同捜査会議が開かれた。

まず、三浦の意見を聞くことになった。この若い警部は、いぜんとして、久保犯人説を捨てていなかった。

「今日、日下刑事に案内していただいて、北川京介がよく行っていたという銀座のクラブ『かつら』を訪ね、ママやマネージャー、ホステスたちから話を聞き、特に、北川京介と関係のあったホステス太刀川ゆきからは、一時間近く事情聴取をしました。その結果、私は、ますます、東文社の久保が犯人であるという確信を強めました」

と、三浦はきっぱりした声でいった。

続けて、その理由を説明した。

「クラブ『かつら』は、北川京介がよく行っていたというだけではなく、東文社が、作家や評論家などの接待によく使っていた店だということも、わかりました。久保は、北川京介とだけではなく、他の作家とも、このクラブに行っていました。久保は、独身ですし、クラブ『かつら』のホステスの中では、いちばん美人の太刀川ゆきに関心を持っていたことは、他のホステスたちが認めています。そんな久保は、北川京介が彼女を口説くのを見て、楽しかったはずがありません。それにもかかわらず、久保は、クラブ『かつら』に行った際に、北川京介と彼女との仲を取り持つようなことをしなければならなかった。北川がそれに気づいて、久保に感謝したり、彼女への行動を控えて、久保に花を持たせていればよかったのでしょうが、どうも、そうしたことには、北川京介は鈍感だったようです。作家というのは、繊細な神経の持ち主と信じていたのですが、日常生活では、かえって、普通の人より鈍感だと思いますね。こんなことで、久保の気持ちは、北川に対して、一層、鬱屈したものになっていき、五月二十三日に、

とうとう爆発したのだと、私は、確信しています」
「久保が太刀川ゆきを好きだったというのは、間違いないのかね？」
三上本部長は、三浦にというより、彼に同行した日下にきいた。
「他のホステスの話では、久保が、何回か彼女を口説いているのを見たということです。太刀川ゆき自身は、北川京介が殺され、久保が疑われているということで、何もいえないと口をつぐんでいます」
と、日下は答えた。
「現在、久保は、どうしているんだ？」
三上本部長は、十津川にきいた。
「東文社も弁護士も、久保は無実だと主張していますが、本人がショックを受けているということで、帰京してから会社を休んでいます。休ませているといったほうがいいかもしれません」
と、十津川はいった。
「すると、吉祥寺の自宅マンションにいるということかね？」
「そう思います。しかし、拘束されているわけではありませんから、どこに行こうと自由です」
「それなら、深大寺で小西麻子を殺したのも、久保ですよ」
と、三浦がいった。
「動機は、鳴門で彼女に何かを見られたということかね？」
と、三上は三浦にきいた。
「そうです。久保のほうは、見られたのに気づいていた。何かは、まだわかりません。北川京介を殺すところを見られたとは思えない。見られないように殺したでしょうし、目撃していれば、彼女が、警察に連絡してきたはずです。私が考えたのは、例えば、

久保が凶器を海に投げ捨てるところを、彼女に見られたのではないかといったことです。例えば、石の塊りが凶器だとすると、彼女のほうは、久保がそれを海に投げ捨てるのを見ても、事件に関係がないと思って、見過ごしたんでしょう。だが、久保のほうは、大変なものを見られてしまったと考えた。必死になって、何処の誰かを調べ、わかると、深大寺に呼び出して、口封じに殺したんですよ。こう考えれば、納得できるんじゃないでしょうか？」

三浦は、熱っぽく説明した。

「十津川君は、今の三浦警部の推理をどう思うね？」

と、三上がきいた。

「納得させるものがあることは、認めます。しかし、決定的な証拠がありません」

と、十津川は正直にいった。

「十津川君自身は、誰が犯人だと、思っているのかね？」

三上本部長が、続けてきいた。

「容疑者は、他にも何人かいます」

「誰だね？」

「それを、書き出してみます」

と、十津川はいい、黒板に名前を書き並べていった。

北川京介の妻　まゆみ
太刀川ゆき
有沢哲也
久保　守
その他の人物

「それぞれに、動機が考えられます。北川夫婦の夫婦仲はわかりませんが、もし、うまくいっていなければ、それが、北川まゆみの動機になります。また、

クラブ『かつら』のホステス太刀川ゆきにも、動機は、考えられます。北川京介が、彼女に対して、結婚を約束して、その約束を破っていたとすれば、そのことが殺しの動機かもしれません。有沢については、今のところ、動機が見つかりませんが、ひょっとすると、意外な動機を持っている可能性もあります」

「その他の人物というのは、何だね？」

「北川京介のライバルの作家も、考えられます」

と、十津川はいった。

「北川まゆみと太刀川ゆきのアリバイは、どうなっているんだね？」

「北川まゆみは、五月二十三日から、自分の仕事場にしている六本木の部屋で寝泊まりしていたといっています。雑居ビルで、果たして、彼女の言葉どおりかどうかは不明です。太刀川ゆきも同様です。クラブ『かつら』は、午前零時が看板ということになっています。太刀川ゆきは、五月二十二日も、店が閉まったあと、午前一時過ぎに大久保のマンションに帰り、二十三日は、午後三時頃まで寝ていたといっています。店に出たのは、二十三日の午後七時頃で、これは店のマネージャーが証言しています。二十三日は、朝から夕方まで、ひとりでいたといっているのですから、アリバイは、ないに等しいと思っています」

「容疑者は、四人か」

三上本部長がいうと、三浦が、

「私は、久保ひとりと、思っています」

と、すかさず、大きな声を出した。

三上は、肩をすくめて、

「十津川君は、ひとりにしぼれると思うかね？」

と、きいた。

十津川は、三浦には悪いと思ったが、
「今のところは、この中の誰が、ということはいえません。聞き込みを進めて、しぼっていくことは、できると思いますが」
と、いった。

4

三浦は、徳島に帰って行った。十津川たちが久保犯人説に賛成しなかったことが、不満のようだった。
それは、見解の相違だから構わないのだが、三浦が、北川京介の友人の作家たちの所を廻り、自説をぶつけて、久保のことを質問した結果、三人の作家が、捜査本部に押しかけてきた。
三人とも、久保が担当している作家である。
三人とも、名の通った作家で、十津川は、大いに恐縮しながら会った。
何をいいに来たかは、もちろん最初からわかっていたが、やはり、三人がいったのは、久保が優秀な編集者であり、作家を大事にする男で、絶対に北川京介を殺すはずがないということだった。
「私は、まだ、久保さんを犯人と断定してはいません」
と、十津川は三人にいった。
作家の一人は、
「しかし、昨日、訪ねて来た刑事は、久保君を犯人と決めつけていた。そのくせ、証拠があるわけでもない。あんな刑事より、われわれのほうが、ずっと、久保君のことをよく知っているんです。そう思いませんか？」
「徳島県警が拘っているのは、煙草のことです。久保さんは、北川京介さんが煙草を買って来てくれと

いったので、その場を離れた隙に、北川さんが殺されたと証言しているんですが、実際には、北川さんは、煙草を持っていた。いちばん大事な点で、嘘をついているんじゃないかと、徳島県警は、考えているわけです。身内をひいきするわけではありませんが、この疑問は、当然だと思いますね」

「しかし、あなたは、久保君を犯人と断定はしていないんでしょう？」

と、もう一人の作家がいった。

「容疑者の一人です」

「彼は、無実ですよ。北川さんとだって、うまくいっていたんだ。作家として、尊敬していたんじゃないかな。殺したりはしませんよ」

「問題の煙草については、どうですか？　北川さんという方は、煙草が必要もないときに、わざと編集者に買いに行かせたりすることがありましたか？」

と、十津川は三人にきいた。

「いや、彼は、編集者を大事にする男だから、そんなことはしないと思うね」

と、いったのは、いちばん年長の作家だった。

「人をからかって喜ぶところもあったよ」

と、もう一人がいった。

「しかし、それは、酒を飲んで、騒いだりしているときだろう？　おれだって、クラブで彼と飲んでいて、急に彼が真面目な顔になってさ。とうとう、おれはエイズになってしまった、君と一緒にパリに行ったとき、娼婦を買ったのがいけなかったらしいといわれたことがあった。身に覚えがあるから、おれは、ぎょっとしたんだが、嘘だったんだ。そういう嘘はつくが、今度のケースは違うんじゃないか」

「いや、そうでもないぞ。久保君は、からかうと面白いって、北川君がいっていたからな」

と、三人目がいった。
作家たちは、十津川を放っておいて、議論を始めてしまった。
十津川は、苦笑して、彼らの話を聞いていた。
作家たちの話は、煙草のことからどんどん逸脱していって、警察批判になったり、世相批判になったりして、結局、結論が出ず、
「とにかく、久保君は、犯人じゃありません！」
と、口を揃えていい、帰って行った。
「参ったね」
と、十津川は亀井と顔を見合わせた。
小西麻子の解剖結果も、報告されてきた。
死因は、頭部を強く殴られたことによる脳挫傷。
死亡推定時刻は、五月二十九日の午後九時から十時の間だった。
だが、捜査は、なかなか進展しなかった。
四人の容疑者を一人にしぼり切ることが、いっこうにできないのである。
四人と、第一の被害者、北川京介の関係を徹底的に調べて、より容疑の濃い人間を残していくことにしたのだが、困ったことに、調べれば調べるほど、四人とも容疑が濃くなってしまうのである。
妻の北川まゆみについていえば、夫婦仲が必ずしも上手くいってなかったという話が、十津川たちの耳に入ってきた。
北川が他に女を作るといった浮気の問題だけでなく、酔うと、まゆみに暴力を振るうことがあったというのである。これには、証人もいた。まゆみが顔を腫らしていたことがあり、心配したインテリア・デザイナーの仲間が聞いたところ、夫の北川が、酔って殴ったといったというのである。
ホステスの太刀川ゆきにも、動機はあった。彼女

は、北川が妻と別れて、自分と結婚してくれると思い込んでいたらしいからである。北川は、その約束を守らなかったようだから、彼女にも、北川を殺す動機はあったことになる。

有沢哲也は、最初、まったく北川京介とは無関係な青年に思えた。大学、本籍地、趣味など、すべて調べてみたのだが、二人をつなげるものは見つからなかったからである。

しかし、有沢と北川とは、直接つながらなかったが、彼の亡くなった叔父とつながっていることが、判明した。叔父の名前は、里村実。有沢が尊敬していた男だったが、里村は作家志望で、それも、推理小説に情熱を傾けていた。そのため、一流企業に勤めていたのに辞めてしまい、原稿用紙に向かう生活に入った。もちろん、まったく無名の人間の書いた作品が、いくらミステリー・ブームでも、売れるはずはない。

里村は、三年間、悪戦苦闘した揚句、推理作家の登竜門といわれるK賞に賭けることにした。半年かけて作品を書きあげて、応募した。

最終予選を通り、新人里村実の誕生も間近かと思われたのだが、選者五人の中の一人の反対によって、彼の作品は葬られ、女性が受賞した。反対した選者が、北川京介だったのである。

北川は、自分の信念で落としたのだろうが、これに賭けていた里村は、この年の暮れに自殺してしまった。

有沢が、このことを恨みに思っていたとすれば、動機になり得るのである。

久保のこともなお調べ続けていたが、新たに、去年の十二月に、彼が北川と銀座のクラブで飲んでいて、北川が、泥酔した揚句、何かの拍子に怒り出し、

久保が殴られたことがあるのがわかった。
酔ってのことだし、醒めてから、北川が謝ったので、この事件は、内密ということになっていた。クラブのママやホステスも口がかたかったし、殴られた久保も、酒のうえのことだからといっているのだが、徳島県警の三浦警部にいわせれば、動機の一つになるだろう。
四人とも、北川京介を殺す動機を持っているのである。そして、アリバイは、不確かなのだ。

第三章　阿波鳴門殺人事件

1

「今日一日、カメさんに現場を委せるよ」
と、小西麻子が殺されて五日目の朝、十津川が、突然、亀井にいった。
相変わらず、容疑者をしぼり切れずにいるときだった。

「警部は、どうされるんですか？」
と、亀井がきいた。
「これを持って、都内のホテルに、二十四時間、籠ろうと思っているんだ」
十津川は、小さなボストンバッグを、亀井に示した。
「何が入っているんですか？」
「何だと思うね？」
「今度の事件の捜査に、必要なものですね？」
「そうだよ」
「わかりませんが――」
と、亀井が首をひねっていると、十津川は、チャックを開けて、中身を取り出した。
本ばかりである。
「北川京介の書いた本が十冊だよ。これを、ホテルに入って、明朝までに、全部、読んでみるつもりなんだよ」
と、十津川はいった。
「それで、事件の解決に役立ちますか？」
「わからん。しかし、被害者の作品だからね。何かわかるかもしれないと、期待しているんだよ。新宿のNホテルにいるから、何か急用ができたら連絡してくれ」
「わかりました」
「三上部長には、内緒だよ。部長は生真面目だから、私が一日じゅう、本を読んでいると聞いたら、きっと激怒するからね」
と、十津川はいった。
亀井は、微笑して、
「わかりました。警部のことを聞かれたら、適当に答えておきます」
と、いった。

十津川は、ボストンバッグを下げ、新宿のNホテルに入った。

超高層ホテルで、十津川の入った部屋からは、東京の街並みを、はるか下に見下ろすことができた。

十津川は、ルームサービスで、コーヒーを二つのポットに入れて持ってきてもらい、それを飲みながら、積みあげた十冊の本を、上から一冊ずつ眼を通していくことにした。

それまで、十津川が北川京介の本を読まなかったのは、作者自身のことを書いた自伝的な小説ではなかったからである。エンターテインメントなら、作者自身とは、関係がないと思ったし、それなら、かえって、間違った印象を持ってしまうのではないかとも思ったのだ。

しかし、捜査が行き詰まってしまった今、十津川としては、どんなヒントでも欲しくて、十冊の本と格闘することにしたのである。

この十冊は、ここ二年間に、北川が書いたものだった。

いずれもトラベル・ミステリーで、日本全国と、さまざまな列車が舞台になっている。

別に社会問題に取り組んだ小説ではないので、軽く読めるのはありがたかった。

昼までに、三冊読んだ、が、さすがに眼が疲れて、十津川は、ベッドに寝転がった。

天井を見上げて、煙草に火をつけた。じっと考え込む。

三冊とも、舞台になる土地と列車は違うが、パターン化している内容だった。

北海道や九州で、殺人事件が起きる。犯人と思われる人間には、鉄壁のアリバイがある。

探偵役の人間が、犯人の、列車や飛行機を使った

アリバイを崩していく。

このパターンは、三冊とも同じなのだ。

（だが、それが、現実に起きた今度の事件と、どんな関係があるのだろうか？）

煙草の灰が落ちてきたので、十津川は、あわてて起き上がり、灰皿に吸い殻を捨てた。

何杯目かのコーヒーを飲み、窓から外を見つめた。眩い太陽が、街に降り注いでいる。走る車の屋根もビルの窓も、太陽を反射して、きらきら光っている。

十津川は、四冊目を読むのを止めてしまった。同じパターンのストーリイだと思ったからである。

考え疲れて、十津川は、少し気分転換に部屋を出た。

一階のロビーまで降りて、ソファに腰を下ろした。ぼんやりと、ロビーに出入りする泊まり客を見守った。

また、煙草に火をつけた。

（北川京介は、実際に取材して、小説を書くということだったが――）

そして、今度も、何冊目、いや何十冊目かの小説を書くために、四国に出かけた。東文社の久保守と一緒にである。

十津川は、三浦警部から貰った一枚のメモを、ポケットから取り出した。

それは、北川京介と久保が、二泊三日で、四国を取材することにしていたスケジュール表だった。

三浦が、コピーしてくれたものである。

「阿波鳴門殺人事件」取材スケジュール

と、書かれている。これは、三浦警部がつけたものではなく、東文社がつけたものだった。つまり

「阿波鳴門殺人事件」という題で、北川京介は、今度の小説を書くことにしていたのだろう。

雑誌の連載で、すでに予告が今月号にのっていた。その予告にも、「阿波鳴門殺人事件」の題名が、「仮題」としてだが、出ていた。

十津川は、その予告を見たのだが、それには、作者、北川京介の言葉ものっていた。

短い言葉なので、十津川は、暗記している。

〈今回、阿波鳴門を舞台にした作品を書くことにした。鳴門は、昔から巨大な渦潮で有名だが、新しく、大鳴門橋が出現した。この両者を花に、さらに、列車のアリバイトリックを使って、読者の期待に応えたいと思っている〉

つまり、今まで何冊も書いてきたと同じ、トラベルミステリーを書くということなのだろう。変わりばえはしないが、北川の作品にあったものは、詰め込む気だということである。

十津川は、もう一度、スケジュールに眼をやった。

それから立ち上がり、ロビーの中にあるティールームに行き、その店の自慢だというケーキを三千円ばかり買い込むと、フロントで、急用ができたので、チェック・アウトしたいといった。

2

捜査本部に帰って来た十津川を見て、亀井は、びっくりした顔で、

「どうされたんですか？　何か忘れ物ですか？」

「いや、もうすんだんだ」

と、十津川は、ボストンバッグを机の上に置き、中から十冊の本を取り出して、積み重ねた。

「これ、もう全部、読まれたんですか？」
と、亀井がきく。
「三冊だけ読んだ。あとは、同じパターンだと思ったから、眼を通さなかった」
「私も、警部にならって、一冊だけ買ってきて、さっき読み了えました。別に、今度の事件の解明には、役立つとは思えませんでしたが」
と、亀井はその本を見せた。
十津川が、読んだ三冊の中の一冊ではなかった。
しかし、カバーの裏に書いてある文章を見れば、だいたいのストーリイは想像がついた。
十津川は、買ってきたケーキを部下の刑事たちに配ってから、亀井に、
「私と一緒に、行ってもらいたいところがあるんだよ」
と、いった。
「四国の鳴門ですか？」
「そこにも、いつか行かなければならないと思うが、今は、東文社だ」
と、十津川はいった。
「久保守を、逮捕しますか？」
「いや、彼の上司に会いたいんだ」
「わかりました」
と、亀井はいった。
二人は、パトカーで、神田にある東文社に向かった。
受付で青木編集次長に会いたいと告げると、久保のことがあるので、受付の女性まで、一瞬、緊張した表情になった。
三階の応接室に待たされたが、コーヒーを運んできた女性社員も、かたい顔つきである。
青木は、なかなか現われない。

「久保のことで、どう対応するか、相談してるんじゃありませんか」
と、亀井が、軽いいらだちを見せて、呟いた。
十二、三分待たされてから、青木が入って来たが、顧問弁護士が一緒だった。
どうやら、弁護士を呼ぶので、時間がかかったらしい。
十津川は、苦笑して、
「今日は、北川京介さんの小説の話を聞きに来たんですよ。弁護士さんの立会いは、必要ないと思いますがね」
と、いった。
「久保君を、逮捕するという話じゃないんですか？」
「受付の方には、こちらで出版した北川さんの作品のことで話を聞きたいといったはずですがね」
「本当に、それだけですか？」
「久保さんを逮捕するのなら、こちらへ来ないで、彼のマンションへ行きますよ。まだ、休んでおられるんでしょう？」
「今週いっぱい休めといってあります」
と、青木はいってから、顧問弁護士を部屋から出した。
十津川は、眼の前に置かれたコーヒーを少しだけ飲んでから、
「北川京介さんの本を、何冊か読みました」
と、穏やかな調子でいった。十津川が、そのタイトルをあげてみせると、青木は、やっと口元に微笑を浮かべて、
「どうでした？　面白かったですか？」
「楽しく読ませてもらいましたよ」
「うちで出している本の中では、よく売れる、いわばドル箱の一つです」

「日本各地への旅と、時刻表を使ったトリックが売り物のようですね？」

「そうなんです。その二つです。北川先生自身は、ハードボイルド・タッチのものを書きたいとおっしゃっていたんですが、それでは、やはり、読者が満足しないので、今いった二つの柱で書いてくださいと、お願いしていたんです」

と、青木はいった。

だが、まだ、ときどき十津川の顔色を窺うような眼つきをするのは、こちらが、突然、訪ねて来た真意を計りかねているのだろうか。

「今度、書くことになっていた小説ですが、鳴門市に住む少年から来た投書から始まったというのは、本当ですか？」

と、十津川がきいた。

「そのとおりです。北川先生には、よくあいうファンレターが来るんですよ。次は、自分の住んでいる町とか、自分の知っている列車を書いてほしいというファンレターです」

と、青木はいった。

「いつも、そうなんですか？」

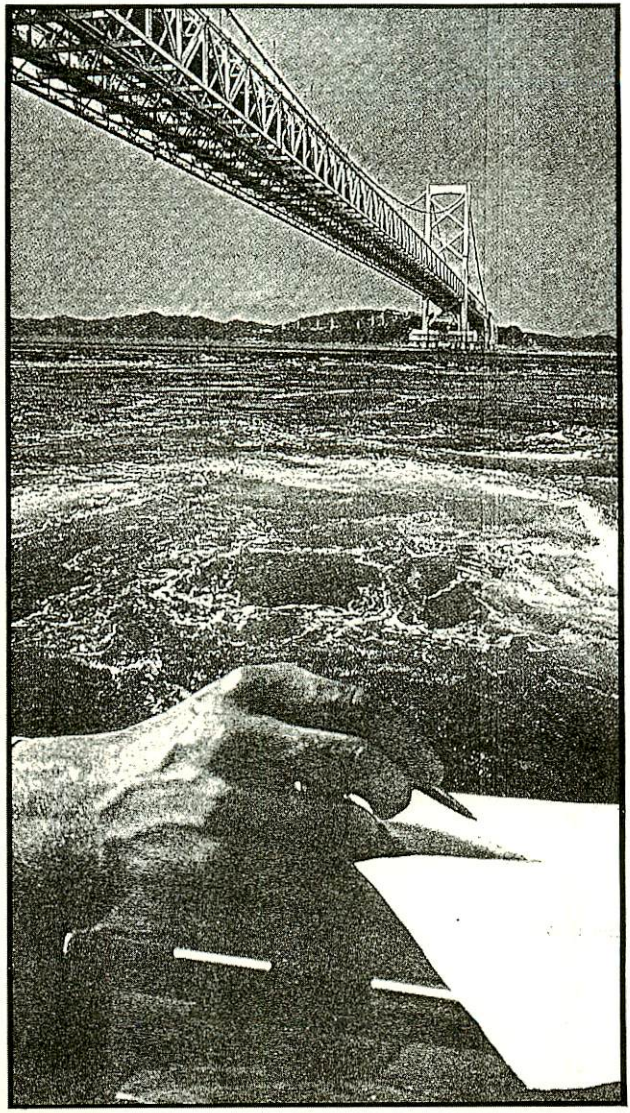
「いや、いつもとは限りません。北川先生の場合、次は、どこを書くか、どの列車を使うかということで、私と久保君、それに北川先生の三人で、考えます」

「それで、誰の意見が生かされるんですか？」

と、亀井がきいた。自分の知らない世界なので、興味を覚えたという眼をしている。

「そのときによって違います。もちろん、書くのは北川先生ですから、最後は先生の裁断ですが、私の意見が生きることもあるし、久保君の主張が通ることもあります。今度のように、高校生の投書からと

いうこともあります」
と、青木はいった。ほっとしたのか、彼の口調も、次第に滑らかになっていった。
「今度、高校生の投書を採用するといったのは、北川さんですか？」
と、十津川はきいた。
「そうです。他の投書もあったんです。北海道からも来ていましたが、北川先生が、四国の鳴門を書きたいといわれて、これにしようということになったんです」
「今月号の雑誌に、予告が出ていましたね」
「ええ。来月号から、半年間、連載していただくことになっていたんです。残念で仕方がありません」
青木は、本当に、残念そうにいった。
「予告に、鳴門の渦潮と列車トリックを売り物にすると、出ていましたが」
「ええ。北川先生の場合は、それが売り物ですから」
と、青木はいった。
「それで、今回は、どんな列車トリックになる予定だったんですか？」
と、十津川はきいた。
青木は、溜息をついて、
「それが、わからないんですよ。北川先生の頭の中では、できていたはずなんですが」
「北川さんは、アリバイトリックを考えてから、取材に行かれる方でしたか？」
と、十津川はきいた。
「先生は忙しい方なので、ときには列車トリックがかたまらずに取材に行かれることもありましたが、たいていは、考えられてから、それに合わせて取材に行く方でした」



と、青木がいう。
十津川は、眼を光らせて、
「今、考えついた列車トリックに合わせて、取材をするといわれましたね？」
「ええ。それが自然だと思いますから、そういったんですが」
一瞬、青木が怯えたような顔になったのは、下手なことをいって、言質をとられては、と思ったのだろう。
十津川は、構わずに、相変わらず青木の顔を見すえるようにして、
「今度の四国行きも、当然、そうだったはずですね？」
と、きいた。
「ええ。そうです」
「すると、スケジュールを作ったのは、北川さんですか？」
「あれは、北川先生と久保君が、相談して作ったものです。切符の手配や旅館の予約はこちらでやりますが、何時の、何という列車に乗るかは、先生に決めていただきます。なにしろ、列車トリックを考えるのは、先生ですから」
と、青木はいった。
「五月二十三日ですが、午前七時〇四分東京発という早い列車に乗っていますが、これも、北川さんが指定したんですか？」
と、十津川はきいた。

3

「そうです。北川先生が、この列車にしたいといわれました」

と、青木はいった。

「なぜ、こんな早い新幹線にしたんですかね？　小説家というのは、夜型が多くて、朝早いのは苦手だとおもっていたんですが」

と、十津川がいうと、青木は微笑して、

「そのとおりで、朝早いのは苦手という作家の方は、多いんです。北川先生もそうなので、最初は、もっとおそい新幹線にしようということになっていたんです。ところが、急に、北川先生が、午前七時〇四分のひかりにしたいと、いってこられたんです」

「その理由は、聞きましたか？」

「ええ」

「北川さんは、何といいました？」

「取材できるのが、二泊三日だけだから、なるべく早く出かけて、第一日目も十分に鳴門を取材できるようにしたいと、いわれたんです」

「なるほど」

「私のほうは、北川先生が早く出かけてくだされば、ありがたいですから、すぐ、ご指定の列車にしました」

「そのときですが、正確に、北川さんはどういわれたんですか？　七時台のひかりで行きたいといったのか、それとも、七時〇四分のひかりにしたいといわれたんですか？」

と、十津川はきいた。

青木は、「どうだったかな」と考えていたが、

「確か、七時〇四分のひかりにしたいと、電話でいってこられたんだと思いますが、電話を受けたのが久保君ですから、はっきりとは申しあげられません」

「久保さんに、確かめておいてください」

と、十津川はいってから、

「北川さんは、今度書くことになっていた『阿波鳴門殺人事件』に、どんな列車トリックを考えていたのか、わかりますか？」

と、もう一度きいてみた。

「それが、今度の事件と、何か、関係があるんですか？」

青木が、十津川の真意を計りかねるという眼で見て、きいた。

「わかりませんが、北川さんのことは、なんでも知りたいと、思っているわけです」

「列車トリックですが、原稿ができてくるまで、わからないんですよ。北川先生は、これまでそうしてきたし、われわれも、そのほうが楽しみですからね」

と、青木はいう。

「スケジュール表によると、鳴門を取材したあと、松山へ行き、道後温泉に行くことになっていましたね？」

「そうです」

「松山と道後温泉も、小説の中に出てくることになっていたんですか？」

と、十津川はきいた。

「最初に、鳴門の渦潮を書くということが、決まったんです。例の高校生からのファンレターがありましたし、北川先生が、鳴門を書いてみたいといわれましたのでね。しかし、長篇なので、鳴門一カ所では、もたない。あと一、二カ所入れようということになりましてね。鳴門の近くだし、温泉もある。それに、夏目漱石の『坊っちゃん』のこともあるので、松山へ行ってみることにしたわけです」

「それは、東文社のほうで、松山、道後と、決めたわけですか？」

「うちで計画を立てまして、北川先生の了解を得ました」

「すると、こういうことになりますね。まず、鳴門市の高校生の投書があった。それを北川さんが見て、次の小説は、鳴門の渦潮を書くことが決まった。東京からは、午前七時〇四分発のひかりに乗ることになったが、これも、北川さんの提案だった。ここまでは、北川さんの提案といってもいいわけですね?」

十津川は、念を押すようにいった。

「そのとおりです」

「そのあと、東文社のほうで、鳴門だけでは、長篇にしては寂しいので、松山、道後を入れたほうがいいのではないかといい、北川さんが了解した。そうですね?」

「ええ。そのとおりですが、しかし、それが、事件とどんな関係があるんですか? 北川先生が書こうとしたのは、小説ですよ。それに反して、北川先生が殺されたのは、現実なんです。大きな違いだと思いますが」

青木は、怒ったような声でいった。十津川のいい方が、現実と小説の世界を一緒にしているように思え、不謹慎に感じたのかもしれない。

「よくわかっていますよ」

と、十津川はいった。

4

十津川と亀井は、東文社を出ると、近くの喫茶店に寄って、コーヒーを飲んだ。

この辺りには、東文社の他に出版社が何社かあるので、この店にも、編集者が入って来て、声高に話すのが、嫌でも十津川たちの耳に飛び込んできた。

「東文社の久保ちゃんは、どうなってるんだい？」
「警察は、相変わらず、疑ってるらしいよ」
「北川さんは、久保ちゃんと、うまくいってなかったのかね？」
「あの先生も、わがままだからなあ」
「おれが出版社を辞めたら、北川京介を殴りたいってのもいたと、聞いているがねえ」
「それ、あんたじゃないの？」
「あはは――」
そんな会話だった。無責任といえば、無責任な会話だった。
「私たちだって、どこかで、あんなふうにいわれているのかもしれませんな」
と、亀井が笑った。
どかどかと編集者たちが店を出て行って、急に静かになった。
「警部の考えを、聞かせていただけませんか」
と、亀井が改まった口調でいった。
「書かれなかった小説のストーリイに、私が拘っている理由かね？」
十津川が、きいた。
「そうです。青木次長もいっていましたが、北川京介が頭の中で考えていたことと、現実の死は、私も別のことだと思うんです。小説のストーリイどおりに殺人が行なわれたとでもいうのなら、話は別ですが」
と、亀井はいう。
「カメさん。私はね、煙草のことが、ずっと引っ掛かっているんだよ」
と、十津川はいった。
「北川が煙草を買ってきてくれといったという、久保の証言ですか？」

「そうだ」
「徳島県警は、あれを、犯人の証拠と見ていますがね」
「久保が嘘をついているというんだろう？」
「そうです。私も、嘘だと思いますね。現実に北川は煙草を持っていたんだから、久保に買いに行かせる必要はなかったわけです」
と、亀井はいった。
「だがねえ、カメさん。嘘としては、まずい嘘だとは思わないか」
「まあ、上手い嘘とは思えませんが――」
「ちょっと煙草を買ってきてくれというのは、あまりにもありふれた言葉だよ。久保は、出版社の編集者だ。それが、あんな下手な嘘をつくだろうかと、思ってね。久保は、北川京介と二人だけで、旅行していた。その片方が殺されれば、当然、もう一人が疑われてしまう。五、六分、離れていたといって、疑いが晴れるわけじゃない。そのくらいのことは、わかるはずだと思うんだよ。だから、よほど、強固なアリバイがない限り、二人で旅行中には、相手を殺せない。それは、わかっていたと思うね」
と、十津川はいった。
「すると、警部は、久保が本当のことをいっていると、思われるんですか？」
と、亀井がきいた。
「そこまでは断定できないよ。もし、久保が本当のことをいっているとしたらと、考えてみたんだ」
「その先は、どうなるんですか？」
「当然、北川京介は、なぜ、そんなことを、いったかということになる」
と、十津川はいった。
亀井は、じっと、十津川を見つめて、

「なぜだと、警部は、思われるんですか？」
「煙草を買いにやっても、せいぜい五、六分の時間しか稼げない。だが、北川京介には、その時間が必要だったことになる」
「なぜですかね？」
と、亀井がきいた。
「一つだけ、考えられることがあると思ったんだよ。それが、北川が書こうとしていた今度の小説のストーリイなんだ」
と、十津川がいった。
「つまり、北川の考えていたストーリイの中に煙草を買ってきてくれという場面があるのではないかというわけですか？」
亀井が、難しい顔できいた。
「北川がどんなストーリイを考えていたかは、私にはわからない。それで、私は、北川の小説をまとめて読んでみたんだよ。そして、一つの傾向があることがわかった。それが、列車トリックだよ。アリバイトリックだから、当然、身近にいる人間は犯人ではなく、一見、殺すことのできない場所にいる人間が、犯人ということになる」
と、十津川はいった。
「しかし、警部」
と、亀井が口を挟んだ。
「わかってるよ。小説のストーリイと、現実の殺人は、違うというわけだろう？」
十津川は、先廻りして、亀井にいった。
「そうです。警部の着眼は面白いと思いますが、あまりにも北川の考えていたストーリイに拘ると、肝心の殺人を見失ってしまうんじゃないかと、思ってしまうんですが」
亀井が、遠慮がちにいった。

「その危険は、よくわかっている」
と、十津川はいってから、
「だがね、不可解な煙草の件を説明するには、それを、北川京介のストーリイとして捕えるしかないんだよ」
と、つけ加えた。
「しかし、北川京介は、すでに死んでしまっています。彼がストーリイのメモを残しているという話も、聞いていません。列車トリックをすでに考えていたとしても、どんなものだったか、わかりませんよ」
亀井が、否定的ないい方をした。
「それを、推定することは、できないものだろうか？」
十津川は、煙草をくわえて、じっと考え込んだ。
「推定するといっても、前提が何もありませんよ。北川は、小説を一行も書かずに、殺されてしまったんですから」
「そうだろうか？」
「一行でも、書いていますか？」
「活字にはなっていないが、私は、少なくとも二つのことを書いていると思っているんだ」
と、十津川はいって、煙草に火をつけた。亀井は、スプーンを手に持って、弄びながら、
「北川が、久保と二人で、四国に取材に行ったことですか？」
と、きいた。
「取材に行ったこと自体ではなくて、北川の意志で、決めたことだよ。それが少なくとも二つあった。一つは、久保に、突然、煙草を買いに行かせたことだ」
「しかし、それは、久保がそういっているだけかもしれません。徳島県警の三浦警部は、今でも、かた

く、そう信じていますよ」
と、亀井がいった。十津川は苦笑して、
「そうだったな。それでは、これは仮定としておこう。もう一つは、五月二十三日の午前七時〇四分のひかりに乗ったことだ。青木次長の話では、北川がわざわざ電話して、この列車にしたいといったんだといっている」
「これは、私も、興味を持ちました。朝が弱いはずの作家が、なぜ、こんな早い列車を指定したのか、不思議でした」
「それも七時台の列車なら、どれでもいいのではなく、七時〇四分のひかりと指定しているんだ。それで、東文社では、東京をこの列車で出発するスケジュールを立てている。鳴門のあとは、東文社が勝手にスケジュールを立てたということだから、北川が今度書く小説のミソは、鳴門までと考えていた、と思うんだよ。題名も、阿波鳴門殺人事件となっていて、四国殺人事件じゃないからね」
と、十津川はいった。
「ちょっと待っていてください」
突然、亀井は立ち上がり、店を出て行ったと思うと、時刻表を買って、戻って来た。
「近くに本屋があったので、助かりました」
と、いいながら、亀井は四国の地図のページを開いた。
十津川も、そのページに眼をやった。
「一つ、大胆な仮説を立てるとね、北川京介が、鳴門で殺されたが、彼が書こうとしていた『阿波鳴門殺人事件』でも、同じ場所で、殺人が起きることになっていたんじゃないだろうか？」
「それは、面白いですね。大いに興味がありますよ」

亀井が、膝を乗り出すようにしていった。

そのとき、また話し声がして、どやどやと、五、六人の男たちが入って来た。さっきとは違う出版社の連中らしかった。

「カメさん。他へ行こう」

と、十津川は立ち上がった。

5

外は、思いがけず、暑かった。二人は、すいている喫茶店を探した。調布まで帰って、ゆっくりと考えるという気には、なれなかったからである。一刻も早く、十津川は、自分の考えをまとめたかったのだ。

十二、三分も歩き廻った末、やっと、すいている喫茶店を見つけて中に入り、さっきの続きを始めた。

十津川は、五月二十三日取材の、東京から鳴門までのルートを、手帳に書き出してみた。

北川京介が殺されるまでと、いいかえてもいい。

東京発　7：04
↓ひかり73号
岡山着　11：20
発　11：28
↓うずしお7号
池谷着　13：30
発　13：43
↓鳴門線
鳴門着　14：01
鳴門駅
↓タクシー
鳴門公園着14：30～40

「この直後に、北川京介は殺されているんだ」

と、十津川は、自分の書いたメモを見ながらいった。

「列車トリックを使った殺人といいますと、被害者の傍にいた人間は、たいてい犯人ではありませんね」

と、亀井が、急に熱心な調子になって、メモをのぞき込んだ。
「そうだよ。だから、久保は、犯人じゃないんだ。北川京介が、これを小説に書いたとするとね」
と、十津川はいった。
「現場の鳴門から、遠く離れた場所にいたはずの人間が、犯人ですね。彼の小説のパターンとしては」
「そうだ」
「とすると、久保を除いた三人の中の一人ということになりますね。北川の妻の北川まゆみ、ホステスの太刀川ゆき、そして、大学生の有沢の中の一人に」
「そうなるね」
十津川は、大きく肯いた。
「この三人は、いずれも、五月二十三日のアリバイはあいまいです」
と、亀井はいった。
「それが、ネックなんだよ」
と、いって、十津川は肩をすくめた。
「と、いいますと？」
「北川の作品では、強固なアリバイを持っている人間が、犯人なんだよ。例えば、四国で殺人があったとき、北海道で列車に乗っていた人間が、犯人だというようにね」
「わかります。私が読んだ北川京介の本でも、九州で殺人が起きたとき、犯人は、新潟にいたことになっていて、それが、強固なアリバイというものでした」
と、亀井もいった。
「ところが、肝心の三人のアリバイが、やたらにあいまいなんだよ。一日じゅう自宅アパートで寝ていたとか、仕事場で一人で仕事をしていたとかね。こ

れでは、アリバイ崩しの小説にはならない」
「それは、小説ではなく、現実の事件だからじゃありませんか？」
と、亀井がいった。
十津川は、肯いて、
「この三人のうち、犯人ではない二人は、カメさんのいうとおり、現実の事件だから、あいまいなのは当然だと思う。しかし、もし、犯人が北川京介の考えたアリバイトリックを利用して彼を殺したとすれば、その人間のアリバイは具体的で、はっきりしたもののはずなんだよ」
「なるほど」
と、亀井は肯いたが、すぐ言葉を続けて、
「しかし、現実には、三人とも、アリバイは、同じようにあいまいですよ」
「これでは、北川京介の小説は、成立しないよ。参ったな」
十津川は、溜息をついた。
「やはり、今度の事件は、北川京介の小説とは、関係なく起きたんじゃありませんか？」
と、亀井はいった。
「久保守に、会ってみよう」
と、十津川はいった。

第四章　新大阪駅

1

「久保に会う前に、警部に、一つだけ確認しておきたいことがあるんですが」
亀井が、妙に思いつめたような顔でいった。
十津川は、パトカーに戻りながら、
「カメさんが、何をいいたいか、想像がつくよ」
「本当ですか？」
「ああ、カメさんと、長い間、コンビを組んでいる人間だからね」
と、十津川はいった。
パトカーに戻り、並んで腰を下ろす。亀井は、車をスタートさせた。
「久保守は、あくまでも容疑者の一人だ。だから、彼の言葉をそのまま鵜呑みにすると、大変なことになる。カメさんは、それをいいたいんだろう？　そのつもりで、久保のいうことを聞く。それを、確認しておきたいとね」
「そのとおりです。それに、徳島県警は、久保を犯人と考えています。その人間の言葉を、われわれが信用して捜査を進めると、徳島県警と、衝突することになります」
「久保自身に有利な証言は、眉に唾して聞くよ」

と、十津川はいった。
「それなら、安心です」
と、亀井はいった。
吉祥寺の久保のマンションに着いたときは、陽が落ちて、少しは涼しくなっていた。
久保は、部屋にいてくれた。
かたい表情で十津川たちを迎えたのは、警察に対して、不信の念を持っているからだろう。それとも、真犯人だからか。
「今日は、何を聞きに来たんですか？」
と、久保は、二人を睨むように見ていった。
「北川京介さんが、どんなストーリイの小説を書こうとしていたのか、それを知りたいんですよ。阿波鳴門を舞台にしてです。北川さんから、話を聞いていませんか？」
と、十津川がまずきいた。
久保は、小さく頭を横に振って、
「全然、聞いていませんよ。北川先生は、書き出すまで、まったく内容を知らせてくれない作家だったんです」
「何か、ヒントといったものもですか？」
と、亀井がきいた。
「何も聞いていませんよ。北川先生は、話すと気が抜けてしまうし、もう書いたような気になってしまうからといって、書くまで、まったく話してくれないんですよ」
「しかし、取材旅行は参考にして、書いていたわけでしょう？」
と、十津川はきいた。
「そうです。もちろん、取材した一部が使われるわけで、全部が作品に生かされるわけじゃありませんが」

「午前七時〇四分の『ひかり73号』に乗るのは、北川さんが指定したこととすると、この列車は、小説でも使う気だったんじゃありませんか？」
と、十津川は具体的にきいていった。
「ええ。そう思います」
「あと、北川さんが指定したことは、何だったんですか？」
「あとですか？」
と、久保は考えていたが、
「ありませんね」
「鳴門駅から、鳴門公園に行くのに、タクシーを使ったのは、北川さんの指示じゃなかったんですか？」
「いや、先生は、バスでもタクシーでもいいといわれたんですが、面倒くさいので、私がタクシーにしたんです」
と、久保はいう。
これでは、十津川の思うようなストーリイにはなってこない。
「あなたは、北川まゆみさんを知っていますか？」
と、十津川はきいた。
「もちろん知っていますよ。北川先生の奥さんでしょう。お宅に伺ったとき、何回かお会いしていますから」
「太刀川ゆきも、知っていますね？」
「ええ、知っています」
「有沢哲也と小西麻子は、どうですか？」
「有沢哲也と小西麻子ですか？」
と、久保は、おうむ返しにいってから、急に「ああ」と肯いて、
「女性のほうは、深大寺で殺されていた人でしょう？」
「そうです。会ったことはありますか？」

「いや、ありません」
「有沢という彼女のボーイフレンドは、どうですか？」
「それも知りませんよ」
「この男です」
と、十津川は、有沢の顔写真を取り出して、久保に見せた。
久保は、それに眼をやったが、首をかしげて、
「なぜ、僕に見せるんですか？」
「北川京介さんが、どんなストーリイの阿波鳴門殺人事件を書きたかったのか、それを知りたいんですよ」
と、十津川はいった。
久保は、呆れたという顔になって、
「そんな小説のことより、今の事件を解決するほうが、警察の仕事じゃないんですか？」
「今度の事件は、ひょっとすると、北川さんの小説が基礎になっているかもしれないと、思っているんですよ」
「まさか――」
「北川さんは、今度の作品でも、列車トリックを作品に入れるつもりだったわけでしょう？」
「それが売り物ですから」
「それで、わざわざ、早朝七時〇四分発の『ひかり73号』に、乗った。列車の中で、何かありませんでしたか？」
と、十津川はきいた。
「何かというと、どういうことですか？」
「北川さんが、列車の中で、電話をかけるとか、乗客の誰かに、声をかけるとか、そういうことですよ」
「そういうことは、ありませんでしたね。昼食は、

高松で買った駅弁を食べましたし――」
と、久保は呟くようにいっていたが、
「ああ、北川先生の奥さんと、車内で一緒になりましたよ」
「何だって！」
突然、十津川が大声を出したので、久保のほうが、びっくりした顔になった。
「どうなされたんですか？」
「なぜ、そんな大事なことを、今まで黙っていたんですか？」
十津川は、相変わらず、大声できいた。
「事件に関係ないと思ったので、いわなかったんです」
「北川まゆみさんは、東京駅から、一緒に『ひかり73号』に乗ったんですか？」
「いや、名古屋から乗って来たんです。僕と、ご主人が乗っていたので、びっくりした顔をされていましたね。偶然、同じ列車になったからでしょう」
「十六両もあるのに、一緒になったんですか？」
と、亀井がきくと、久保は笑って、
「でも、グリーン車は二両だけですから」
「それで、北川まゆみさんは、どこまで乗って行ったんですか？」
と、十津川がきいた。
「新大阪までです」
「それ、間違いないですか？」
「ええ。ちゃんと新大阪で降りられましたし、ホームから僕たちを見送ってくれましたよ。手を振って」
と、久保はいった。
「名古屋や新大阪で、何をしているんだろう？」
「インテリア・デザインの仕事ですよ。北川先生の

奥さんも、最近は、その方面で売れっ子のようですから」

「他に、列車の中で会った人はいませんか？　クラブ『かつら』の太刀川ゆきさんは、どうですか？」

「会っていませんね」

「この有沢という男は、どうですか？」

「会っていても、覚えていませんよ。今日、初めて写真を見たんですから」

と、久保は文句をいった。

「北川さんに、車内でサインを求めた人はいなかったんですか？」

「なぜですか？」

「その中に、この有沢がいたんじゃないかと思いましてね」

「ときどき中、高生の中に、北川先生のファンがいて、車内でサインをせがまれることがありますが、五月二十三日はありませんでしたね」

と、久保はいった。

2

「次は、当然、北川まゆみにお会いになるんでしょう？」

と、亀井が外に出たところで十津川にいった。

「もちろんだよ。彼女に会って、なぜ嘘をついたか、聞いてみなきゃならないからね」

と、十津川は厳しい顔でいった。

パトカーで、急いだ。

北川まゆみは、自宅のほうではなく、仕事場のほうにいた。

「自宅のほうは、主人との思い出があって、辛いもんですから」

と、まゆみは十津川たちにいった。
十津川は、前とは違った意識で、彼女を見つめた。美人だなと思った。頭もよさそうである。それだけに、気位も高いだろう。
「あなたは、われわれに嘘をつきましたね」
十津川は、相手をまっすぐに見つめていった。が、まゆみの顔には、別に狼狽の色は浮かばなかった。
「嘘って、何のことでしょう？」
と、小さく首をかしげてきいた。
「五月二十三日のアリバイですよ。あなたは、五月二十三日は、この仕事場に一日じゅういたといわれた。しかし、ご主人と同じ列車に乗って、新大阪へ行かれたんでしょう？」
十津川がいうと、まゆみは、あっさりと、
「ええ」
と、肯いた。
十津川は、眉を寄せて、
「なぜ、嘘をついたんですか？」
「それは、久保さんのことを考えたからですわ」
と、まゆみはいう。
「どういうことなんですか？　それは」
亀井が、きいた。
まゆみは、二人にも出した紅茶をゆっくり口に運んでから、
「あの日、私が名古屋から新幹線に乗って、グリーン車に行ったら、ちょうど、主人と久保さんに会ったんです。それで、ちょっと話をしたりして、私は、新大阪で降りましたわ。そのことは、きっと、久保さんが警察にも話していると思っていたんです。それなのに、刑事さんが、まったくそのことに触れないので、きっと、久保さんが、わざといわなかったんだと考えたんですわ。何か、都合が悪いことがあ

って、私のことは話さなかったんじゃないか。新幹線の中では、知っている人間には会わなかったと、久保さんは、警察に証言しているに違いない。そう思ったので、つい嘘をついてしまったんですわ」

と、いった。

落ち着いた口調だった。

「新大阪には、何をしに行かれたんですか？」

と、亀井がきいた。

「大阪のMデパートで、二十二日から開かれているアメリカンデザイン展を見に行ったんですよ。どうしても、見たかったんです」

「そのあと、どうされたんですか？」

と、これは、十津川がきいた。

「大阪にお友だちがいるので、電話をかけて、夕食を一緒にして、そのあと、新幹線で東京に帰りましたわ。帰ったのは、十二時頃だったと思いますけど」

「大阪のお友だちの名前を、教えていただけますか？」

「ええ。この人ですわ。久しぶりに会って、名刺を貰ってきましたの」

と、いい、まゆみは、名刺を見せてくれた。

〈大阪版画クラブ　佐々木リエ〉

とあり、電話番号も書いてあった。

十津川は、それを手帳に書き写した。

「名古屋では、何をしていたんですか？」

と、十津川は、手帳をしまって、まゆみにきいた。

「インテリア・デザインの仕事ですわ。新しく開店する宝石店のインテリアを監督してきたんです。そのお客の名前も、申し上げましょうか？」

「いや、それは結構です」

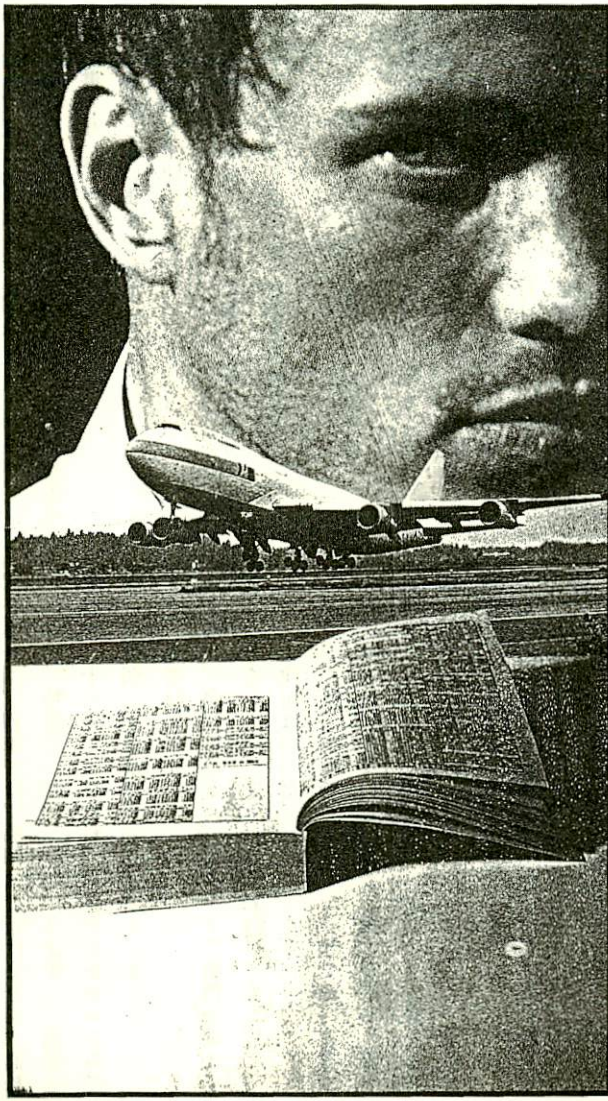
と、十津川はいった。
五月二十二日のことは、事件には関係ないと思ったからである。
十津川は、まゆみと別れて、捜査本部に戻ると、大阪の佐々木リエに電話をかけてみた。
少し、女にしては低い、落ち着いた声がはね返ってきた。
「ええ。まゆみさんと、五月二十三日にひさしぶりに会って、夕食を一緒にしましたわ」
と、佐々木リエはいった。
「何時に、会われたんですか？」
「午後七時に、梅田の駅前で会って、私の知っている店に行きましたわ。『広沢』という串カツのおいしい店ですけど」
「彼女が、電話してきたんですか？」
「ええ。二十三日の午後二時に電話してきて、今日、大阪のMデパートでやっているアメリカンデザイン展を見に来ている。夕方会いたいというんで、久しぶりに会ったんです。正午にも電話をくれたんですけど、そのとき、私が事務所にいなくて、受付の女の子が聞いておいてくれたんです」
「あなたも、Mデパートのアメリカンデザイン展というのを、ご覧になりましたか？」
「ええ。なかなか、いいものでしたわ」
「北川まゆみさんが、わざわざ見に来るだけのものが、ありましたか？」
「ええ。現代アメリカを代表するデザインばかりで、彼女が見たいと思うのは、当然だと思いましたわ」
「すると、夕食のとき、当然、そのデザイン展のことが、話題になったんじゃありませんか？」
と、十津川はきいてみた。
「ええ。なりましたわ。彼女が、デザイン展で、き

れいなアメリカンデザインブックを買ってきたんで、それを見ながらでしたわ」
「そのデザインブックは、Mデパートの会場で売っているわけですか？」
「ええ。五千円と高いから、私は買いませんでしたけど」
「久しぶりといわれましたが、どのくらい会ってなかったんですか？」
と、十津川はきいた。
相手は、ちょっと考えているようだったが、
「三年ぶりだったかしら」
「彼女、以前と、変わっていましたか？」
「ますますきれいになって、有名になって、ひと廻り大きくなったなと思いましたわ」
「インテリア・デザイナーとして、有名なんですか？」
「ええ。才能があるという評判ですよ」
「ご主人が、作家の北川京介さんだということは、ご存じですね？」
「ええ。もちろん。北川さん亡くなったんでしょう。忙しくて、東京に行けないんで、彼女に、お悔やみの電報を打ったんです。電話しようと思ったんですけど、電話番号を忘れてしまって」
と、佐々木リエはいった。
「五月二十三日に、夕食を一緒にされたとき、北川京介さんのことは、話に出しましたか？」
と、十津川は聞いてみた。
「もちろん出ましたよ。そしたら、四国に取材旅行に行っていると、彼女はいっていました。まさか、その四国で亡くなるなんて――」
「彼女と北川京介さんの夫婦仲は、上手くいっていたんでしょうか？」

「さあ、今もいったように、三年間も会ってませんでしたから、私にはわかりませんわ」
と、リエはいった。

3

電話を切ると、十津川は、亀井に向かって、
「これで、上手く列車トリックを考えつくといいんだがね」
と、いった。
「新大阪で降りた北川まゆみが、果たして、鳴門へ行き、夫の北川を殺せるかどうかですね？」
と、亀井がきいた。
「二十三日の午後二時四〇分から三時の間にね」
「調べてみましょう」
亀井も乗り気になってきた。
北川まゆみは、夫の北川京介たちの乗った「ひかり73号」を、新大阪で降りた。
それは、久保が確認している。
とすると、彼女が犯人なら、北川たちの乗った「ひかり73号」を、追いかける形になってしまうのだ。
とすれば、新幹線より早い飛行機を利用する以外にない。
「大阪から、四国へ行く飛行機を、使ったんだよ」
と、十津川はいった。
亀井は、時刻表を見ていたが、
「大阪から四国だと、考えられるのは、大阪―徳島と、大阪―高松の二つの便ですね」
と、いった。
「二つの便の時間は？」
と、十津川がきいた。



「ええと、適当なのがありますかね」
と、亀井は呟きながら、二つのルートの時刻表を手帳に書き写していたが、
「この便だと思いますがね」
と、手帳を十津川に見せた。
○大阪一一時五〇分→徳島一二時二〇分
一三時三五分→徳島一四時〇五分
○大阪一三時〇〇分→高松一三時四五分
それを、十津川は、じっと見ていたが、
「北川が、鳴門公園で殺されたのは、一四時四〇分から一五時の間だ。高松に一三時四五分に着いて、鳴門まで一時間十五分内で行けるだろうか？」
「飛行機が空港に着いて、空港の外に出るまでに、十五分はかかります。とすると、一時間の余裕しかありません。列車では、鳴門まで行けません。高松―池谷が、特急で一時間三分かかりますし、池谷―鳴門が、十七分ですからね。乗りかえをゼロとみても、一時間二十分かかってしまうんです」
と、亀井はいった。
「すると、高松空港から、タクシーで鳴門公園まで行くよりないということになるね」
と、十津川はいった。
「タクシーは、無理でしょう。一時間で鳴門公園まで行けるとは思えないし、第一、高松空港から鳴門公園までタクシーを飛ばせば、目立って、運転手に顔を覚えられてしまいます。レンタカーは、運転免許証を見せなければなりませんしね」
「すると、大阪→徳島のルートということになるね」
十津川は、地図を見ながら、いった。

亀井は、時刻表を見ていたが、
「こちらなら、楽に間に合いますよ」
「そうだね。徳島空港に一二時二〇分に着けば、JR徳島駅に、十三時にはゆっくり行ける。十五時まで、あと二時間あるからね。徳島―池谷―鳴門と、列車を乗りついでも間に合うね」
「一四時〇五分着の航空便でも、タクシーでぎりぎり、間に合うかもしれませんよ」
と、亀井はいった。
北川まゆみは、五月二十三日、「ひかり73号」を、新大阪で降りた。この時刻が、一〇時〇四分である。
新大阪から大阪空港まで、車で二十五分かかるとされている。それを三十分とみても、一〇時三四分。いや、新幹線から降りて、駅前に出るまで、十五、六分かかるとみて、一〇時五〇分には、大阪空港に着けるはずである。
とすれば、一一時五〇分の飛行機にも、ゆっくりと乗ることができるのだ。
「これで、決まりですね」
亀井が、ニッコリ笑っていった。

4

「死んだ北川京介が考えていたアリバイトリックは、これだったということになってくるね」
と、十津川もいった。
「なかなか、面白いストーリイだと思いますよ」
と、亀井はいった。
北川京介が、「阿波鳴門殺人事件」の主人公を、作家にするつもりだったかどうかは、わからない。
今までの彼の作品を見ると、作家を主人公にはしないだろう。

それはともかく、主人公は、四国の鳴門に来て、渦潮を見物している最中に、何者かに殺される。

彼は、東京を午前七時〇四分発の「ひかり73号」で、出発した。その車中で、知り合いに会う。それを、主人公の妻とするつもりだったかどうかもわからない。友人にする気だったかもしれないし、恋人にする気だったかもしれないが、主人公のよく知っている人間なのだ。

その男（女）は、新大阪に用があるといって、降りて行く。だから、主人公が鳴門で殺されたとき、容疑圏外になってしまった。

北川の小説の探偵役は、私立探偵の沢木である。

今回も、沢木がアリバイ崩しに挑戦し、容疑圏外にいる男（女）が、真犯人であることを証明するはずだったのだろう。

「北川京介は、きっと、自分のアリバイトリックを、取材に同行している久保に見せて、『どうだ』と、いいたかったんだと思うね」

と、十津川はいった。

「そうなると、煙草の件は、久保のいうとおり、北川が煙草を買ってきてくれと、頼んだことになりますね」

と、亀井がいう。

十津川は、大きく肯いて、

「そのとおりさ。新幹線の中で一緒になり、新大阪で降りた妻のまゆみは、われわれが考えたように、大阪→徳島を飛行機で来て、鳴門公園に先廻りしていたんだ。北川は、わざと、久保を煙草を買いにやった。その間に、近くに隠れていた妻のまゆみを呼び寄せる。煙草を買ってきた久保は、新大阪で降りたはずの北川の妻がいるので、びっくりする。北川はニヤッとして、『これが、今度の小説のアリバイ

トリックだよ』という。北川は、そうやりたかったんじゃないかな」

「それを、まゆみが逆手に取って、というか、北川の考えたアリバイトリックを利用して、夫の北川を殺したということですね？」

と、亀井が眼をきらきら光らせていった。

「北川京介は、妻のまゆみに、自分の考えたアリバイトリックを話し、久保をあっといわせるのを手伝ってくれと、頼んでいたんだと思うね。だから、まゆみは、名古屋から同じ列車に乗って来て、グリーン車に行き、久保に挨拶したんだ。そのうえ、新大阪で降り、ホームから手を振った。間違いなく、新大阪で降りたことを、久保に認識させるためだよ。そして、鳴門公園に、突然、新大阪で降りたはずのまゆみが現われて、久保をびっくりさせる。北川が、そこで、自分の考えたアリバイトリックを、自慢気に久保に話す。子供っぽいといえば、子供っぽい悪戯だ。いや、悪戯のはずだった」

「ところが、まゆみは、夫の北川を憎んでいて、このチャンスを利用して、殺すことを考えたというわけですね」

「アリバイは、夫が考えてくれたし、それに、きっと、取材に同行している久保に、疑いが行くだろうという計算もあったんじゃないかね」

「まゆみは、夫を殺したあと、大阪に戻り、何くわぬ顔で友人の佐々木リエに会って、夕食を取り、アリバイをより強固なものにしたというわけですね」

「午後三時に北川を殺したとして、四時間あれば、大阪に戻れるだろう」

「一七時四五分徳島空港発の大阪行きの飛行機があります。これに乗れば、一八時二〇分に大阪に着きますから、午後七時（一九時）に、梅田で友人に会

うことができます」
と、亀井はいった。
「これで、完璧か」
十津川は、ほっとして、煙草に火をつけた。
だが、興奮が醒めてくると、十津川の表情は、厳しいものになってきた。
北川まゆみが犯人だとすれば、そのアリバイは、崩すことができた。
だが、それで、彼女を犯人と決めつけて、逮捕できるかといえば、そうはいかないからだった。
北川京介が考えていたストーリイは、そのとおりかもしれない。しかし、現実は、そのとおりだとは限らないといわれるだろう。少なくとも、北川まゆみはそういうに決まっているし、それに反論はできそうもない。
北川まゆみだけではない。徳島県警の三浦警部だって、同じことをいうだろう。小説のストーリイとしては面白いが、現実は違いますよとである。
「北川まゆみに、もう一度、会いますか？」
と、亀井がきいた。
「いや、彼女は、否定するに決まっているさ、現実は違うとね」
「それでは、大阪→徳島便の乗客を、洗ってみますか？　五月二十三日の一一時五〇分の便と、一三時三五分の便の乗客です。われわれの推理が正しければ、どちらかの便に、北川まゆみが必ず乗っていますよ」
「乗っているとしても、偽名だろうね」
「そう思います。しかし、警部。この便に使われている飛行機はＹＳで、定員は六十四名です。少ないから、スチュアーデスが顔を覚えているかもしれません。北川まゆみの写真を送って、大阪府警に調べ

てもらったらどうでしょうか？」

「やってみるか」

と、十津川はいった。

すぐ、大阪府警に協力依頼の電話を入れた。

北川まゆみの写真も送った。

翌日、問題の二つの便の乗客名簿のコピーが送られてきた。

ただ、それには、次のような文章が、書き加えられていた。

〈五月二十三日の二つの便のスチュアーデスに、写真を見せて聞きましたが、彼女たちは、写真の女性に記憶がないと証言しています。念のため、二つの便の乗客名簿のコピーを送りますが、スチュアーデスたちの証言は、信用してよいと考えます。

大阪府警本部　増田和郎（ますだかずお）〉

「どう思うね？」

と、十津川はこれを亀井に見せてきいた。

「北川まゆみが犯人なら、このどちらかに、乗っていたはずです。新幹線より早い列車はありませんから、飛行機を使ったに違いないからです」

「スチュアーデスの証言は、信用できないということかね？」

「そうです」

「あとは、この乗客名簿を、一人ずつ当たってみるより仕方がないんだが」

十津川は、両方で百名を越える乗客の名簿に、眼をやった。

この中に、北川まゆみの偽名があるのだろうか？

いや、彼女が犯人なら、必ずこの中にいるはずなのだ。亀井のいうとおり、新幹線で先に行った人間を追いかけるには、飛行機を使う以外にないからであ

る。
もちろん、乗客名簿の全員を調べる必要はない。男の乗客がいるからだ。女性は、全部で三十六名。
（この中に、北川まゆみがいるのだろうか？）
「西本刑事たちにも手伝わせて、やりましょう」
と、亀井がいった。
「ちょっと待ってくれ」
と、十津川が急にいった。
「どうされたんですか？　この三十六人の女性客の中に、必ず北川まゆみがいるはずですよ」
「いるだろうか？」
「警部。どうして、急に弱気になられたんですか？」
亀井が、不思議そうに十津川を見た。
「どうも、この中に、北川まゆみはいないような気がしてきたんだよ」
「スチュアーデスの眼を、信用されるわけですか？彼女たちだって、乗客全員の顔を、一人一人、はっきり覚えているとは限りませんよ。それに、北川まゆみが犯人なら、髪形をわざと変えて、乗ったかもしれません」
「そうじゃないんだ」
と、十津川は手を振った。
「どういうことですか？」
「北川京介のこれまでの小説のことを、考えていたんだよ。アリバイトリックが、どんなものだったかなと思ってね」
「――――」
亀井は、十津川が、何をいいだすのかという顔で、見守っている。
「まあ、つまらないものもあるが、それでも、ひとひねりしてある。その、ひねりが人気なんだろうと

思うんだよ」

「それと、今度の事件と、どんな関係があるんですか？」

「北川まゆみが、犯人だとしてみよう。同じ新幹線に乗っていた彼女が、新大阪で降りたあと、どうやって、先行する北川京介を鳴門で殺せるかということになっている」

「結構、面白い設定だと思いますが――」

「しかし、われわれが見つけた解答を、考え直してみようじゃないか。新幹線より早いものといえば、子供だって、飛行機を考えるよ。そして、時刻表を見れば、大阪→徳島便が出ている。これに乗れば、ゆっくりと間に合ってしまう。間に合う飛行機が二便もあるんだ」

「そのとおりですが――」

「これじゃあ、ひねりも何もないと、思わないかね？　推理作家の考えるアリバイトリックとしては、お粗末だよ」

と、十津川は重い口調でいった。

「しかし、簡単ですが、犯人はこのとおりに行動したかもしれません」

「いや、違うね」

「なぜですか？」

「北川まゆみが、犯人としよう。彼女は、頭のいい女性だよ。そんな女性が、こんな簡単な、すぐ解明されてしまうようなアリバイトリックを頼りに、殺人を犯すだろうか？　私が彼女なら、危なくて、絶対に実行には走らないがね」

「それはわかりますが、現実に、北川は、鳴門で殺されていますし、北川まゆみは、新大阪で降りていて、大阪→徳島便を利用すれば、殺人は可能です。つまり、彼女には、アリバイがないわけですよ。逮

捕しようと思えば、逮捕できるんです。逮捕された場合、彼女が、自分のアリバイを、改めて証明せざるを得ないわけです」

と、亀井はいった。

十津川は、また、いやいやをするように、頭を振った。

（何か違うのだ）

という思いがあったからである。

「ちょっと、考えさせてくれ」

と、十津川はいい、腕組んで考え込んだ。何か、見過ごしたことがあるような気がして、仕方がないのである。

（何を見過ごしているのだろうか？）

亀井は、十津川の考えを邪魔しないように、黙って立ち上がると、コーヒーをいれ始めた。

「何か忘れているんだ」

と、十津川は声に出して呟いた。

彼は、必死になって、北川まゆみと会って、話をしたときのことを、思い出そうと努めた。

彼女は、五月二十三日、大阪でアメリカンデザイン展を見、夕方は、友人の佐々木リエという版画家と、食事をしたと証言している。それを確かめるために、彼女にも電話したのだ。

（何を話したのだったろうか？）

何か、アリバイ証明につながることを、北川まゆみが、いったのではなかったろうか？

それとも、佐々木リエの証言の中だったろうか？

「電話だ！」

突然、十津川が大声で叫んだ。

5

「電話って、何ですか？」
亀井が、コーヒーカップを、十津川の前に置きながら、きいた。
「電話だよ、カメさん。五月二十三日、大阪で、北川まゆみは、二度、友人の佐々木リエに、電話をかけているんだよ。正午と、午後二時の二回だ」
「ええ。佐々木リエは、そう証言していましたね」
「それが、問題なんだよ！」
と、十津川はまた大声を出した。
「しかし、その電話が、必ずしも大阪からかけたとは限りませんよ。例えば、午後二時に佐々木リエに電話をかけていて、それが、午後二時に、大阪にいたことの証明になると、当人は、思っているのかもしれませんが、鳴門から、いかにも大阪にいるように装ってかけたとしても、大阪にいたという証明にはなりませんよ」
「違うんだよ。カメさん」
十津川は、いらいらするという顔で、強くいった。
「しかし、警部――」
「どこから電話したなんてことは、関係ないんだよ。大阪で電話したかどうかなんて、問題じゃないんだ」
「何が、問題なんですか？」
「時刻だよ。正午と午後二時の二回ということが、大事なんだ」
「まだ、よくわかりませんが――」
「これだよ、これ」
と、いいながら、十津川は、黒板のところに行き、大阪↓徳島便の時刻を書き出した。

大阪一一時五〇分――→徳島一二時二〇分
大阪一三時三五分――→徳島一四時〇五分

「この二便のどちらかで、北川まゆみは鳴門へ行って、夫の北川京介を殺したと、われわれは考えているんだ」

と、十津川は亀井にいった。

「そのとおりです」

「まだ、わからないかね？　飛行機の飛んでいる時間を考えてくれよ、カメさん」

「あッ！」

と、今度は亀井が大声をあげた。

十津川は、ニヤッとして、

「そうなんだよ、カメさん。正午と午後二時は、どちらかの飛行機の中なんだ。そして、飛行機、特にYSの機内からは、電話はかけられないんだ」

「まずいですね。まずいですよ」

「いや、私は、かえって、ほっとしているんだ。あんなに簡単なアリバイトリックでは、おかしいと思ったんだよ。それが売り物の北川京介らしくないんだ」

「しかし、小説と、現実は――」

「現実にだって、北川まゆみのアリバイは、崩れなかったんだ」

と、十津川はいった。

亀井は、自分のカップにも、コーヒーを注いだ。

「警部。新幹線を追っかけられるのは、飛行機だけです。その飛行機が駄目だとすると、北川まゆみは、シロということになってしまいますよ」

「ああ、わかってる」

「徳島県警の三浦警部のいうように、久保守が、犯人ということでしょうか？」

「いや、そう断定はできないよ」

「すると、正午と午後二時に、佐々木リエに電話したというのは、嘘でしょうか？」

「嘘？」
「そうです。誰かに、正午と午後二時に電話してくれと頼んでおいて、自分は、徳島行きの飛行機に乗ったんじゃないでしょうか？」
「佐々木リエは、親友だったんだ。まゆみの声を聞き違えたりはしないだろう」
「それは、午後二時ですよ。正午のほうが問題です。佐々木リエはいなくて、事務所の女の子が電話を受けています」
「しかしねえ、カメさん。正午のとき、たまたま佐々木リエが留守だったが、もし事務所にいたら、たちまち他人と見破られて、アリバイトリックは崩壊してしまうよ。だから、私は、二回とも、北川まゆみ本人が電話したと思っている」
「そうすると、アリバイが成立してしまいますよ」
「ああ、そうだ」
「久保守ですか？」
「他にも、二人いるよ」
「そうでした。三人です。三人を、もう一度、調べ直しますか？　久保は、アリバイは、ないに等しいし、あとの二人は、あいまいです」
「やってみよう」
と、十津川はいった。
徳島県警の三浦には、もう一度、鳴門公園周辺の聞き込みを頼んだ。
「特に、太刀川ゆきと、有沢哲也のどちらかを、五月二十三日に目撃した者がいなかったかどうか、それを知りたいんですよ」
と、十津川はいった。
「北川まゆみは、いいんですか？」
と、三浦がきいた。
「彼女には、アリバイが成立したので、それを、崩

さなければなりません」
と、十津川は正直にいった。
三浦は、嬉しそうに、
「そうなると、やはり、久保守が、犯人の可能性が大きいわけですね？」
と、電話の向こうでいった。
「とにかく、目撃者を見つけてください」
と、十津川は頼んだ。
その一方で、亀井たちは、もう一度、太刀川ゆきと有沢哲也の周辺を捜査し始めた。
太刀川ゆきについていえば、果たして、彼女が、殺したいほど、北川京介を憎んでいたか、五月二十三日に、果たして、日中、自宅マンションにいたかどうかということである。
有沢哲也の場合も、同じだった。彼の叔父の自殺の原因を、北川京介にあると考え、本当に彼を憎んでいたか、二十三日は、一日じゅう自宅アパートにいたかである。それに、有沢の場合は、ガールフレンド小西麻子のこともあった。殺された彼女のことも、調べ直す必要があったのである。
最初にわかったのは、太刀川ゆきのことだった。
「彼女には、アリバイがありました」
と、西本刑事が帰って来て、十津川に報告した。
「どんなアリバイなんだ？」
「五月二十三日の午後一時五十分頃、外から、彼女に電話が入っていたんです」
「おかしいな。そんな電話があったのなら、なぜ彼女は、今までにいわなかったんだろう？　自分のアリバイになるんだから」
と、十津川はいった。
「多分、忘れていたんだと思います」
「彼女が、思い出して、君にいったんじゃないの

か？」

「違います。こちらで発見したアリバイです」

「くわしく、話してくれ」

と、十津川はいった。

「五月二十三日から二十四日にかけて、彼女の住むマンション周辺に、K証券が、片っ端から株を買いませんかという勧誘の電話をかけまくっていたことが、わかったんです。それで、ひょっとすると、五月二十三日に、K証券が太刀川ゆきにも勧誘の電話をかけているかもしれないと思ったのです。それで、K証券へ行ってきました。二十三日と二十四日に、ここでは、五人の女子社員が電話を前に置き、渡された名簿に従って、かけていったんだそうで、二十三日の分の中に、思ったとおり太刀川ゆきの名前がありました」

「かけた時間も、わかったのか？」

「わかりました。女子社員が、覚えていました。ちょっと変わった名前なので、覚えていてくれたんです。その女子社員が電話をかけたら、相手は眠そうな声を出し、どのくらい儲かるのと聞いたそうです」

「それが、午後一時五十分頃というわけだね？」

「そうです。結局、太刀川ゆきは、株を買うとはいわなかったそうです」

「その電話のことを、なぜ彼女は忘れていたのかな？」

「多分、証券会社や、生命保険、あるいは、不動産会社などから、毎日のように、勧誘の電話がかかっていたからだと思いますね」

と、西本はいった。

「それに、いつも、昼過ぎに起きるということですから、K証券が電話したときは、寝呆けながら、電

話に出たんだと思います。それで、太刀川ゆきは、簡単に忘れてしまったんじゃありませんか」

と、日下刑事がいった。

「太刀川ゆきのアリバイ成立か」

「そうです。彼女は、K証券とは、何の関係もありませんし、電話をかけまくった女子社員と太刀川ゆきとも、関係がありません。それだけに、信頼がおけると思いますね」

と、西本が断定するようにいった。

「これで、北川まゆみと、太刀川ゆきの二人が消えたのか」

十津川は、小さく溜息をついた。四人の容疑者の中で、この二人が、いちばん犯人らしく思われていたからである。

「まだ二人いますよ」

と、亀井が慰めるように、十津川にいった。

「男二人だろう？　私はね、この二人は、犯人にふさわしくないと思っていたんだ。その二人が残るとは、思っていなかったんだよ」

と、十津川はいった。

「ふさわしくないというのは、どういうことでしょう？」

「久保は、同行取材の最中に、北川京介を殺すような馬鹿なことをしたことになる。そんなことをすれば、自分が疑われるのは、わかっているだろうにね」

「有沢哲也は、どうですか？」

「この男の場合は、なぜ、五月二十三日に、北川京介が鳴門へ行くのを知っていたのか、それが謎だね。それに、時間もわかっていないと、あの時間に、鳴門公園で殺せないよ」

と、十津川はいった。

「ガールフレンドの小西麻子を追いかけて行って、偶然、鳴門で北川を見つけ、自殺した叔父のことを思い出して、かッとなって、殺してしまったということも、考えられますよ」

「それなら、なぜ、小西麻子を殺したのかな？　有沢は、彼女が鳴門へ行っていることは、知っていたわけだろう？　それなら、彼女に見られないように行動するだろうし、犯行を見られたのなら、もっと早く、対処していたんじゃないかね」

「確かに、そのとおりですが――」

「彼女は、鳴門には行っているが、犯行は、目撃していないんだ。目撃していれば、一一〇番しているはずだからね。とすると、彼女が撮った写真の中に、偶然、有沢が写っていたことになる」

と、十津川がいうと、亀井が肯いて、

「東京にいるはずの有沢が、鳴門にいたので、彼女が彼を問いただした。有沢のほうは、ぎょっとして、口封じに彼女を殺した。そういうことじゃないかと思うんですよ」

「しかし、二人は、恋人同士だよ。やはり、君に会いたくなって、鳴門へ行ってみたんだといえば、すんでしまうんじゃないかね。何も、殺す必要はなかったと思うんだがね」

と、十津川はいった。

「有沢のアリバイは、相変わらず、あいまいなままかね？」

「アルバイトの夜勤明けで、一日じゅう、アパートの部屋で寝ていたというだけです」

「食事をしなかったわけじゃないだろう？　昼食は、とらなかったのか？」

「彼は、スーパーで、アルバイトをしていますから、前日、売れ残ったパンや牛乳を安く買って帰り、二

十三日の昼は、それですませたといっています」
「誰も訪ねて来なかったのかね？」
「それもなかったといっています。午後は、ぼんやり、テレビを見ていたといってます」
「電話は？」
「それもなかったそうです」
「小西麻子とは、恋人同士ということだが、実際にはどの程度の関係なのかね？」
と、十津川はきいた。
「周囲の友人たちの話では、まあ、普通の恋人同士のようですね。愛し合ってはいるが、結婚の予定はない、といったところです」
と、西本がいった。
「彼女のマンションへ、行ってみよう」
と、急に十津川は、いった。
なんとかして、容疑者の数を減らしていかなければならないのである。
十津川と亀井は、パトカーで三鷹に向かった。
三鷹の彼女のマンションの部屋には、まだ、「出入厳禁」の札が貼りつけてあった。
1DKの部屋に、十津川と亀井は入った。
前に調べたときと何も変わっていない。改めて、部屋の中を隅から隅まで調べてみたが、何も見つからなかった。
「駄目ですね」
と、亀井は溜息をついて、傍にあった椅子に腰を下ろした。
「有沢哲也からの手紙も見つからんね」
「しかし、だからといって、有沢が持ち去ったとはいえません。最近の若者は、手紙を書かず、電話ですませてしまいますから」
と、亀井がいった。

「どうも、有沢が犯人とは、思えないんだがね」
と、十津川がいったとき、ドアのチャイムが鳴った。
思わず、二人は、顔を見合わせてしまったが、亀井が、立ち上がって、ドアを開けた。
二十歳くらいの女が、花束を手に持っていた。
「すいません。麻子さんのご家族の方は？」
と、女がきいた。
亀井は、警察手帳を見せてから、
「まあ、入ってください」
と、相手を部屋に招じ入れた。
女は、自分の名前を神田美矢子といった。死んだ麻子の友人だともいった。
「ずっと、アメリカに行っていたので、彼女が亡くなったのを知らなかったんです。帰国してから知って、びっくりしてしまって」
と、神田美矢子はいった。
「彼女に、有沢哲也というボーイフレンドがいたことは、知っていましたか？」
と、十津川がきいた。
「ええ。紹介されたこともあるし、他の男の子を誘って、四人で旅行に行ったこともありますわ」
と、いった。
だが、麻子が殺されたことについては、ただ、びっくりしているだけで、心当たりはまったくないといった。麻子が四国へ旅行したことも、知らなかったのだから、無理もないだろう。
「どうも、ありがとう」
と、十津川は礼をいって、送り出そうとすると、美矢子は、ドアのところで振り向いて、
「麻子さんから借りている本は、どうしたらいいんでしょうか？」

「本ですか？」
「ええ。持ってきたんですけど――」
「どこに？」
「車に置いてあります」
「私から、家族の方に、お返ししておきましょう」
と、十津川はいった。
別に、何かを期待していったわけではなかった。
ちょっとした厚意から、いっただけである。
美矢子は、マンションの外にとめた自分の車から、二冊の本を持って戻って来た。
「この本なんです。お願いします」
と美矢子はいった。
十津川は「いいですよ」と、いって、受け取ったが、急に表情を変えて、
「カメさん」
と、いった。
亀井も、何ですかという眼で、二冊の本に眼をやった。
「これは――」
と、亀井も声をだした。
『これからのインテリア』
『女の自立宣言』
これが二冊の本のタイトルだったが、どちらの著者も、北川まゆみだった。
裏表紙には、著者の写真がのっていた。
「カメさん。彼女を呼び戻してくれ！」
と、十津川は大声でいった。
亀井が、あわてて飛び出して行き、車に乗りかけている美矢子を連れ戻してきた。
びっくりしている美矢子に向かって、十津川は、
「この二冊を、小西麻子さんから借りたことは、間

違いありませんね？」

と、念を押した。

「ええ。彼女に借りたんですけど、つい返すのを忘れてしまって――」

と、美矢子は肩をすぼめるようにした。返さなかったのを、咎められたと思ったのだろう。

「小西麻子さんは、この著者の北川まゆみが、好きだったんですかね？」

と、十津川は続けてきいた。

美矢子は、ほっとした顔になって、

「ええ。彼女の生き方を尊敬していると、いっていましたわ。サインを貰ったこともあるとかで、その本も、ぜひ読んでみてといって、貸してくれたんです」

「どの程度の尊敬だったんですかねえ？」

「それはわかりませんけど、大学を出たら、北川まゆみの弟子になろうかしらって、いったこともありましたわ」

と、美矢子はいった。

6

美矢子が帰ってしまったあと、十津川は、彼女の置いていった本二冊を机の上に置いて、しばらく眺めていた。

北川まゆみの写真が、印刷されている。

『女の自立宣言』というほうを、手に取ってみた。

〈自立は、戦いである。特に、現代の女にとっての自立は〉

と、帯には書いてあった。

「これで、小西麻子は、恋人の有沢哲也とつながっ

ているだけでなく、北川まゆみともつながっていることが、わかったね」

と、十津川は亀井にいった。

「驚きました。しかし、今度の事件と、どう関係してくるのか――」

それがわからないという顔で、亀井が首をかしげる。

「小西麻子が前から北川まゆみを知っていて、尊敬していた。サインを貰っているということは、会ったことがある。それが、大事なんだよ」

と、十津川はいい、続けて、

「小西麻子は、五月二十三日に鳴門へ行き、写真を撮った。その中に、偶然、北川まゆみが写っていたんじゃないだろうか。殺人現場近くで写っていたんじゃなくて、JRの鳴門駅あたりで写っていたら、小西麻子は、別に怪しまない。それどころか、日頃、その生き方に尊敬の念を持っていた北川まゆみだから、嬉しくなって、彼女に電話でもしたんじゃないかな」

「五月二十三日に、鳴門で見ましたといってですね」

「そうだ。私も二十三日に鳴門へ行っていました。偶然、あなたのことを写真に撮ってしまったので、引き伸ばして、差しあげますとでも、いったかもしれない」

「北川まゆみが、鳴門で殺された北川京介の奥さんと知らなければ、平気で電話したでしょうね」

「だが、北川まゆみにしてみたら、大変なことになったわけだよ。大阪で、アメリカンデザイン展を見て、友人に会ったことがアリバイだからね。鳴門へ行っていたとなれば、たとえ殺人現場にいなくても、命取りになる」

「それで、小西麻子を深大寺に誘い出して殺し、そのあと、キーを使って、彼女のマンションに忍び込んで、自分の写っている写真を盗み出したわけですね」

と、亀井も声を弾ませた。

「鳴門の写真だけを盗み出すと、犯人の意図を読まれると思って、写真は、全部、持ち去ったのかもしれないね」

「本棚に北川まゆみの本があったら、それも持ち去ったと思いますよ。ただ、友だちに貸してあったことは、気がつかなかったんじゃありませんか」

と、亀井はいった。

十津川は、二冊の本を持って、マンションを出て、パトカーに戻った。

「やはり、北川まゆみが、犯人なんですかねえ？」

と、亀井が運転席に腰を下ろしてから、十津川を見た。

「おそらくね」

「しかし、彼女には、強固なアリバイがありますよ」

と、亀井は、パトカーをスタートさせてから、十津川にいった。

「いや、それは正確じゃないよ。五月二十三日の午後、大阪にいたという絶対的な証拠はないんだ。ただ、午後二時から三時の間に鳴門へ行って、北川京介を殺すことは、時間的に無理だということだけなんだ。間違いないのは、午前一〇時〇四分に、彼女が新大阪で「ひかり73号」から降りたこと、午後七時に、友人の佐々木リエと、大阪の梅田駅前で会って夕食をしたこと、それに正午と二時の二回、佐々木リエに電話したこと、これだけなんだ。そのうち、二回の電話は、カメさんもいうとおり、どこからか

けたか不明なんだよ」
と、十津川はいった。
「しかし、警部。そうはいっても、北川まゆみは、鳴門へ行けなかったことは、はっきりしているんじゃありませんか？」
と、亀井がきいた。

第五章　戦いの果て

1

捜査本部に戻ると、十津川は、近畿と四国、中国地方の入った地図を、壁に貼りつけた。
新大阪の駅のところに、「一〇時〇四分、ひかり73号」と書き込んだ。
「さて、一〇時〇四分に新大阪で降りたあと、どう



すれば、一刻も早く鳴門公園に行けるかというクイズだよ」

と、十津川は部下の刑事たちの顔を見廻した。

「まず、鳴門へ行くのに、どれだけのルートがあるか、それを一つ一つチェックしていったらどうですか？」

と、日下がいった。

それに対して、西本刑事が、

「しかし、飛行機では、行っていないんでしょう？飛行機より早く、鳴門へ行ける方法があるとは思えませんが――」

と、いった。

「新幹線も駄目ですか？『ひかり73号』の次のひかりに乗って行って、途中でなんとか追い越す。追い越さないまでも、追い着くことは、不可能でしょうか？」

と、いったのは、清水刑事だった。

「いい指摘だよ」

と、十津川は肯いた。

「『ひかり73号』の次に、『ひかり41号』という列車が走っている。新大阪を八分おそく発車する博多行きだが、停車駅が少ないので、岡山には、『ひかり73号』より先に着くんだ」

「それなら、その『ひかり41号』に乗ったんじゃありませんか？」

「だがね。清水君、この『ひかり41号』は、臨時列車でね。五月は、二日から二十二日までと二十四日から三十一日しか、走らないんだよ。肝心の五月二十三日には、走ってなかったんだ」

と、十津川は清水にいった。

「駄目ですか」

清水は、がっかりした顔になった。

「船は、どうですか？」
と、いったのは、日下だった。
「船？」
「ええ。大阪には、港があって、フェリーが出ていると思います。大阪から鳴門へ行くフェリーに乗れば、案外早く鳴門に着けるんじゃないでしょうか？」
と、日下はいう。
十津川は、時刻表のページを繰ってみた。
「大阪南港からフェリーが出ているが、鳴門行きじゃなくて、徳島行きだよ。時間は、三時間二十分と意外に早いが、駄目だね。朝の六時〇〇分、夕方の一七時一〇分、それと、夜の二三時〇〇分の三便だけで、午前十時台の便はないね」
「船も、駄目ですか？」
と、日下も残念そうにいった。
「いや、そうでもないよ」
と、時刻表を見ていた十津川がいった。
「しかし、大阪からのフェリーは、駄目なわけでしょう？」
「そうだ。だが、他からも船は出ているよ。例えば、和歌山から徳島に向けても船が出ている」
と、十津川はいい、地図の和歌山のところから、四国の徳島に向かって太い線を引いた。
「それで、間に合いますか？」
亀井が、心配そうにきいた。大阪から徳島へ行く船でも間に合わないのに、和歌山へ廻って、間に合うのだろうか？
「それを、調べてみようじゃないか」
と、十津川はいった。
まず、和歌山―徳島間の船便について、調べてみた。
「和歌山と徳島の間には、高速艇が、一日に何本も

出ているよ」
と、十津川が嬉しそうにいった。
その時刻表を黒板に書き出した。

和歌山港　→徳島港
八・三〇→　九・四五
九・一五→一〇・三〇
一二・二五→一三・四〇
一三・二五→一四・四〇
一五・三〇→一六・四五
一七・三〇→一八・四五

「このあとも、船が出ているが、関係はないだろう。なにしろ、一四時から一五時の間に、鳴門公園へ行かなければならないんだから」
と、十津川はいった。
「この中で、使えるのは、一二時二五分の便だけですね」
と、いったのは、亀井だった。
確かに、そのとおりだった。九時一五分の便は、一〇時〇四分に新大阪に着いているのだから、絶対に乗れないし、一三時二五分の便では、まず、鳴門公園へ、一五時までに行けないからだ。
「一二時二五分の高速艇に乗って、一三時四〇分に着けば、間に合うのかな？」
と、十津川はじっと黒板に自分が書いた数字を見つめた。
「徳島港からタクシーを拾って、急げば、一時間で鳴門公園に着けると思いますよ」
と、日下刑事がいった。
「一時間なら一四時四〇分で、ちょうど犯行に間に合うね」
「問題は、新大阪から和歌山港までですね。ちょう

どいい列車があるかどうか」
と、亀井はいい、時刻表を繰っていた。
「和歌山へだと、『くろしお』という特急があったね」
「多分、それだと思います。新大阪から出ているのがありますよ。『スーパーくろしお11号』です。一〇時四〇分新大阪発だから、ゆっくり乗れます」
と、亀井がいった。
「和歌山着は？」
「一一時四一分、和歌山着です」
「降りて、タクシーで港まで急げば、一二時二五分の徳島港行きの船に乗れると思うね」
と、十津川はいった。
「車なら、三十分で和歌山港まで行けるはずです」
と、日下がいった。
十津川は、このルートを、まとめて黒板に書いた。

新大阪着　10：04
発　10：40
↓ スーパーくろしお11号
和歌山着　11：41
↓ タクシー
和歌山港発12：25
↓ 船
徳島港着　13：40
↓ タクシー
鳴門公園　14：30

「これで、北川まゆみは、鳴門公園で夫の北川京介を殺せるんだ。帰りは、多分、飛行機を使ったんだろう」
と、十津川はほっとした顔でいった。
「一つ、疑問があるんですが――」
と、西本が遠慮がちにいった。
「どんなことだ？　いってみてくれ」
「前に、大阪↓徳島の飛行機を使ったんじゃないかということになりました。あのとき、正午と午後二

時の二回の電話がネックになって、この推理が駄目になってしまいました。今度は、その点は、クリアできるんでしょうか？」

「そうだ。それを忘れていたよ。正午と午後二時に、このルートではどこにいるか、調べてみよう」

と、十津川はいい、自分が黒板に書いたルート表を見ていたが、急に笑い出した。

「こいつは、面白いね。正午も午後二時も、ちょうどタクシーの中だよ」

「最近は、タクシーにも、自動車電話がついているのが多くなりましたよ。ハイヤーなら必ずついていますね」

と、亀井がいった。

「それなら、電話のハードルは、越えられましたね」

「実際に、現地に行ってみるまではわからんさ」

と、十津川はいった。

「和歌山へ行ってみますか？」

「もちろん、行くよ」

と、十津川は亀井に肯いて見せた。

新大阪に向かって出発する前、十津川は、二つのことをやっておいた。

一つは、徳島県警への連絡だった。三浦警部は、いぜんとして久保守犯人説を変えずにいる。それに、彼が犯人である可能性は、ゼロになったわけではないのだ。

そこで、あくまでも、こちらの考えを説明するという形をとった。実際に、十津川が和歌山へ行って、五月二十三日に、北川まゆみがタクシーに乗ったかどうかを確かめてからでなければ、三浦警部は納得しないとも思ったからである。

もう一つは、天気予報のことだった。

十津川は、西本と日下の二人に、それを調べておくようにいっておいて、亀井と東京を出発した。

五月二十三日と同じ状況でということで、朝七時〇四分発の「ひかり73号」に乗った。

「天気予報の件は、どういうことなんですか？」

と、車内に腰を下ろしてから、亀井が十津川にきいた。

「実は、船を利用したのではないかという考えが出た瞬間、天気のことが引っかかったんだよ。列車や飛行機は、多少の雨でも予定どおり運航されるが、船は別だからね。雨や風が強ければ、運航は中止されるか、到着が大幅におくれてしまう」

と、十津川はいった。

「しかし、五月二十三日は、いい天気でしたよ」

「それを、はたして、予測できたかどうかということさ。犯人の北川まゆみもだが、このアリバイトリックを考えた北川京介もだ。それを西本君たちに、調べてもらうことにしたんだよ」

と、十津川はいった。

ありがたいことに、今日も快晴である。

新大阪には、定刻の一〇時〇四分に着いた。

ゆっくりと、新幹線ホームから在来線のホームへ歩いて行く。

ここで、一〇時四〇分発、新宮行きの「スーパーくろしお11号」に乗りかえた。六両編成で、展望車つきの新型車両だが、車内に電話はついてなかった。

一一時四一分に、和歌山に着いた。

駅前で、自動車電話のついているタクシーを探した。この辺りが観光地のためか、電話のついているタクシーが多かった。

遠出をしたとき、タクシー無線では連絡が取れなくなるからだろうし、乗客が、ホテルや旅館と連絡

するのに必要だからだろう。
十津川と亀井は、駅前に待っているタクシーの運転手たちに、五月二十三日に北川まゆみを乗せたことはないかと、彼女の写真を見せて、聞いて廻った。
答えは、意外と早く出た。
五月二十三日に、彼女を乗せたという運転手が、見つかったのだ。
二人は、そのタクシーに乗り、フェリーの発着する和歌山港まで行くことにした。
「彼女は、車内で電話をかけたと思うんだが」
と、亀井が、走るタクシーの中で、運転手にきいた。
「ええ、かけましたよ。この電話は、大阪にもかけられるんでしょうときくから、もちろんですと、いったんです。そしたら、かけていましたね」
「話の内容は、覚えていない？」
「覚えてませんが、簡単な話で、すぐ切りましたよ」
と、運転手はいった。
「それは、正午だった？」
「時間は、覚えてませんが、和歌山港に着く直前だったから、そんなもんでしょう」
十津川たちの乗ったタクシーは、十二、三分で港に着いた。
ここから、小松島行きのフェリーと、徳島へ行く南海徳島シャトルラインという高速艇が出ている。
十津川と亀井は、南海徳島シャトルラインの高速艇に乗り込んだ。
乗客の数が、多かった。
一二時二五分に出港した高速艇は、青い海面を滑るように走る。海は穏やかで、船は、ほとんどゆれず、快適な船旅になった。

「五月二十三日も、北川まゆみは、われわれと同じように、海を眺めていたんですかね」

と、亀井がいった。

「どうかな。鳴門で夫を殺すことを、じっと自分にいい聞かせていたかもしれないよ」

「わかりませんね。夫も妻も、それぞれ違う分野で成功していたのに、殺すなんて――」

と、亀井が首をかしげた。

一時間あまりの船旅のあと、高速艇は、徳島港に着いた。

すぐ、タクシーを拾う。自動車電話がついているかどうか気になったが、ついていて、ほっとした。この辺りのタクシーも、観光タクシーを兼ねているので、最近は、電話をつける車が多くなったという。

運転手に頼んで、飛ばしてもらった。吉野川を渡り、空港の近くを通って、鳴門に向かって走る。

鳴門公園まで、バスでも一時間あれば行くということで、二人の乗ったタクシーは一四時三〇分、二時半には鳴門公園に着いた。

十津川は、その時刻を確認してから、鳴門警察署に廻ることにした。徳島県警の三浦警部に会うためであり、説得するためでもあった。

2

鳴門警察署で、十津川は、捜査本部長と三浦警部の二人に会って、北川まゆみ犯人説を証明した。

しかし、三浦は、すぐには納得しなかった。

「五月二十三日に、北川まゆみが鳴門に来たとしても、だから彼女が犯人とは、断定できないんじゃありませんか」

と、三浦はいう。

「そのとおりです。ただ、彼女が今まで嘘をついていたことも、事実です」
と、十津川はいった。
「問題は、動機だな」
本部長が、いった。
「その点は、同感です」
と、十津川はいってから、
「東京に戻って、北川まゆみを訊問するつもりですが、三浦警部も一緒にいかがですか？」
と、十津川は三浦を誘った。
「行ってきたまえ」
と、本部長がいってくれた。
十津川は、電話を借りて東京にかけ、西本刑事に、結果を聞いた。
「気象庁に聞きましたところ、五月二十二日、二十三日の二日間は、晴れるという予報を出していたということです。それから、東文社の青木次長に、問い合わせました。やはり、北川京介は、五月二十三日は、晴れてほしい。もし、雨になりそうだったら、別の日にしたいとも、いっていたそうです。東文社のほうでは、雨では渦潮が見にくいからだろうと思い、前日まで予報に注意していた。二十三日は晴れると聞いて、安心してスケジュールどおりにスタートしたんだといっていました。船のことは、まったく北川がいわなかったし、東文社も考えていなかったようです」
と、西本はいった。
「ありがとう。今日じゅうに東京に帰る」
「北川まゆみを、連行しておきましょうか？」
「いや、それはいい。ただ、監視だけは、していてくれ」
と、十津川はいった。

十津川、亀井、それに三浦の三人は、一七時一〇分徳島発のJAS（日本エアシステム）三二六便で、東京に戻った。

羽田に、清水刑事が、パトカーで迎えに来てくれていた。

「西本と日下の二人が、北川まゆみを見張っています」

と、車を走らせながら、清水が十津川に報告した。

「彼女の様子は、どうなんだ？」

「自宅には帰らず、ずっと、六本木の仕事場にいます。亡くなった夫の冥福を祈るという気持ちは、あまりないようですね」

と、清水はいった。

十津川は、捜査本部には戻らず、そのまま六本木に向かった。

北川まゆみの仕事場のあるビルの近くに、西本と日下の乗ったパトカーがとまっていた。

西本が車から降りて来て、十津川に、

「今、彼女は、仕事場にいます」

と、いった。

「君たちは、もう帰っていい」

と、十津川はいい、亀井、三浦と三人で、雑居ビルに入って行った。

最上階が、北川まゆみの仕事場になっていた。

彼女は、そこにベッドを持ち込んで、泊まっているらしい。

北川まゆみは、仕事場にいた。笑顔で十津川たちを迎えたのは、自信がまだあるからだろう。

「刑事さんも、大変ですわね」

と、まゆみは十津川にいった。

「確かに、大変です」

と、十津川はいった。

「それで、今日は、主人と久保さんのことを、また、聞きに来られたんですか？」
「いや、久保さんのことは、もういいんです」
十津川がいうと、初めて、かすかな不安の色を見せた。
「それは、久保さんが、逮捕されることになったということでしょうか？」
「そうだとしたら、どう思われますか？」
「久保さんにも、きっと、よほどのことがあったんだろうと、思いますわ」
「余程のことですか。どんなことが、考えられますか？」
「そこまでは、私には、わかりませんわ」
「北川さんは、そんなに意地悪な人でしたか？」
と、十津川はなおもきいた。
「作家というのは、皆さん、気難しいところがあって、それが、たまたま、久保さんの神経に触ったんじゃありません？」
「北川さんは、あなたに対しても、気難しかったですか？」
「え？」
「夫として、北川さんは、どんなだったのかと思いましてね。いい夫だったのか、それとも、夫としては、まったく落第だったのか」
「そんなことが、今度の事件と、何か関係がありますの？」
と、まゆみは眉を寄せて十津川を見た。
「あると、思っています」
「信じられませんわ」
「実は、久保さんは、もう、容疑の圏外になったんですよ」
「じゃあ、誰が、主人を？」

「あなたです」
と、十津川はいった。
「そんな――」
「あなたが、夫の北川京介さんを殺したんですよ」
十津川は、重ねていった。
まゆみは、どんな表情をしていいか、戸惑っている感じだった。が、急に笑い出して、
「私が犯人でないことは、十津川さんも、ご存じのはずですわ」
と、いった。
「いや、私は、知りませんよ」
「でも、私のアリバイについて、十分に納得されたはずじゃありませんの」
まゆみは、怒ったような声でいった。
「ああ、あのアリバイですか。あれは、もう意味がなくなりましたよ」
と、十津川はいった。
「どういうことですの？　私は、五月二十三日に、大阪にいたんです。そのことは、いろいろな人が証明してくれますわ」
「ところが、あなたが、同じ日に、鳴門にいたことを証言する人もいるんですよ」
と、十津川はいった。
「誰ですの？　それ。教えてくださいな」
「教えるよりも、その人と、会っていただきたいと思っているんです」
「――」
まゆみは、黙って、じっと十津川を見た。十津川の顔色から、何かを読み取ろうとしている眼だった。
「あなたのアリバイは、崩れたんですよ」
と、十津川はいった。
「でも、私は、五月二十三日は、大阪にいましたわ。

主人や久保さんと一緒になった新幹線を、新大阪で降りて、デパートのデザイン展を見て、夜は、友人の佐々木さんと食事をしましたわ」

「わかっています。あなたが、一〇時〇四分に、『ひかり73号』から新大阪で降りたのも、事実でしょう。ただ、あなたは、大阪のデパートでデザイン展を見る代わりに、鳴門へ向かったんです。ご主人を殺すためにですよ」

「私は、アメリカンデザイン展を見ました。そして、会場で売っているデザインブックを、買いましたわ」

「この本ですか？」

と、十津川は、持って来た高価なデザインブックを、まゆみの前に置いて、

「あのデザイン展は、東京―京都―大阪と各デパートで、続けられていたものです。あなたは、東京のMデパートで開催されたとき見に行き、この本を買っておいた。それが、今度の犯行に役立ったというわけですよ。これは、私の友人で、デザイン好きの男が、東京のとき買ったものです」

「でも、どうやって、私が鳴門へ行ったというんです？　新幹線を追いかけるんですよ。飛行機ですの？」

「最初、飛行機を考えました。大阪から徳島へ行く飛行機ですよ。これだと、簡単に、あなたは鳴門公園へ行ってご主人を殺せるんです」

と、十津川がいうと、まゆみはニッコリして、

「それなら、すぐ、私を逮捕なさったら」

「ところが、あなたは、正午と午後二時に電話している。それがネックになって、この飛行機は、使えなくなってしまったんです」

「それなら、私はシロじゃありませんの？」

「いや、違います。あなたは、飛行機を使う代わりに、遅いと思われる船を使ったんですよ。和歌山から、徳島へ行く高速艇です。これに気がつくのに、時間がかかりました。まさか、新幹線を追いかけるのに、船を使うとは、思っていませんでしたからね」

「証明できますの？」

と、まゆみがきいた。

「証明できます。あなたは、新大阪から、『スーパーくろしお』で、和歌山へ行き、高速艇の出る港まで、タクシーに乗った。そのタクシーの運転手が、あなたのことを覚えていたんですよ。また、あなたが、徳島港から鳴門公園まで乗ったタクシーも、見つかったという連絡がありました。会わせたいといったのは、この二人の運転手ですよ。あなたが車内で電話したことも、証言していますよ」

十津川がいうと、まゆみの顔が、急に暗いものに変わった。

「一緒に、和歌山へ行ってもらえますか？」

と、十津川がいうと、まゆみは、いやいやをするように頭を振って、

「もう、いいです」

「どういうことですか？　それは」

と、きいたのは、徳島県警の三浦警部だった。

「もういいんです。認めますわ。鳴門へ行ったことを――」

「じゃあ、あなたが、ご主人を殺したんですね？」

と、三浦が念を押した。

「ええ」

と、まゆみは肯いたが、

「私が、なぜ、北川を殺したか、わかります？」

と、開き直った態度で、十津川にきき返した。

「正直にいって、わかりませんね。ただ、今度のアリバイトリックは、北川さんではなく、あなたが考えたんだと思いますね」
と、十津川はいった。
「なぜ、そう思うんです？」
と、まゆみがきいた。
「今までの北川さんの本に出てくるアリバイトリックと、違うところがあるからですよ」
と、十津川はいった。
「どの点が？」
まゆみは、大きな眼で十津川を見た。
「電話ですよ。殺人現場へ先廻りするルートが二つあるとします。その一つは、消さなければならない。そのとき、今までの小説では、その日、道路が工事で使えなかったとか、列車事故があったとか、偶発的な事故で、そのルートを消していたんです。いかにも、それが不自然だったんですよ。ところが、今回は違っていました。たった二回、電話をかけるだけで、一つのルートを消してしまっている。感心しましたよ」
と、十津川はいった。
「ありがとうございます」
まゆみが、ニッコリした。
「やはり、あなたが、考えたことだったんですね？」
「ええ。北川は、相変わらず、本にする場合は、大阪→徳島便は、事故で欠航になったことにする気でいたんです。頭の悪い人なんです」
と、まゆみがいった。
「それが、動機なのか？」
三浦が、まゆみを睨んだ。
「ええ。頭が悪いくせに、威張り散らして、暴力を振るっていたんです。私は、だんだん、それに我慢

ができなくなったから、私の考えたアリバイトリックで、殺してやったんです」

と、まゆみはいった。

「北川さんは、久保さんを、鳴門でびっくりさせようとした。それをあなたが利用したんですね？」

「ええ。子供っぽいことを考える人なんです。鳴門公園で、久保さんを煙草を買いに行かせ、その間に、私を物かげから呼んで、戻って来た久保さんをびっくりさせるんだといって。自分の考えたトリックを自慢したかったんですわ。そのトリックだって、肝心のところは私が考えたものなのに」

「今までのアリバイトリックも、あなたが考えたものだったんですか？」

「大事なところはね」

「小西麻子を殺したのも、あなたですね？」

と、亀井がきいた。

「ええ。あれは、計算外でしたわ。突然、電話がかかってきたんです。小西麻子という、まったく知らない人からでした。向こうは、私を尊敬していて、サインを貰ったといっていましたけど、私は覚えていませんでした」

肩をすくめるようにして、まゆみがいった。

「あなたを、鳴門公園で見たと、いったんでしょう？」

と、十津川がきく。

「ええ。写真も撮ったといいました。別に、私を疑っている気配はありませんでしたけど、彼女と、彼女の撮った写真は、命取りです。だから、仕方なく殺したんですわ」

「そのあと、彼女のマンションへ行って、写真を持ち去った？」

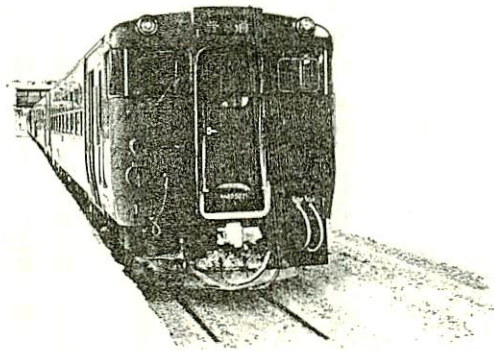
「ええ」

と、まゆみは肯いた。
彼女の顔が、急に疲れ切ったように見えた。
「あんたを、逮捕する」
と、三浦警部が大きな声でいった。

*

北川まゆみは、まず、鳴門へ連れて行かれることになった。
徳島行きの飛行機で、三浦警部がまゆみを連行して行くのを、十津川と亀井は、羽田へ送って行った。
パトカーで帰る途中、亀井が、
「どうも、わかりませんね」
と、十津川にいった。
「何がだい？」
「北川まゆみの動機ですよ。夫が、頭が悪いくせに、横暴だからというのは、弱い気がするんですよ」
と、亀井がいう。
「あれは、本当のことはいってないと思うよ。夫婦の間には、他人にわからない、どろどろしたものがあると思うよ」
「じゃあ、彼女がいったことは？」
「多分、彼女の精いっぱいの見栄だと思うね」
「見栄ですか？」
「そうさ。彼女は、頭もいいし、自尊心の強い女性だ。だから、つまらない女と同じ動機で、夫を殺したと思われるのは、嫌なんだよ」
「嫉妬とか、財産とかのためにですか？」
「ああ。だから、ああいったんだ。カッコいい動機で、カッコよく殺したことにしたかったんだろうね」
と、十津川はいった。

死体は潮風に吹かれて



1

警視庁捜査一課のベテラン刑事、酒井勇は、間もなく五十二歳になる。

娘のひろみは、すでに結婚し、妻の啓子は、三年前に病死して、現在はひとりぐらしである。

幸い身体は頑健なので、今のところ、老後の心配をしたことはないが、ときには、ひどく寂しさを覚えることがあった。

娘のひろみは、心配だから再婚しなさいという。その度に、酒井は、その気はないよといい返すのだが、ときには、もう一度、家庭を持ちたいと思うこともあるのだ。

（いい女性がいたら――）

と、思う。

これから、年齢をとるにつれて、この思いは、多分、強くなっていくだろう。

こんな酒井の楽しみは、カラオケと温泉だった。

カラオケのほうは、もっぱら北島三郎だが、温泉のほうは、ひとりでひなびた宿へ行くのが好きだった。

十月の下旬に三日間の休みがとれたときも、酒井は、まだ行っていない温泉で、三日間を過ごしたいと思った。

警視庁を辞めて、現在、旅行会社をやっている昔の同僚がいるので、その男に聞いてみることにした。

警察の帰りに、銀座数寄屋橋にある旅行社に寄った。

「静かで、のんびりしていて、景色が美しい温泉ねえ」

と、山本は考えていたが、

「明日美クン」
と、若い女子社員の一人を呼んだ。
二十歳ぐらいの、眼の大きな娘が立ち上がって、
「何でしょう？　社長」
と、ちょっと甲高い声を出した。
「君は、東北だったね？」
「弘前ですわ」
「君の知っている範囲で、ひなびた、景色のいい、ひとり者がのんびりできる温泉はないかね？」
「ひとり者は、余計だよ」
と、酒井は苦笑した。
明日美クンと呼ばれた娘は、「そうですねえ」と、考えていたが、
「五能線の海辺の温泉なんかどうでしょうか？」
と、山本と酒井の二人を見た。
「何という温泉だね？」
「不老不死温泉ですけど」
「ずいぶん欲張った名前だなあ」
と、酒井はいった。
「しかし、魅力的な名前だよ」
と、山本がいう。
「変に、俗っぽい温泉じゃないのかね？」
酒井がきくと、明日美は、
「旅館が一軒しかない温泉ですから、俗化はしてないと思いますわ。五能線の沿線は、とても景色がいいですから」
「行ってみるかな」
と、酒井がいったのは、その温泉に引かれたというより、すすめてくれた明日美という娘に、好感を持ったからだった。
酒井は、彼女にその不老不死温泉に予約をとってもらっておいて、翌日の十月二十八日、羽田から青

森行きの飛行機に乗った。
午前七時五〇分の早い便である。
搭乗してから、同じ機内に、例の明日美という娘が乗っているのに気がついた。
彼女のほうでも気がついて、水平飛行に移ってから、隣りの空いた席にやって来た。
「青森のほうから、五能線に乗ることになさったんですか？」
と、明日美は大きな眼で酒井を見た。
「そのほうが、早く着けると思ったんでね。あなたは、何処へ？」
「二日間、休みを貰ったんで、故郷へ帰ってこようと思って」
「確か、弘前の生まれだったね？」
「ええ。幸介さんのことが心配なんで、一度、弘前に帰ることにしました」
と、明日美はニコニコ笑いながらいった。
「コウスケさん？　ああ、故郷にフィアンセがいるんだね」
と、酒井が肯くと、明日美は、「違うんです」と手を振った。
「私の父ですわ」
「コウスケさんが？」
「ええ。なんとなく、昔から、幸介さんと呼んでるもんですから」
「きっと、若いお父さんなんだろうね」
酒井は、ふと、娘のひろみが、自分のことを何と呼んでいるだろうかと考えた。
嫁に行き、子供が一人できた今は、お父さんだが、家にいた頃も同じだった。酒井の名前は勇だが、ひろみが、「勇さん」と父親を呼んだことはなかった。
「父は、今年四十五歳です」

「それなら、私より十歳近く若い。お母さんも、きっと若いんだろうね？」
「母は、私が高校のときに亡くなりました」
と、明日美がいう。
「そうなの。悪いことを聞いてしまったかな」
と、酒井はいった。
「いえ。いいんです」
と、明日美は微笑した。
酒井は、なんとなく、自分と境遇の似ている彼女の父親に、親しみを覚えてきた。
「ぶしつけな質問をしてもいいかな？」
「どんなことですか？」
「君は、ひとり娘？」
「ええ」
「君は、どう思っているのかな？　お父さんが、再婚してくれたほうがいいと思う？　それとも、ずっと、ひとりでいてもらいたいかね？」
酒井が質問すると、明日美は、弱ったなという顔になった。酒井は、あわてて、
「実は、私も、君のお父さんと同じで、ひとりで生活しているんだ。娘は、もう結婚しているけど、お父さんのことが心配だから、早くいい人を見つけて、再婚してくれというんだよ。娘が、本気でそう思っているのかどうか、わからなくてね」
と、いった。
「幸介さんは――いえ、父は、いい人なんですけど、頼りないところがあるんです。ときどき心配になったりして。だから、早く再婚してもらいたいと思うんですけど、変な女の人とは、一緒になってもらいたくないとも思うんです」
「なるほどね」
「私って、わがままなんです」

「いや、そんなことはないさ。お父さんのことを愛しているから、いろいろと注文をつけたくなるんだと思うね」
と、酒井は優しくいってから、
「ところで、お父さんは、弘前で、何をやっているの？　あそこは、リンゴの産地だから、それに関係している仕事かな？」
「酒井さんは、刑事さんでしたわね？」
急に、明日美が、ニッコリしてきいた。
「ああ、おたくの社長さんとは、一緒に警視庁で働いていたことがあるんだ」
「私の父も、刑事なんです」
「ほう」
と、酒井は眼を細めた。
「弘前署の刑事ですわ」
「四十代なら、働き盛りだよ。きっと優秀な刑事なんだろうね」
と、酒井がいうと、明日美は、小さな溜息をついて、
「それが、窓際刑事なんです」
「窓際刑事？」
「ええ。まだ平の刑事ですし、一度も犯人を捕まえたことがないんです」
と、明日美がいった。
「私だって、この年齢で、平の刑事だよ」
「でも、犯人を捕まえたことは、あるんでしょう？」
「そりゃあね」
「私の父よりも、ずっとご立派ですわ」
「君のお父さんは、きっと優しすぎるんだと思うよ」
「優しくて人がいいのは、そのとおりですわ。でも、刑事なんだから、一人や二人は、犯人を捕まえてく



れないと困ります。娘としては」

と、明日美はいった。

青森空港に着いたのは、午前九時ちょうどである。青森から弘前まで奥羽本線で行き、酒井は、弘前から一三時〇二分発の五能線に乗った。

明日美は、弘前の駅まで送ってくれた。

「きっと、いい旅行になると思いますわ」

と、明日美はいった。

二両編成の気動車である。観光客らしい姿はほとんどなく、乗客の大半は、沿線の高校生や中学生だった。

エンジンの音をひびかせて、単線のレールの上を走って行く。

小さな駅を、一つ一つ拾っていく。学生たちが降りたと思うと、また、別の学生が乗り込んでくる。

一時間半近くたって、急に、窓の外に海が広がった。日本海である。

海はすでに冬の色を見せ、荒々しく、岸に白い波頭を打ちつけている。

車掌にきくと、真冬になると、ときには、波がレールを洗って、列車が運休することもあるという。

太平洋岸を見なれている酒井の眼には、やたら荒荒しく見える日本海だった。

沖を通る漁船が、波の谷間に吸い込まれて、ときどき見えなくなる。

海岸の景色も、ところどころに砂浜があるものの、岩礁だらけの海岸が多い。

酒井が、それに見とれているうちに、目的の艫作に着いた。

「へなし」と読む。

五能線には、この他にも、面白い名前の駅が多い。

風合瀬　かそせ

蠟木　　とどろき
大間越　　おおまごし

それぞれが、何か意味があるのだろうが、酒井は、わからないまま、「蠟作」で降りた。

無人駅だから、駅員はいない。駅の外に出たが、温泉のある気配はまったくなかった。

タクシーも、見当たらない。

「蠟作で降りれば、すぐわかります」

と、教えられて来たのだが、これではどこへ向かって歩いて行ったらいいのか、わからなかった。

駅前に雑貨屋が見つかったが、今日は休みらしく、閉まっている。

（弱ったな）

と、仕方なく、煙草をくわえて考えていると、五、六分して、ライトバンがやって来た。

中年の男が降りて来て、「酒井さんですか？」と、きき、肯くと、

「不老不死温泉から、迎えに来ました」

と、いった。

その男が、支配人だった。タクシーがないので、お客が着くと、支配人が車を運転して、迎えに行くのだという。

「今日は、お客さんお一人です」

と、支配人は運転しながらいった。

旅館は、海に突き出すみたいな恰好で、建っていた。

城の石垣のようにコンクリートをかため、その上に旅館が建っているのは、大波のときには、二メートル近くも波が高くなって、押し寄せるからしい。

一階の広間には、もうストーブが入っていた。

十二、三人の客が、お茶を飲んだり、テレビを見たり、将棋をしている。

若い男女が三人ほどいたが、その他は、中年か初老の客だった。そのせいか、広間は静かだった。

酒井は、女中に案内されて、二階の部屋に入った。

窓の外に、海岸が広がっている。

大きな石がごろごろしている海岸で、その向こうに暗褐色の日本海が見える。

「露天風呂はないの？」

と、女中にきいてみると、

「あそこにありますよ」

と、指さしてくれた。

旅館から、五、六十メートルほど離れた海岸に、丸く、コンクリートと岩で露天風呂ができている。

「入れるの？」

「入れますけど、寒いですから、カゼをひかないようにしてください」

と、女中はいった。

なるほど、吹きさらしの海辺に、ぽつんとある露天風呂である。入っている間はいいだろうが、旅館からの往復に、カゼをひくかもしれない。

夕食まで間があるので、酒井は、旅館の下駄をはいて、露天風呂まで歩いてみた。

旅館からそこまで、細く、コンクリートで道が作られている。

両側は、ごろごろした石の浜で、潮だまりをのぞくと、小さな魚が泳いでいたりする。

陽が射しているのだが、それでも、海から吹いてくる風は冷たかった。

露天風呂は、着いてみると、意外に大きかった。

旅館から、パイプで温泉が引かれていて、白色の湯が流れ出ている。

囲いがないので、昼間は入りにくい。

酒井は、しばらくいて、旅館に引き返した。

2

六時の夕食は、階下の広間で、泊まり客が集まって、とることになった。

温泉の良さの一つは、泊まり客同士が、簡単に親しくなることだろう。

酒井の前に座った四十歳くらいの女性も、同じようにひとり旅ということで、すぐ話しかけてきた。

派手な感じの女性で、浦西(うらにし)みや子と自己紹介した。

「ときどき息抜きに、ひとりで温泉へ来ているんです」

と、みや子はいう。

「私も同じですよ」

と、酒井はいった。

みや子は、なれなれしく、酒井にお茶を注いでくれたりしていたが、急に小声になって、

「あとで、一緒に露天風呂にいってみません？」

と、いった。

酒井がびっくりして、「え？」と、きき返すと、みや子は、

「昨夜も、入ってみたかったんですけど、一人では、なんとなく怖くて」

「そうでしょうね。女性一人では、怖いかもしれませんな」

「じゃあ、一緒に行ってください。どうしても、あの露天風呂に入ってみたいんです」

みや子は、まるで、男を口説(くど)くような調子でいった。

酒井も、悪い気はしなかった。彼も、別に女が嫌いなわけではないし、温泉好きだが、行った先で、ちょっとしたアバンチュールが楽しめたらという気

がなかったわけでもないからである。
「実は、私も、あの露天風呂に入りたいと思いましてね。さっき、歩いて行ってきたんです。なかなか面白いと思いましたが、昼間は恥ずかしい。それで、夜になったら、行ってみようかなと」
「それなら、一緒に行ってくださいな」
と、みや子は嬉しそうにいった。
時間を打ち合わせて、酒井は、みや子と旅館を出た。
幸い風は弱く、それほど寒さは感じなかった。みや子は、旅館を出るとすぐ、手を握ってきた。久しぶりに女性の手を握ったことが、酒井の気持ちを甘くさせた。
露天風呂までのコンクリート舗装した通路は、幅が一メートルもなかったから、自然に身体を押しつけるようにして歩く。
露天風呂に着くと、みや子のほうがさっさと裸になった。男の酒井のほうが、おたおたしてしまう。
みや子は、先に湯舟に飛び込むと、嬉しそうに、
「ああ、いい気持ち！」
と、大声でいった。
酒井は、青白い月の光の中で、一瞬、鮮やかに見えたみや子の裸身に戸惑いながら、やっと丹前を脱いで、湯舟に入った。
うしろを振り向くと、旅館の灯がちらちらしている。前は、二、三十メートル先が、日本海である。
「酒井さんは、おひとりだと、おっしゃってましたわね？」
みや子が、確かめるようなきき方をした。
「ずっと、やもめ暮らしです」
と、酒井は古めかしいいい方をした。
「男の人はいいわ。いくつになっても、再婚のチャ

ンスがあるから」
「私は、もう五十歳を過ぎましたよ」
「でも、再婚の話って、いくつもおありになるんでしょう？」
「ほとんどありませんよ。なにしろ、安サラリーマンで、あまり魅力のない男だから」
半ば本気、半ば謙遜で、酒井は、いった。もちろん、すぐ、それを相手が否定してくれることを期待してだが。
「そんなことは、ありませんわ。私ね、酒井さんが頼りになりそうな男の人だから、お誘いしたの。つまらない男の人だと感じたら、最初から、声なんかかけませんでしたわ」
と、みや子はいった。
「そういっていただくと、男として嬉しいですがねえ」
「私ね、別に自慢するわけじゃありませんけど、男の方を見る眼があるつもりですわ。銀座のクラブで働いていたこともあるし、その頃、いろいろな商売の方とも、つき合いましたから。だから、見かけには欺されない自信だけは、あるんです。酒井さんは、勇気があって、心の優しい方だと思ったんですよ。私は、自分の直観に自信があるんです」
「そんなふうにいわれると、照れ臭くなりますが――」
「それで、酒井さんに、お願いがあるんです」
「――――」
「酒井さんは、いつまでお泊まりになるんですか？」
「三日間、休みをとっています」
「じゃあ、お願いは、明日、お話ししますわ。今夜は、せっかく一緒に露天風呂に入っているんだから、

ただの男と女ということにしておきたいから」

と、みや子がいう。

身体を寄せてきたので、酒井が手を回すと、彼女は、そのまま、湯舟の中で身体を預けてきた。

柔らかく、重量のある身体だった。

思わず抱き寄せて、唇を合わせた。

「――――？」

ふいに、酒井は、人の気配を感じて、旅館のほうに眼をやった。

誰かが、急ぎ足に、旅館に向かって、引き返して行くのが見えた。

旅館が明るく、月が出ているといっても、その人間の姿は、黒いシルエットとしか見えない。

「私たちが入っていたんで、きっと遠慮したのよ」

と、みや子がいった。

しかし、酒井には、そう思えなかった。二人の様子を見に来て、酒井に気づかれて、あわてて逃げたように見えたのだ。

酒井がそのことをいうと、みや子は、笑って、

「それでも、いいじゃありません？　きっとやきもちを焼いてたんだわ」

「そうかな」

「今、あの旅館に、十三人の泊まり客がいるそうよ。若い人もいるし、フルムーンを楽しんでいるご夫婦もいるわ」

「それは、知っていますよ」

「中には、中年の女の人で、ひとりで来ていて、男の泊まり客に声をかけられたいと願っている人もいるわ。もちろん、男の人でもね。そんな人たちにとっては、私とあなたは羨ましいんだと思うわ。だから、きっと様子を見に来たんだわ」

みや子は、むしろ、楽しそうにいった。

「なるほどね。私たちは、羨ましがられているわけか」

「そうよ。ねたまれてるかもね」

みや子は、クスクス笑い、一層、強く酒井に抱きついてきた。

酒井も、次第に、みや子の気持ちと同じになってくるのを感じた。楽しかった。他人に羨ましがられるのは、悪くない。とにかく、温泉を楽しみに来て、女まで手に入れたのだ。それもなかなかの美人を。

一時間近く、文字どおり、湯舟の中で、じゃれ合ってから、二人は、旅館に戻った。

翌二十九日。

朝食のとき、みや子はいたが、昼食のときには、姿が見えなかった。

午後六時の夕食のときにはいたが、酒井を見ても、知らん顔だった。

酒井は、自然と腹が立ってきた。昨夜、露天風呂から戻ったとき、みや子は、甘えた声で、「明日の夜も、一緒に行きましょうよ」と、いったからである。

夕食もそこそこに、広間から立ち去ろうとするみや子を、酒井は、二階への階段のところでつかまえて、

「どういうことなのか、説明してくれないか」

と、いった。

「別に、何もありませんわ」

みや子は、いやに他人行儀ないい方をした。

「昨夜、明日も一緒に、露天風呂に入りに行こうといったはずだよ」

「気が変わったんです。それに、カゼもひいてしまったし――」

「カゼをひいているようには、見えないね。私にお

願いがあるとも、いったはずだよ」
「忘れましたわ。明日、早く出発するんで、もう部屋に戻って、休みたいんですけど」
「いったい、どうしたんだ？　私がふられたということなのかね？　それなら、そういってほしいんだよ」
酒井は、逃げ腰のみや子の腕をつかみ、じっと見つめてきいた。
食事をすませた泊まり客が二人ばかり、階段のところで酒井たちを見つめてから、小声で何か話しながら、あがって行った。
「手を放してくださいません？」
と、みや子は相変わらずよそよそしい声でいった。
酒井は、手を放した。
「とにかく、説明してほしいんだよ」
「説明することなんか、何もありませんわ」
「それじゃあ、君は、私をからかっただけなのか？」
酒井は、自分を抑えようと思いながら、逆に荒い口調になっていった。
「そう思いたければ、思ってくださったって、結構ですわ」
と、みや子がいった。
そのいい方に、酒井は、カッとして、無意識に、平手で女の顔を叩いてしまった。
大きな音がして、みや子は、よろけた。
通りかかった若いカップルがびっくりして、酒井を見、みや子を見た。
みや子は、叩かれた頬をおさえて、階段を駈けあがって行った。
酒井は、呆然と立ちつくしていたが、自分の部屋に帰る気もしなくて、タオルだけを持って、旅館を出た。

露天風呂に向かって、足元を確かめながら、歩いて行った。

興奮しているためか、風の冷たさを感じなかった。円形の露天風呂に着くと、裸になって、飛び込んだ。

乳白色の温泉が、彼の身体を包んでくれる。それでもやたらと寂しくて、酒井は、海に向かって、

〈あんな女の一人や二人――〉

と、大声で唄い始めた。

その声が、海からの風にちぎれ、飛んでしまう。

「畜生！」

と、叫んでみたが、その声も、手応えもなく消えてしまった。

酒井は、湯舟のふちに頭をもたせ、夜空を見上げた。

（どうなってるんだ？）

と、思う。昨夜のみや子の態度は、芝居だったのだろうか？

ただ、酒井を、からかったのだろうか？

冷静に考えれば、自分は、あまり見栄えのしない五十男だ。だから、面白がって、からかったのか？

そうかもしれないし、違うかもしれない。

朝食のあと、彼女は、外出したようだが、そのとき、何かあったのか？　酒井には、独身で、亡くなった夫の遺産があるので、温泉めぐりなどを楽しんでいるのだといっていた。だが、本当は、夫がいて、それに会ってきたのだろうか？

酒井は、脱いだ丹前の袂から、煙草を取り出して、火をつけた。

（あんな女のことは、忘れるんだ）

と、酒井は自分にいい聞かせてみる。また、東京に帰れば、凶悪事件を追わなければならないのであ

る。

煙草を何本も灰にした。どのくらい入っていたのかわからないが、酒井は、風呂を出ると、丹前を着、下駄の音を立てて、旅館に戻った。

一階の広間では、隅でカラオケをやっていた。が、みや子の姿は、なかった。

酒井は、缶ビールを五本とおつまみを自動販売機で取り出し、広間にあぐらをかき、ビールを飲みながら、カラオケを聞いた。

酔って、彼も缶ビールを片手に、北島三郎の「歩」を唄い、自分の部屋に戻ったのは、午後十時を過ぎていた。

3

翌日、眼がさめると、二日酔いらしく、頭ががんがんした。昨夜、結局、缶ビールを十本、飲んだのだ。それに、支配人が、カラオケの参加者に、日本酒とウイスキーをサービスしたので、酒井は、それも飲んでいた。

ドアを叩くような音が、耳に聞こえる。

眼を開けて、布団の上に、起き上がったが、ドアを叩く音は、まだ消えてくれない。

また、ドアを叩く音。

現実の音だったのだ。誰かがドアを叩き、

「お客さん！　酒井さん！」

と、怒鳴っているのである。

酒井は、頭をおさえながら、部屋のドアを開けた。青い顔をした支配人と、二人の男が立っていた。

「警察の方が、お客さんに用があるとかで――」

と、支配人にいわれて、酒井は、思わず苦笑してしまった。

二人の男は、むっとした顔になって、警察手帳を示し、
「弘前署の者だが、あんたに聞きたいことがあるんだ」
と、片方がいった。
「いいですよ」
と、酒井はいい、部屋を出た。
廊下には、他の泊まり客がいて、酒井のほうを見つめている。
二人の刑事は、酒井をはさむようにして、一階の広間におりた。
「何を聞きたいのか、話してくれませんかね？」
と、しびれを切らして、酒井がきいた。
「あんたは、浦西みや子という泊まり客を知っているね？」
と、刑事の一人がきいた。
「知っていますよ。食事のとき、一緒になりますからね」
「それに、一緒に、海辺の露天風呂に入ったんじゃないのかね？」
「入っちゃいけませんか？」
酒井がきき返すと、相手は、顔を赤くして、
「まず質問に答えるんだ。一昨日の夜に、一緒に露天風呂へ入ったんだろう？　証人がいるから、嘘はつくなよ」
「行きましたよ」
「そして、昨日の午後七時過ぎに、一階広間の階段のところで、彼女とケンカをしていたそうだね？」
「別に、ケンカじゃありませんよ。話していただけです」
「腕をつかんで、話をしていたのかね？」
「そうです」

「そのあと、あんたは、彼女を露天風呂へ連れて行き、殺したんだな？」
「殺した？」
酒井の顔つきが、険しくなった。半信半疑で、もう一度、
「殺した？」
「そうだ。今朝早く、湯舟で死んでいるのが見つかったんだよ。後頭部を強打されてね。裸でつかっているところを、背後から殴られたんだ。どうだね？男らしく、すべてを吐いたら、どうかね？」
「殺された？　彼女が」
「あんたには、訊問したいことがあるんで、来てもらうよ」
と、もう一人の刑事が、うむをいわさぬ口調でいった。
「本当に殺されたのかどうか、死体を見せてくれませんか」
「いいだろう。連れて行こう」
と、刑事がいい、酒井は、旅館の外に出て、歩き出した。
露天風呂に着くと、刑事が、湯舟のふちの毛布を持ちあげて、中の死体を酒井に見せた。
酒井は、刑事だから、死体は見なれている。むごたらしく殺されている死体が、ほとんどである。
しかし、この死体だけは、別だった。
酒井の顔色が変わり、息を呑んだ。湯舟の中に沈んでいたということで、全体にふやけてしまい、それが、なおさら無残な感じにしていた。
一昨夜、彼女を、この露天風呂の中で、酒井は抱いたのだ。そのあとのケンカ。そして、今は、死体になって、横たわっている。
「なぜ、彼女は、殺されたんですか？」

と、酒井は刑事の一人にきいた。
「あんたが殺したんだろうが」
と、その刑事は睨むようにしていった。
「バカな。私は、殺してない。早く犯人を見つけなきゃ駄目だ」
思わず、酒井は、刑事の気持ちでいってしまった。が、その言葉が、相手を刺激したらしい。
二人の刑事は、いい合わせたように、眼をむき、ひとりが酒井の襟がみをつかんだ。
「おれたちは、お前さんが、殺したと睨んでるんだよ。彼女にちょっかいを出して、抵抗されたんで、殺したんだろうが」
と、一人がいった。
「私は、犯人じゃない。何度いえばわかるんだ！」
と、酒井も大声を出した。
「お前さんが、彼女と一緒に露天風呂に行ったことは、みんなが見てるんだよ。そして、昨日、大ゲンカをして、そのあと、お前さんが、ひとりで露天風呂から戻って来たことも知ってるんだ。ケンカのあと、なんとか露天風呂に連れ出したが、また、ケンカになり、かッとして、殴り殺したんだ。違うとは、いわせないぞ！」
と、刑事が怒鳴った。

4

弘前署に、捜査本部が置かれた。が、重要参考人として連行した酒井が、警視庁捜査一課の現職の刑事とわかって、困惑してしまった。
不老不死温泉の宿帳には、ただ単に、会社員と書かれていたのである。
「たとえ、警視庁の刑事でも、手心を加えるな。容

疑があれば、徹底的に訊問するんだ」
と、田原署長は、刑事たちにいった。
それは、マスコミへの配慮ということもあるし、東京への反撥ということもあった。
この事件を担当することになった刑事は、七人である。
その中に、矢木刑事もいた。田原署長から、もっとも頼りにならない男と思われている刑事だった。
三十日の午後に、捜査会議が開かれた。
そこで、田原署長が全員に向かい、改めてはっぱをかけた。
「捜査が進むにつれて、酒井勇の容疑は、ますます濃くなってきている。この線で、捜査を進めていく方針だ」
と、署長がいったとき、電話が鳴って、受話器を取った若い井上刑事が、
「矢木さん。電話ですよ」
と、いった。
それを、署長がじろりと睨んで、
「私用の電話か？」
「東京の娘さんからです」
「バカモノ！　そんな私用電話を、こんなときに取りつぐ奴がいるか！」
と、署長が怒鳴った。
「しかし、娘さんは今度の事件について、お父さんの矢木刑事に、何か話したいといっています」
と、井上が受話器を持ったまま、署長に言った。
「矢木クン。どういうことかね？　君の娘さんは、今度の事件には何か関係してるのかね？」
署長の田原は、眉を寄せて、矢木を見た。
矢木は、頼りなげに首を振って、
「私にも、わかりません」

「とにかく、電話に出てみたまえ」
と、田原は大声でいった。
「すいません」
とぺこりと田原に頭を下げてから、矢木は、受話器を受け取った。
「お父さん？」
と、父親とは違って、やたらに元気のいい娘の明日美の声が、ひびいてきた。
「あのなあ」
と、矢木はいつもの口癖が出て、
「今、大事な会議をやってるところなんだ。私用の電話は、禁じられているんだよ」
「私の電話も、大事なことよ。不老不死温泉で殺人があって、酒井刑事さんが捕まってしまったんでしょう？」
「なぜ、知ってるんだ？」
「今、東京に帰って、テレビを見てたのよ」
「しかし、酒井という名前は、まだ出してないはずだよ」
「現職刑事のSといってたわ。それなら、私が不老不死温泉を推薦した酒井さんに、間違いないわよ。ね、そうなんでしょう？」
「そうだとして、何をいいたいんだ？」
矢木は、署長の様子を気にしながらきいた。
「酒井さんは、絶対に、犯人なんかじゃないわ」
「しかしなあ。状況証拠が、みんな、あの人が怪しいといってるんだよ」
「私は、東京から青森まで、飛行機の中で一緒だったし、青森から弘前までも、一緒だったのよ。その間、いろいろなお話をしたわ。酒井さんは、お父さんと同じで、平刑事だけど、いい人だわ。人殺しなんかできる人じゃないわ」

「お前がそういってもなあ」
「あの酒井さんを、犯人と思うなんて、そちらの署長さんが、どうかしてるのよ。きっと、恥をかくことになるわ」
「しかしなあ」
「とにかく、酒井さんをすぐ釈放して。お願いだわ」
「何をぐずぐず、話してるんだ？」
と、田原署長がいった。
「あとで、電話するよ」
と、矢木はいい、受話器を置くと、田原に向かって、
「娘は、絶対に酒井刑事は、犯人なんかじゃないといっていまして――」
「君の娘さんは、酒井刑事のことを知っているのかね？」
「それが、たまたま、東京から弘前まで、一緒に来たということでして」
「それだけの知り合いのくせに、なぜ、犯人じゃないと、君の娘さんは、いい張るんだね？」
「酒井刑事とお喋りをしたが、そのときの感じでは、絶対に人殺しなんかできる人じゃないと、娘は、いっているんですが」
と、矢木がいうと、田原は、笑い出して、
「それだから、素人は困るんだ。印象だけで、犯人じゃないとかいうからね。もし、印象だけで、事件が解決できるんなら、警察はいらないんだ。易者にみてもらえばいいんだよ」
「しかし、なかなか直観力のある娘でして――」
「何をいってるんだ。明日も、聞き込みで、酒井勇が犯人だという証拠をつかむんだ」
と、田原署長は太い声でいった。

5

明日美は、東京に帰って、銀座の旅行社に出ていたが、落着きを失ってしまっていた。

三十一日になって、警視庁捜査一課の十津川という警部が、彼女に会いに来た。

十津川は、旅行社の上にある喫茶店に、明日美を連れて行った。

「酒井刑事は、私の部下でしてね。あなたが、不老不死温泉を紹介してくださったと聞いたものですから、いろいろとお聞きしたいと思いましてね」

と、十津川はいった。

明日美は、「ええ」と、肯いて、

「それで、私、責任を感じているんです。向こうの警察は、酒井さんのことを犯人扱いですもの」

「あなたは、違うと？」

「ええ。絶対に違いますわ。お話ししたのは、わずかでしたけど、いい人で、人を殺したりできるはずがありませんわ」

「そんなに信用してくれていると知ったら、酒井刑事は、きっと感激しますよ」

「酒井さんは、父に似ているんです。それで、とても親しみが持てるんですわ」

「お父さんも、警察の方ですか？」

「ええ。弘前署の刑事で、今度の事件を担当して動いていますわ」

「それなら安心だ。きっと、あなたと同じように、優しくて、聡明な方でしょうからね」

と、十津川がいうと、明日美は、手を振って、

「駄目ですわ」

「なぜです？」

「父は、警察に入って二十年近くなりますけど、一度も、犯人を逮捕したことがないんです。それで、今でも平刑事ですわ。今度も、きっと同じだと思います」
「一度も、犯人を挙げたことがない？」
「ええ。だから、窓際刑事って、かげ口を叩かれているらしいんです」
「素晴らしい」
十津川が、ニッコリ笑っていった。
明日美は、眼をぱちぱちさせて、
「何がですか？」
「一人も犯人を挙げないのに、二十年近く、第一線の刑事をやっているには、何か理由があるはずですからね。何か素晴らしい理由がね」
「きっと、縁起をかついでいるんですわ。署長さんや県警の偉い方が」
「縁起って？」
「父が参加した事件は、なぜだか、たいてい犯人が自首して、解決してしまうんですって。署長さんは、面白くないみたいですけど」
「なるほどね。今度の事件も、犯人が自首してくれるとありがたいんだが」
と、十津川はいった。
「これから、酒井刑事さんに、お会いになるんですか？」
「向こうの署長さんが許可してくれれば、ぜひ会いたいと思っていますよ」
「そのときは、私があの温泉を紹介したことを、お詫びしておいてください」
「あなたには、まったく責任はありませんよ」
と、十津川は笑顔でいった。
「殺された女の人は、確か東京の方でしたね？」

「名前は、浦西みや子。東京の新宿で、クラブをやっている女性です。店の名前は、名前からとったMIYAKO。今、私の部下が調べています」
「クラブのママをしていたんですか？」
「そういうことになっています。どんな店かわかりませんがね」
と、十津川はいった。

6

翌日、十津川は、弘前へ飛んだ。
酒井刑事と同じように、青森から弘前への道を選んだ。
弘前署では、田原署長に会って、留置されている酒井に会わせてもらった。
酒井は、十津川の顔を見るなり、
「申しわけありません」
と、頭を下げた。
「私も亀井君も、君がやったなんて思っていないよ」
「しかし、状況証拠は、すべて、私に不利なんでしょう？」
「そうらしいね。君と被害者のことを話してくれ」
「それが、よくわからんのです。警部、私が、魅力的な男に見えますか？」
「十分、魅力的だよ」
「よしてください。自分のことは、よく知っています」
と、酒井は笑ってから、
「持てない男の三要素というのは、チビ、デブ、ハゲだそうです。私は、デブじゃありませんが、背は低いし、頭はうすい。それに、年齢をとっています。ところが、彼女のほうから近づいて来た。最初は、

戸惑いましたが、私も男ですから、だんだんその気になってしまって――」
「当然だよ。第一、君は独身なんだから、女とつき合って、悪いはずはない。二十八日には、一緒に露天風呂に入ったんだな？」
「そうです。誘われましてね」
「そのとき、どんな話をしたか、覚えているかね？」
「今から考えると、歯の浮くようなことをいっていましたね。私のことを、頼りになる男みたいだとか、男は、いくつになっても、再婚ができてうらやましいとか。そうだ。私に、頼みがあるといっていました。明日、そのことを話すと」
「それを、君にいわないうちに、殺されてしまったわけだね？」
「そうです」
「その他には？」
「誰かが、様子を見に来ていましたね。あわてて逃げて行きました」
「男だったかね？　女だったかね？」
「男だったと思います。髪が短かったですからね。ただ、夜でしたからね。はっきりしないんです」
「君と被害者の様子を、見に来ていたと思うのかね？」
「みや子は、知らずに来て、私たちが入っていたので、あわてて逃げて行ったんだと、いっていましたが、私には、様子を見に来たんだとしか見えませんでした」
「翌日の二十九日は、どうしたんだ？」
「朝食のあと、彼女は外出しました。昼食のとき、いませんでしたから」
「そして、いつ頃、帰って来たんだ？」
「正確な時間はわかりませんが、六時の夕食のとき

は、いました。それで話しかけたんですが、昨夜の態度とまったく変わって、やたらによそよそしかったんです。むっとしたもので、夕食のあと彼女をつかまえて、難詰しました」

「それを、他の泊まり客に見られた？」

「そうです」

「それから？」

「むかむかするので、部屋に戻る気になれず、ひとりで、露天風呂に入りに行きました」

「時間は？」

「入っていたのは、午後八時近くから九時過ぎまでした。一時間あまりです。あれこれ考えながらでしたから、正確な時間はわからないんですが、九時少し過ぎでした」

「君が入っている間、浦西みや子も他の泊まり客も、露天風呂には入って来なかったんだね」

「もちろんです。ですから、彼女が、露天風呂で殺されたのは、私が出たあとのはずです」

と、酒井はいった。

「矢木明日美というきれいな娘さんが、君のことを心配していたよ」

「ああ、あの旅行社の娘さんですか」

と、酒井は急に明るい表情になって、

「いい娘さんですよ」

「君が、人殺しなんか出来るはずがないとも、いっていた」

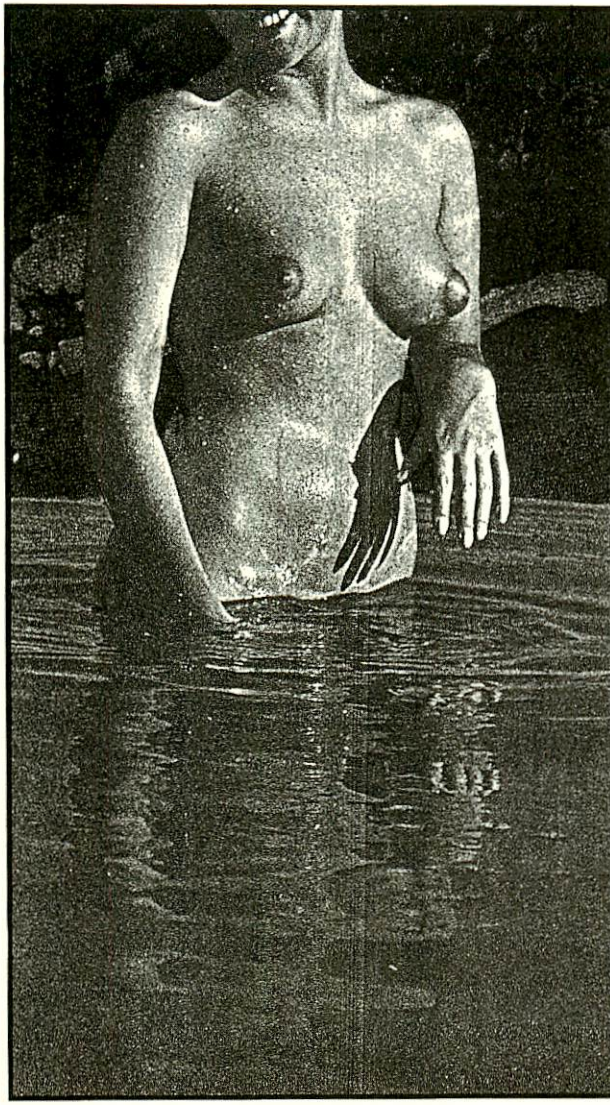
「お礼をいっておいてください」

と、酒井はいった。

7

十津川が、もう一度、田原署長に会って、酒井が

犯人とは思えないというと、
「私だって、現職の刑事が人を殺したとは、思いたくないんですがねえ」
「彼がいうには、自分が露天風呂に入っていたとき、誰も来なかったということですが」
「つまり、殺してないというわけでしょう？　それは、私も聞きましたよ。しかし、解剖の結果、死亡推定時刻は、二十九日の午後八時から九時の間とわかったんです。酒井刑事が、露天風呂に入っていたといっている時間なんですよ」
（まずいな）
と、十津川は眉を寄せた。
状況は、さらに悪化している。これでは、いくら酒井を弁護しても、身びいきとしか思われないだろう。
田原署長は、気の毒そうに十津川を見て、
「私も、何とか酒井刑事を助けたいと思いましたが、これだけの悪材料が揃っていると、無理ですな」
「わかります」
「今日は、こちらでホテルをとりましたから、誰かに案内させましょう」
と、田原は、もう事件は片付いたという感じでいった。
「それでは、矢木刑事に案内していただきたいですね。私は、二、三日こちらにいるつもりですが、その間、矢木刑事を傍におかせてくれませんか。なにしろ、この辺りは、初めてなので」
「矢木で、よろしいんですか？　いっておきますが、あの男は、頼りになりませんよ」
「実は、矢木刑事の娘さんと話をしたことがありましてね」
「ああ、なるほど。それなら納得できます。あの矢



木を指名されたんで、びっくりしたんですが」
と、田原署長はいった。
矢木が呼ばれた。
（父親だけに、よく似ているな）
と、十津川は思った。
細面で、痩せているせいか、男としては、なんとなく頼りなげに見えるのだ。
「しばらく、十津川警部についてくれ」
と、田原署長が矢木にいうと、矢木は、当惑した顔で、
「しかし、私は、今、殺人事件の捜査に当たっておりますが」
「いいんだよ。君は、いてもいなくてもいいし、それに、もう事件は解決したと同じだから、安心して十津川警部についてくれたらいいんだよ」
田原は、優しく、それだけにかえって冷たいいい方をした。
十津川は、そんないわれ方をする矢木に、
「実は、私が、特にあなたを指名したんですよ」
と、いった。
二人は、弘前署から、用意されたホテルまで、歩いて行った。
「明日美さんに、東京で会いましたよ」
と、歩きながら、十津川がいった。
「どうも、わがまま娘でして」
矢木は、恐縮して頭をかいた。
「いや、明るくて美人で、頭のいい娘さんじゃないですか」
「そうでしょうか」
「お父さんを自慢していましたよ」
「いや、私のことは、娘として、恥ずかしがっていると思いますよ。なにしろ、私は、窓際刑事ですか

ら」

「矢木さんは、酒井刑事が犯人だと思いますか？」

と、十津川がきくと、矢木は、また当惑した眼になって、

「状況証拠もありますし、県警としては、酒井刑事が、犯人と考えているようですが」

「あなたの意見は、どうなんですか？」

「私なんかは、歯車の一つにしか過ぎません。いや、歯車にもなっていないかもしれません。なにしろ――」

「窓際刑事？」

「もっぱら、そう呼ばれています」

と、矢木はニコニコ笑った。が、卑屈な笑い方ではなかった。むしろ、そう呼ばれることを楽しんでいる感じがした。十津川は、そのことに驚きながら、

「今夜、私と、つき合ってくれませんか？」

「と、おっしゃいますと？」

「ホテルを用意してくれた署長さんには悪いんだが、私は、例の不老不死温泉に泊まりたいと思っているんです。一緒に、露天風呂に入りませんか？」

「一緒にですか？」

「私も、一度、露天風呂というのに、入ってみたいと思っていたんですよ」

と、十津川はいった。

ホテルに着くと、キャンセルしてもらい、矢木と五能線で鰺作に向かった。

一五時〇五分、弘前発に乗ったのだが、鰺作まで行く列車は、このあと、もう一本もないのである。あとは、二つ手前の深浦までの列車が、二本あるだけだった。

「列車が少ないんですね」

と、十津川がいうと、矢木は、自分のことのよう

に恐縮して、
「なにしろ、田舎ですから」
と、いった。
不老不死温泉に着くと、十津川は、二階に部屋を取り、夕食は矢木とすませた。
そのあと、二人で徳利と盃を持って、海辺の露天風呂に出かけた。今朝まで、犯行現場ということで、ロープが張られていたのだが、それが、やっと除かれたのである。しかし、泊まり客にしてみれば、気持ちが悪いのと寒いのとで、十津川たちの他には、誰も入っていなかった。
ゆっくりと湯につかり、酒をくみかわしながら、十津川は、矢木と話をした。
「酒井刑事以外の泊まり客も、調べたんでしょうね」
「調べましたが、酒井刑事のように、被害者と関係のある人間は、見つかりませんでした」
「アリバイは？」
「夕食のあとから、十一時頃まで、ずっとカラオケをやっていた泊まり客が五人いまして、この人たちには、アリバイがあります。途中から、カラオケの仲間に入ったり、自分の部屋にいた泊まり客には、アリバイがありません」
「その数は？」
「七人です。酒井刑事を入れて、八人です」
「その七人の住所、名前は、わかっているわけですね？」
「事件のあと、出発した人もいますが、全員の住所と名前を控えました」
「七人の中に、東京の住所の人がいましたか？」
「三人いました。フルムーンで来ている老夫婦と、全国の温泉を取材して廻っているという四十歳のカ

メラマンです。三人とも、もうここを出発してしまいましたが、住所は確認してあります」

「あとで、教えてください。今夜は、飲みましょう」

と、十津川はいった。

潮騒を聞きながら、温泉につかり、酒を飲むのは悪くない。

「明日美さんは、東京で、被害者のことを調べてみると、いっていましたよ」

と、十津川がいうと、矢木は、

「どうも、困った娘です。探偵気取りで」

「しかし、お父さんに、手柄を立てさせたいという気持ちなんでしょう」

「ますます、父親の権威がなくなります」

と、矢木は笑った。むしろ、娘にハッパをかけられているのを、楽しんでいる口調だった。

「静かだねえ」

十津川は、夜の海に眼をやって、歎声をあげた。

東京では忘れていた静けさが、ここにはある。のびやかな気分になって、仕事のことを忘れるだろう。酒井刑事も、おそらく、豊かな気分になって、初めて出会った浦西みや子を、好きになったのではないのか。

「私もこんなに海の音を聞くのは、久しぶりです」

と、矢木がいう。

「矢木さんは、再婚は考えていないんですか？」

「娘には、すすめられているんですが、なにしろ、犯人を逮捕できない窓際刑事ですから、来てくれる人がいません」

「あなたは優しい人だから、もてると思いますよ」

そんな他愛のない話をしながら、十津川は、矢木という刑事を、次第に好きになっていくのを感じて

いた。
この刑事が、本当に窓際刑事なのか、それとも爪をかくした鷹なのかは、わからないが、好感が持てる人間であることだけは、間違いなかった。少なくとも、他人を裏切ることだけはしないだろう。

8

十津川は、部屋に戻ると、すぐ、東京に残してきた亀井刑事に電話をかけた。
「被害者のことで、何かわかったかね？」
「そのことですが、浦西みや子は、確かにクラブをやっていましたが、借金が多く、店の実権も、彼女にはなかったそうです」
「すると、何しに、不老不死温泉に来ていたんだろう？　たまには、ひとりになりたくてと、酒井刑事にはいっていたようなんだが」
「それは、眉唾ですね。同じ店のホステスたちは、浦西みや子が温泉好きだなんて、初耳だといっています。第一、今度、不老不死温泉で死んだと聞いて、なぜ、そんなところに行っていたのかと、びっくりしています」
と、亀井はいう。
「すると、温泉を楽しみに来ていたかどうか、わからないんだな？」
「そう思います」
「じゃあ、何のために、ここへ来ていたんだろう？」
「それが、わからなくて、困っているんです。店のマネージャーも、知らないといっています」
と、亀井はいってから、
「われわれが調べている場所に、妙な娘がうろうろしているんですが」

「どんな娘だ？」
「年齢は二十歳くらいで、探偵気取りで、あれこれ聞き廻っています」
「ああ」
と、十津川は肯いて、
「それなら、多分、矢木明日美という娘さんだよ」
「ご存じの方ですか？」
「酒井刑事に、不老不死温泉をすすめた旅行社のOLで、責任を感じているんだよ。こちらの矢木刑事の娘さんでもある。何を聞いて廻っているのか、興味があるね」
「それが、なにしろ素人なので、見当がつきません」
と、亀井がいった。
「カメさんでも、面くらっているのか？」
「そうです。われわれは、浦西みや子を恨んでいると思われる人間を探していますが、彼女は、ただ、やたらに走り廻っている感じでして」
「浦西みや子を恨んでいる人間が、何人かいるのかね？」
「ホステスが五人いるんですが、みや子の評判は、よくありませんね。その中の一人は、みや子に欺されたといって、怒っています」
「欺されたというのは？」
「有利な投資先があるといわれて、みや子に、一千万円の大金を貸したが、それを返してもらえないということらしいんです」
「そのホステスの名前は？」
「本橋ゆう子。二十八歳です」
「アリバイは、どうなってるんだね」
「それが、ママの浦西みや子が、突然、いなくなって、店自体が休みになってしまっていました。問題

のホステスも、仕方がなく、ここ五日間、ぶらぶらしていたといっていますが、証明はできません」
「本橋ゆう子か。どんな顔立ちなんだ？」
「色白で、丸顔です。女優のKに似ています。身長百六十八センチ。体重は五十二、三キロと思います」
「女性としては、背が高いんだな？」
「それに、髪を短くしているので、宝塚の男役のように見えますね」
と、亀井はいった。
「彼女のアリバイを、もう少し調べてみてくれないか」
「わかりました。おひとりで大丈夫ですか？」
「こちらに、カメさんに似ていて、手助けしてくれる人間がいるんだ」
と、十津川はいった。

9

明日美は、昼休みを利用して、都内の旅行社に電話をかけ廻った。
浦西みや子は、ひとりで温泉を楽しむような人間ではなかったという。それが不老不死温泉を知っていた可能性は、少ないだろう。とすると、みや子が、なぜ、あの温泉を知ったのだろうかと、明日美は、考えたのだ。
友人や知人にすすめられたか、旅行社で聞いたかのどちらかと思い、旅行社に電話をしてみたのである。
明日美の予感は、当たっていた。
新宿ステーションビルの中にある旅行社で、浦西みや子が、不老不死温泉をすすめられたことが、わ

かったのである。

明日美は、すぐ、この旅行社に出かけて行った。

「私が、おすすめしたんです。あの方が、殺されたと聞いて、びっくりしていますわ」

と、女子社員が明日美にいった。

「彼女は、いつ、ここへ来たんですか？」

明日美は、みや子の姪だと嘘をついて、相手に食いさがった。

「確か十月二十六日でしたわ。もうすぐ、閉めるというときに、駈け込んでいらっしゃったんです」

「なぜ、不老不死温泉をすすめたんですか？」

明日美は、大きな眼で相手を見た。

「そこだけをすすめたわけじゃありませんわ。どこか、東北で、辺鄙な場所にある一軒だけの温泉を教えてくれといわれたんで、五つほどすすめたんです。山形の姥湯とか、宮城の湯ノ倉とかですけど」

「みんな、一軒宿ね、知ってるわ。その中で、なぜ、不老不死温泉にしたんでしょうか？」

「あのお客様は、名前が気に入ったと、おっしゃってましたわ。不老不死というのが、気に入ったと。それに、一軒宿でも、電話のない旅館は駄目だとおっしゃって、結局、あの温泉になったんですわ」

と、相手はいってから、急に思い出したように、

「それにしても、あのお客さん、ちょっと変でしたわ」

「どんなところが？」

「もう夕方だったから、翌日ぐらいに行くんだと思ったんですけど、今日じゅうに行きたいと、おっしゃったんですよ。弘前までは行けたとしても、そこから先の五能線は、もうなくなっているといったんですけど、何としても、今日じゅうに、東京は発ちたいといわれるんです。それで、夜行列車をおすす

めしたんですわ。二〇時五一分に上野を出る青森行きの『あけぼの1号』に乗れば、弘前には、翌朝の八時三一分に着くから、五能線に乗るには、ちょうどいいんじゃありませんかって」
「そうしたのかしら？」
「と、思いますわ。新宿から上野まで、何分ぐらいかしらって、私にお聞きになりましたもの」
「なぜ、そんなに急いで、行きたがったのかしら？」
「わかりませんわ。本当に、あのお客様の姪ごさんなんですか？」
「なぜ？」
「実は、あのお客様の姪だという方が、写真をお持ちになって、聞きに見えたんです」
「それは、いつ？」
「十月二十七日ですわ」
「つまり、翌日ね？」
「ええ」
「それで、不老不死温泉のことを、教えたんですか？」
「ええ。構わないと思って――」
「どんな女の人でした？」
「そうね。二十五、六歳で、女性にしたら背の高い人でしたわ。バスケットか、バレーボールでも、やっている人みたいだった」
「顔立ちや服装も覚えています？」
「髪を短くしていて、ちょっとボーイッシュな感じでしたわ。今もいったように、背が高くて、百七十三センチぐらいはあったと思うの。そのせいか、ペチャンコな靴をはいていたわ。黒っぽいコートを着ていたけど、背が高いから、よく似合っていました。淡ましかったわ」
と、いって、その女子社員はニコッとした。

「あなたが、不老不死温泉のことを教えたら、何といっていました？」
「どんな温泉かとか、どの辺にあるのかと聞かれたので、パンフレットや五能線周辺の地図なんかを、渡しておきましたけど」
と、相手はいい、その二つを明日美にもくれた。
パンフレットは、不老不死温泉の旅館の案内で電話番号ものっていた。地図には、五能線の時刻表も添えてある。十二湖など、この地の景勝地も書き込まれていた。
「名前は、わかりませんね？」
「ええ」

10

明日美は、社長に三日間休暇をくださいと頼んだ。
「酒井さんのことで、もう一度、不老不死温泉へ行ってきたいんです」
「私は、あの男が人を殺したなんて、思えないんだがねえ」
「私もですわ。それで、私も、なんとか酒井さんの疑いを晴らして差しあげたいと思うんです」
「そいつは嬉しいね」
と、社長はいい、簡単に休みをくれた。
明日美は、すぐ弘前に向かった。着いたのは、夜になってである。
弘前署に電話をかけると、署長が、
「矢木君は、今、不老不死温泉に行ってるよ。警視庁の十津川警部が話し相手にほしいといったし、こちらにいても、あまり役に立たんのでね」
と、いった。
（ひどいことをいう署長さんだわ）

と、腹を立てながら、明日美は、不老不死温泉の旅館に電話をかけた。
「ああ、おれだよ」
相変わらず、呑気な声が聞こえた。
「今、弘前に帰って来てるの」
「何をしに、また来たんだ？」
「酒井さんの疑いを晴らしてあげたいからだわ」
「そんなことといったって、おまえなあ」
「これから、そっちへ行くわ。お父さんも、がんばってよ」
「がんばるったって、どうがんばるのか――」
「とにかく、待ってて」
明日美は、途中で電話を切ると、タクシーを拾って、不老不死温泉に向かった。
呑気な矢木も、さすがに、夜で心配だったとみえて、旅館の前で待っていた。その父親に向かって明日美は、
「タクシーの料金払って。お金が足りなくなっちゃった」
「しようがないな」
と、いいながら、矢木は、ポケットから財布を取り出した。
明日美は、さっさと旅館の中に入って行って、
「十津川警部さん！」
と、大声で呼んだ。
タクシー代を払った矢木が、あわてて飛び込んで来て、
「お前、そんな大声を出さなくても――」
「いいんだ。いいんだ」
と、十津川が二階から降りて来た。
十津川は、矢木父娘に、自動販売機のコーヒーとビールをすすめてから、

「何か、東京でわかりましたか？」
と、明日美にきいた。
明日美は、スケッチブックを広げて、十津川と矢木に見せた。
そこには、女の顔が描いてあった。
「私が、旅行社の人に聞いて描いたんです。この女の人が、浦西みや子さんの旅行のことを、いろいろと聞いていたそうなんです」
「ちょっと、聞いてきます」
と、矢木は、スケッチブックを持って、旅館の主人や従業員に聞いて廻って戻って来た。
「残念ですが、最近この女が来たことはないそうですよ」
と、矢木は十津川にいった。
「じゃあ、犯人じゃないのかしら」
明日美は、がっかりした顔になった。
「浦西みや子を追っかけて来たとすれば、二十八日か二十九日には、ここに来てないとおかしいからね」
と、矢木がいった。
「私も、そう思って、スケッチして持って来たんですけど」
明日美は、まだ口惜しそうな顔だった。
「そう、がっかりすることはないよ」
と、十津川はいった。
「そうですね。考えてみれば、ここに来なかったことは、もし、犯人なら当然ですね」
と、矢木もいう。
「なぜ？」
と、明日美は、きいた。
「考えてごらん。浦西みや子と顔見知りだったら、同じ旅館に泊まれば、警戒されてしまうよ」

「でも、お父さん。ここには、この旅館しかないわ」
「多分、離れた場所に泊まってたんだよ。そして、浦西みや子を呼び出したんだ。彼女は、そこへ会いに行ったのさ。だから、二十九日に、彼女は、朝食のあと、外出している」
「それに、帰ったあと、彼女の様子がおかしかったと、酒井刑事は、いっていますよ」
と、十津川はつけ加えた。
「そういえば、旅行社の人は、不老不死温泉のパンフレットだけでなく、この辺りの地図や五能線の時刻表も、この女性に渡しているんです。だから、ここ以外の温泉や旅館も、知っていたはずですわ」
明日美は、大きな眼をきらきら光らせて、いった。
それを受けるように、十津川は、
「酒井刑事が、いっていたんですが、浦西みや子と夜、海辺の露天風呂に入っていたら、誰かが様子を見に来て、こちらが気づいたら、逃げて行ったそうです。髪の毛が短く男だと思っていたが、この女性なら、夜なら男に見えても、おかしくありませんね」
「浦西みや子を殺そうと、露天風呂に近づいたということですか？」
と、矢木がきく。
「そうに決まってるわ」
と、明日美。
「だが、酒井刑事は、それらしい人間は、泊まり客の中にいなかったともいうんです」
「とすると、この近くの旅館に泊まっていた可能性が強いですね」
「五能線の沿線の旅館を、片っ端から調べてみますわ」

と、明日美が張り切っていった。

11

翌日、明日美と父親の矢木が、五能線沿線の聞き込みに出かけたあと、十津川は、東京に電話をかけた。

「浦西みや子は、あわててこの温泉に来ている。多分、誰かから逃げて来たんだと思うね。そのことと、彼女を追って来た若くて、背の高い女性がいる。髪が短くて、スポーツ選手の感じの女だ。この二つを至急調べて、返事をしてくれ」

と、十津川は亀井に頼んだ。

矢木父娘は、昼になっても、戻って来なかった。

二人で、必死になって、調べているのだろう。

午後二時を過ぎて、亀井から電話が入った。

「浦西みや子は、多額の借金をしていまして、その中に、暴力団員への借金があります。金額は一千万円ですが、その男に借りたというより、その男に借用証が渡ったということのようで。K組の真田という男で、乱暴な男ですから、危険を感じて、逃げたんだと思います」

「その真田が、殺した可能性は？」

「ありませんね。完全なアリバイがありますし、浦西みや子が死んだあとでも、一千万円を返させるんだといって、彼女の身内を探しているようです」

「女のほうの身元は、わかったかね？」

「警部のいわれる感じの女性が、一人います。名前は柿崎由美。二十五歳で、M電気のバレーの選手です」

「彼女も、浦西みや子に、金を貸していたというんじゃあるまいね？」

「いや、貸したのは、彼女の姉の秀美です。秀美は、五つ年上の三十歳で、小さな美容院をやっていました。そこへ、浦西みや子が、客として行っていたわけです。口のうまいみや子は、秀美を欺して、金を出させて、その額が、いつの間にか、千五百万円にもなっていたようです。有利な投資先があるという話で釣ったようです。もちろん返しません。秀美は、店を手放した末、今年の九月末に自殺しています」

「その妹か？」

「そうです。由美は、姉が自殺したとき、ちょうど南米に遠征していて、帰国して、姉の自殺を知り、必死になって、自殺の原因を調べていたといわれます」

「そして、見つけたか」

「そう思います」

「彼女の行方は？」

「不明ですが、東京の自宅にも、会社にも帰っていません」

「彼女が、殺したのかな」

「実は、もう一人、容疑者がいます。浦西みや子の恋人です」

「やはり、男がいたんだな。どんな男だ？」

「自称、投資コンサルタントで、名前は、小野木豊。四十歳です。口のうまい男で、今いった柿崎秀美の場合も、この男が投資の専門家になりすまして、浦西みや子と二人で、欺したわけです」

「この男は、今、どこにいるんだ？」

「これも、行方不明です。調べてみてわかったのは、この男が、二十七日に彼女のマンションの家財道具を売り払って、その金を持って、行方をくらませたことです」

「浦西みや子が、頼んでいたのかな」

と、十津川は呟いた。

その電話のあと、十津川は、旅館の主人に、浦西みや子が外に電話をしなかったか、聞いてみた。

「部屋から、外に電話はなさいませんでしたが、電話が掛かってきたことはありますよ」

「それは、いつです？」

「確か二十九日の午後九時頃だったと思います。男の人の声で、そのあと外出されたんです」

と、旅館の主人はいってから、続けて、

「警察の方には、このことも、ちゃんと申し上げたんですがね」

だが、県警は、酒井刑事を犯人と決めつけていたので、この電話には注意を払わなかったのだ。

十津川の頭の中で、少しずつストーリイができあがっていく。

浦西みや子は、K組の真田に借金を催促され、身の危険を感じ、あわててこの不老不死温泉に身を隠した。多分、来る途中で、小野木に電話をし、マンションの家財道具を売却し、その金を持って来てくれと、頼んだのだろう。酒井刑事に色目を使ったのは、なぜなのか？　おそらくあわてて逃げて来て、金がないので、酒井をうまく欺し、当座の金を手に入れようと考えたのではないか。

ところが、翌日になって、小野木から連絡があり、金が手に入った。だから、掌を返したように、酒井に冷たくなったのだ。

ここまでは、推理ができる。だが、小野木は、今、何処にいて、柿崎由美は、何をしたのか？

それは、矢木父娘が、なんとか解決してくれるだろう。

翌日の昼近くになって、矢木刑事から電話が入った。十津川は、柿崎由美と秀美のこと、小野木のこ

などを話して聞かせた。
「ところで、彼女は、見つかりましたか？」
「見つかりました。今、娘の明日美が見張っています。ここは、十二湖ですが、十津川さんもいらっしゃいますか？　それなら、お待ちしていますが」
「いや、ここは、青森だから、すべてあなたに委せますよ」
と、十津川はいった。

12

艫作から、五能線で、三つ目の駅が十二湖である。
名所といわれる十二湖があるので、駅前の国道沿いに、レストランやバス停、タクシー営業所、それに旅館などが並んでいる。
矢木が電話をすませて、明日美のところに戻ると、
「彼女、出かけるわよ」
と、彼女があわてた口調でいった。
旅館から、背の高い女性が出て来て、レンタ・カーに乗り込むところだった。
矢木と明日美は、タクシーの営業所に向かって、駈け出した。
小さな営業所で、二台しかない。その一台に乗り込むと、運転手に向かって、
「あのカローラをつけてくれ！」
と、矢木が叫んだ。
走り出した車の中で、矢木は、娘に十津川の言葉をそのまま伝えた。
「柿崎由美さんという名前なの」
明日美は、前方を見つめた恰好で呟いた。
由美の運転するカローラは、国道から、十二湖の矢印のついた道に曲がって行く。

道路は、ゆっくり登っていく。落石注意の看板が目につく。

右手に、日本キャニオンと呼ばれる大きな断崖が見えたが、由美の車は、停車せずに走り続け、十二湖に向かっている。

「浦西みや子を殺したのは、やはり彼女なの？」

と、明日美がきいた。

「動機もあるからね」

「それなら、なぜ、逃げないのかしら？」

「さあね。何を考えているのかな？」

「小野木という男も、姉さんの仇だと思って、狙っているのかしら？」

「そうだとすると、小野木は、この辺りにいるということだよ」

と、矢木はいった。

「雨が降ってきたわ」

明日美が、小さくいった。秋の細かい雨である。

運転手がワイパーのスイッチを入れた。

頭上をうっそうとした樹々の枝が覆い始め、視界が悪くなってきた。気温が、この季節にしては暖かいので、雨が煙のようになっているのかもしれない。

いくつかの湖の横を通り抜け、案内所のある駐車場に着いた。

ここから先は、車は、通行止めになっている。由美のカローラは、先に着いていた。

矢木と明日美は、タクシーから降りると、小雨の中で由美を探した。

近くに、イトウの養魚場や、十二湖の成り立ちなどを知らせる展示場があり、五、六人の観光客が見物していたが、その中に由美の姿はなかった。

「あそこ！」

と、明日美が小さく叫んだ。

人の気配のない道を、登って行く由美の姿が見えた。

父娘は、後を追った。

由美は、ときどき腕時計に眼をやりながら、ひたすら山道を登って行く。

前方にいくつめかの湖が見えてきた。十二湖は、すべての湖の色が違うといわれるが、この湖の水面は、コバルトブルーだった。

人の気配はまったくなく、雨が頭上に茂る枝葉を叩く音だけが聞こえる。

「男がいるわ」

と、明日美がいった。

四十歳ぐらいの男が、湖岸に立っていて、由美がそれに近づいて行く。

矢木と明日美が、息を殺して、彼らを見守った。

二人は、何か話し合っているようだったが、突然、男がナイフを取り出した。

由美のほうが、背も大きく若いが、それでも、ナイフに追われて、後ずさりしていく。

「危ない！」

と、明日美が叫び、矢木が日頃ののろくささが嘘のように、猛烈な勢いで、飛び出して行った。

ぎょっとして振り向いた男に、矢木が躍りかかり、殴りつけた。

男が倒れて気絶してしまうと、矢木は、自分のしたことに、びっくりした顔になった。

「大丈夫かな」

と、呟いてから、柿崎由美に向き直った。

「柿崎由美さんですね？」

「ええ」

と、背の高い娘は青白い顔で肯いた。

矢木は、警察手帳を見せてから、

「不老不死温泉で、浦西みや子を殺しましたね？」
「――」
由美は、黙っている。黙っているのは、自供したようなものだった。
矢木は、コートのポケットから、手拭いを取り出し、それを相手に渡した。
「まず、それで顔を拭いてください。せっかくの美しい顔が濡れてしまってますよ」
と、矢木はやさしくいった。
由美は、微笑した。が、まだ、こわばっている。
「話してくれませんか」
と、間を置いて、矢木はいった。
明日美が、傍から、
「酒井さんという、とても優しい人が、不老不死温泉で、浦西みや子さんを殺した容疑で、逮捕されてるんです。助けてください」
と、必死でいった。
「私の姉が――」
と、由美がいった。
「浦西みや子に欺されて、自殺に追い込まれたんですね」
「ええ」
「だから、お姉さんの仇を討った？」
「不老不死温泉で、彼女を殺したわ。どうしても、姉のためにそうしたかったんです」
「どこで、殺したんですか？　露天風呂で殺したとは、思えないんだけど」
「あの夜、旅館の外に出て来たので、車の中に入れてから、殺したんです。夜中になってから、露天風呂まで運んで行って、投げ込んでおいたんです」
「その前にも、殺そうとして、露天風呂に行ったことがあったんじゃありませんか？」

「ええ。前の日の夜に。でも、他に男の人が入っていたので、あわてて戻りました」
「そのとき、あなたは、旅館の丹前を着ていませんでしたか？」
「十二湖の旅館の丹前を着て、車で行ったんです。弘前で借りたレンタ・カーです。丹前を着ていけば、怪しまれないと思ったからです」
「そのあと、なぜ、逃げなかったんですか？」
「もう一人、姉を欺した男がいると聞いていたからですわ。きっと、浦西みや子の近くにいると思って」
「そこに倒れているのが、その男ですよ」
「やっぱり。今日、旅館に電話をかけてきて、ここへ来てくれれば、姉を欺した男を教えるといったんです」
と、由美がいう。
「話してくれてありがとう」
と、矢木は微笑した。
「私を、逮捕しないんですか？」
「自首してください」
と、矢木はいい、明日美を促して、歩き出した。
由美のほうが、狼狽して、
「私が逃げたら、どうなさるの？」
「そんな人じゃないと信じていますよ。それに、その下らない男は放っておきなさい。放っておいても、野垂れ死にする男です」
と、矢木はいった。

13

由美が自首して、酒井刑事が釈放されたのは、その日の夜である。

その頃、不老不死温泉で、矢木と明日美が、露天風呂に入っていた。

「十三年ぶりに、おまえの裸が見られると思っていたのに、水着を着てるのか」

と、矢木が残念そうにいった。

明日美は、笑って、

「本当に、私が裸になったら、お父さんが困るんでしょう?」

と、いったとき、弘前署の若い片岡(かたおか)刑事が、懐中電灯を手にやって来た。

「矢木さん」

と、怒ったような声で叫び、

「署長が、おかんむりですよ。事件がすんだんだから、早く戻って来いって」

「久しぶりに、娘と一緒に、温泉を楽しんでいるといっておいてくれないか」

「娘さん?」

片岡は、あわてて懐中電灯を握り、その明かりの中に明日美が見えると、

「失礼しました!」

と、叫んで、背中を見せた。

「一緒に入らないかね?」

と、矢木が声をかけた。

「いえ、結構です」

と、片岡は背中を向けたままいい、歩き出しながら、

「何だか知りませんが、十津川警部が、矢木さんにお礼をいってましたよ」

ある刑事の旅



1

警視庁捜査一課に新しく配属された二十八歳の若林には、一つだけ、小さな秘密があった。

若林は、二十六歳のときに結婚したが、二年で別れている。しかし、このことは、きちんと上司に報告してあった。

ただ、人事課に提出してある身上書の同居家族の欄に、嘘があった。

父　若林　宗一郎　五十八歳
母　　礼子　五十二歳
妹　　みどり　二十三歳

このうち、父の宗一郎は、若林が子供の頃から、ほとんど家にいたことがなかった。

もちろん、現在も、家には同居していない。どこかで、女と一緒に暮らしているのだろうが、その居所も、定かではないのだ。親戚の一人が、東北の温泉場で見かけたというが、それも確かではなかった。

若林も、妹のみどりも、母の手一つで育てられた。その母が、なぜ、離婚しなかったのか、若林にはよくわからない。母は、お前たちのためだというが、ひょっとすると、あんな父でも、母にはまだ未練があるのかと、思うことがあった。

十月二日、台風二十号が通過して、三日ぶりに東京に晴れ間が見えた日に、若林に電話がかかった。仕事中のことである。

電話交換手が「警視庁捜査一課の若林さんですか？」と、確かめ、若林が「はい」と肯くと、

「ちょっと、お待ちください」

と、いった。

すぐ、男の声に代わった。これも、事務的な調子で、

「こちらは、鹿児島市のS病院ですが、若林宗一郎さんを、ご存じですか？」

と、きいた。

若林の胸を、一瞬、心配よりも、当惑の感情が、走り抜けた。

父には、さまざまな形で、迷惑を受けていたからである。父は、おれは惚れっぽいのだといっていたが、若林にいわせれば、だらしがないのである。すぐ、女に惚れ、ときには欺されて借金を作り、それが若林にかぶさってきたこともある。

（また、何か、仕出かしたのではないか？）

父は、腕のいい家具職人だったが、ケンカ早くもあった。病院と聞いて、誰かを傷つけたのではないかとも、思ったのである。

それでも、若林は、

「私の父ですが――」

「一時間前に、こちらで亡くなられました。心不全です」

と、相手はいった。

「亡くなった――」

正直にいって、悲しみより、ほっとした気持ちのほうが強かった。

「ご遺体をどうするかといったことで、ご相談したいので、こちらに来ていただけませんか」

「そちらに、女が一緒にいるはず――」

と、いおうとして、若林は、その言葉を呑み込んだ。近くには、上司の十津川警部がいるし、同僚が机を並べている。

「とにかく、そちらに行きます」

と、若林はいった。

彼は、十津川に、父が亡くなったことを告げ、休暇届けを出した。
「父は、旅行好きで、九州へひとりで出かけていたのですが、鹿児島で急死したと、今、電話がありまして」
「そりゃあ、大変だ。君は、確か長男だったね？」
「はい」
「お父さんは、まだ、若いんじゃないか？」
「五十八歳です」
「若いなあ。すぐ行ってきなさい。旅費がなければ、私が出してあげるよ」
と、十津川はいった。
「大丈夫です」
と、若林はいい、警視庁を出ると、羽田空港に向かった。
空港に着いてからも、母に知らせたものかどうか、迷っていた。父は、どこかの女と一緒だったに違いない。多分、その女が、最期を看取ったのだろう。
そんなことを、母に知らせたくはなかった。
（向こうへ行ってからにしよう）
と、若林は思った。
だから、母には知らせず、ＯＬをしている妹のみどりにだけ、電話しておいた。
「今日、帰れないかもしれないが、おふくろには、捜査で徹夜になったと、いっておいてくれ」
と、若林はいった。
午後一時四五分発のＪＡＬ３９５便で、若林は、鹿児島に向かった。
父が亡くなったことへの悲しみは、いぜんとして、わいてこない。
（おれは、冷たいのだろうか？）
と、思ったりしながら、若林は、鹿児島空港に降

りた。台風一過の東京は、すっかり秋の気配だったが、鹿児島は、まだ暑さが残っていた。

汗を拭きながら、タクシー乗り場に並び、乗り込んだ。

鹿児島市内に入ってから、S病院を探した。

救急指定にはなっていたが、木造の、小さな病院だった。

受付で話をすると、白衣の事務員が若林を霊安室に案内した。すでに棺に入れられ、簡単に灯明がともっていた。

数年ぶりの父との対面だった。小柄だった父は、一層、小さくなってしまったように見えた。

「十日前に倒れられて、うちで治療中だったんですが、肺炎を併発しましてね」

と、事務員が説明した。

「誰が、ここへ、おやじを運んだんですか？」

と、若林はきいた。

「女の方ですよ。なんでも、若林さんと一緒に暮らしてる人だそうで、今日も、間もなくお見えになると思います」

と、事務員はいった。

（やっぱりだな）

と、若林は思いながら、

「どんな女の人ですか？」

「お名前は、川上（かわかみ）ゆき子さんというそうで、市内の方です。年齢ですか？　四十歳とおっしゃってます」

と、教えてくれた。

嫌でも、その女と会って、父のことを、話し合わなければならないだろうと、思った。迷惑しか感じなかった父でも、亡くなった今は、長男として、葬式など、後始末があるからである。

五時半頃になって、川上ゆき子という女がやって来た。

待合室で会ったのだが、ひと目見て、いかにも父の惚れそうな女だという気がした。

小柄で、ちょっと派手な感じなのだ。

「本当に、お父さんによく似ていらっしゃるわ」

と、川上ゆき子は、なれなれしい態度で、若林にいった。

若林が、どう対応していいか判断がつかず、黙っていると、

「若林さんは、いつも、あなたが自慢で、おれの息子は、東京で、警視庁にいる。息子にいえば、交通違反だって何だって、許してもらえるといってましたよ」

「僕には、そんな力はありませんよ」

と、若林はあわてていった。

「お父さんと最初に会ったのは、五年前でしたかねえ。阿蘇の内牧温泉でたまたまご一緒して、それ以来なんですよ。とてもいい人でしたけど、金遣いの荒い方でしたねえ」

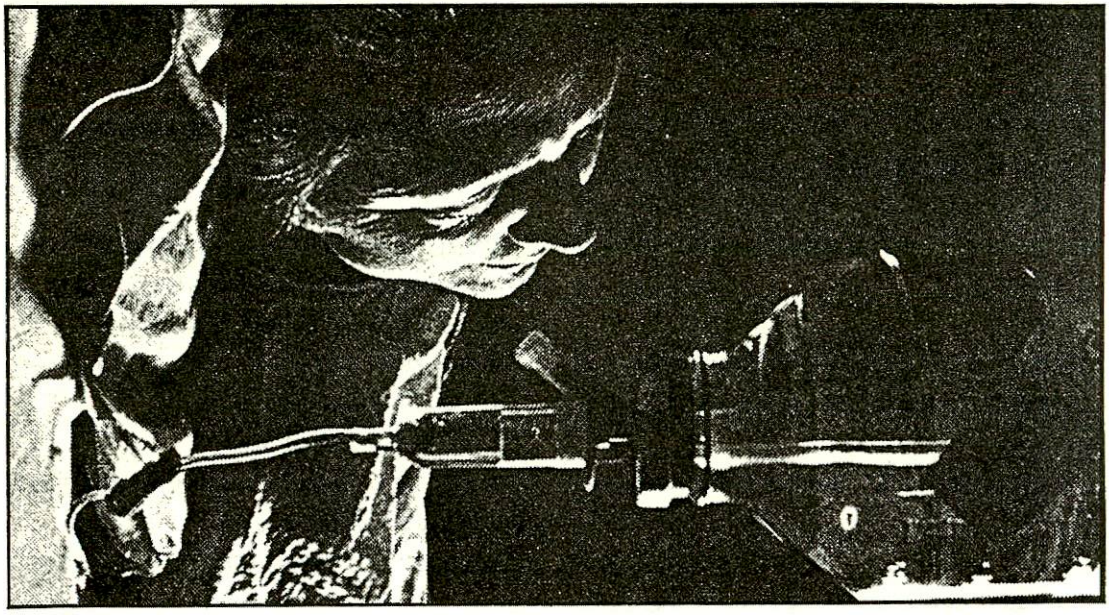
「――――」

若林は、黙って聞くより仕方がなかった。

この女との五年間がどんなものだったのか、まったく知らないからである。それに、何かいって言質をとられるのが、怖かったからでもある。父が前につき合っていた女に、借金のことで返済を求められて、困ったことがあった。

「何でも衝動的に買ってしまう人だし、他人におごるのが好きなんですよ、あの人。あたしも、惚れた弱味っていうのかしら。いわれるままに、お金をあげていたんですよ」

「――――」



「いえね。息子さんのあなたに、それを返してもらいたいなんて、いうんじゃありませんよ。そんな気は、ぜんぜん、ないんですよ」
「――――」
「あたしは、鹿児島の町で、小さな店をやっていましてね。なんとか、やりくりしていたんですけど、気がついたら、一千万近い借金ができてしまっていたんですよ」
「――――」
若林は、黙っていたが、内心、眉をひそめていた。
(その借金を、おれに、払ってくれとでもいうのだろうか?)
と、若林は思ったが、ゆき子は、それを見すかしたように、
「それを、なんとかしてくれなんていう気は、ありませんわよ。あなただって、サラリーマンなんだし、あたしも、好きで、若林さんにつくしたんですからねえ」
「――――」
「ただ、お金を借りた相手が、早く返さないと、あたしを殺すというんですよ」
「殺す?」
若林は、半信半疑で、ゆき子の顔を見た。どうしても、彼女を信用できなかったからだし、結局、金が欲しいのではないかと思ったからである。
「本当なんです。殺すって、いわれているんです」
と、ゆき子は声をふるわせた。
「どんな相手なんですか?」
「それが、あとでわかったんですけど、暴力団員がやっているサラ金だったんです」
「それなら、ここの警察に相談したらどうなんですか?」

と、若林がいうと、ゆき子は、手を振って、
「駄目ですよ。いくら頼んだって、こんなことで警察は、動いてくれやしません」
「弁護士を頼むというのは、どうです？」
と、若林がいうと、ゆき子は、また手を振って、
「そんなお金は、ありませんわ」
「しかし、僕だって、あなたの力になれませんよ」
「でも、あなたは、警察の方でしょう？」
「それは、そうですが――」
「それなら、あいつに、話をつけてくれませんか。あたしは、お金を返さないっていうんじゃないんです。ちゃんと、返すつもりですわ。ただ、待ってもらいたいのと、法外な利息を、少し、まけてくれればいいんです。その話を、つけてくださるだけでいいんですよ」
と、ゆき子はいった。

（そのくらいなら）
と、若林が思ったのは、何といっても、父の面倒を、五年間、みてくれた女である。それに、もし、断われば、母のところに、いろいろと嫌なことを持ってくるかもしれないと、思ったのである。
「相手は、何というサラ金会社なんですか？」
と、きくと、ゆき子は、ニッコリして、
「話をつけてくださるのね？」
「話をするだけですよ」
「それで、十分なんですよ。相手は、アケボノ金融といって、二宮（にのみや）という男が、一人でやっているようなものなんです」
「その二宮という男は、暴力団員なんですか？」
「自分で、そういってるんです。K組の組員だって」
「なるほどね」

「本当に、話をつけてくれますか？」
「話をするだけですよ」
と、若林は、念を押した。
「それだけでいいんです。本当に、助かりますわ。若林さんの息子さんが、刑事さんでよかったわ！」
と、ゆき子は大きな声をあげた。
若林は、一刻も早く片付けて、父の遺体を、東京に持ち帰りたかった。
「何処へ行けば、その二宮という男に会えるんですか？」
「さっそく、二宮と話をして、会う場所を、決めますわ。ああ、よかった」
と、ゆき子は大きな吐息をついた。
「とにかく、話をするだけですよ」
「それでいいんです。本当に、助かりましたわ」
と、ゆき子はまた、大げさにいってから、
「お父さんの遺体ですけど、そのまま、東京に、持っていくのは、大変でしょう？　焼いて、遺骨にして、持っていったほうがいいと思いますけど。私が、この近くの火葬場と、話をしておきましたわ」
「いや、あのまま、東京へ運びたいんですよ」
と、若林はいった。
「でも、大変ですわよ」
「いいんです」
「この陽気だと、すぐ腐ってきますわ。焼いて、遺骨にしておいたほうがいいと思いますけどねえ」
「病院に頼んで、冷却しておいてもらって、車で運びます」
と、若林はかたくなにいった。
彼が、これほど拘ったのは、母のことがあったからである。
父が亡くなったことを、母に黙っているわけには

いかない。長男として、あるいは妻として、葬儀を出さなければならないからである。

そのとき、遺骨になっていたのでは、母は、きっと、女の存在を感じて、嫌な思いをするだろう。そう思ったのだ。

ゆき子も、仕方がないというように、肩をすくめた。

若林は、病院に頼んで、父の遺体を腐らないようにしておいてもらい、自分は、市内のホテルに泊まった。

2

翌日の昼過ぎに、ゆき子から電話が入った。

「二宮に話をしました。あなたのことは、刑事とはいわずに、あたしの弟だといっておきましたわ。そういわないと、あいつは、あなたに会ってくれないからですわ。刑事だなんていったら、あいつのことだから、姿を隠してしまうから」

と、ゆき子はいった。

「それで、彼は、何処で会うといってるんですか？」

「あいつは、用心深くて、自分のマンションで会いたいっていってるんですよ。そこでなくちゃ、嫌だって。行ってくれます？」

「あなたも、同席するんでしょうね？」

「ええ。マンションの前で、待ってますわ」

と、ゆき子はいい、そのマンションの場所を、くわしく話した。

時間は、明日の午後九時ということなので、若林は、その時間に合わせて、教えられたマンションに出かけて行った。

五階建てのマンションである。電話のとおり、入

口に、ゆき子が、さすがに緊張した顔で待っていた。
「いちばん上の階なんです」
と、ゆき子はいい、エレベーターで、五階へあがって行った。
その角の部屋に、「二宮」という名札が、ついていた。
ゆき子が、ベルを鳴らすと、三十五、六歳の男が、顔をのぞかせた。なるほど、パンチパーマをかけた、チンピラ風の男である。
ゆき子が若林を紹介すると、二宮は、
「あんたと、二人だけで、話をしたいね」
と、若林にいった。
「じゃあ、そうして。わたしは、近所をひと廻りしてくるわ」
と、ゆき子はいい、さっさと部屋を出て行ってしまった。
男二人が、1DKの部屋に残された。
「実は、今の女性に頼まれてね」
と、若林は切り出した。
二宮は、むっとした顔で、黙っている。
「あんたに、殺されるんじゃないかって、彼女、怯えているんだよ。それで、僕が頼まれてね。借金のことは、必ず払うといってるんだから、なんとか――」
と、若林が、いいかけたときだった。
突然、二宮の右手が動いて、そこにあった木刀を摑んだ。
「あッ」
と、若林が叫ぶのと同時に、二宮が木刀で殴りかかってきた。
避ける余裕がなくて、とっさに、若林は、左手で払った。

左手が、じーんとしびれた。
二宮は、構わずに、第二撃を振りおろしてきた。
明らかに、相手は、若林を殺す気なのだ。
「何をするか！」
と、怒鳴っておいて、思いっきり蹴飛ばした。
二宮は、転倒した。が、ものすごい形相で、また木刀で殴りかかってきた。
若林も、必死になった。殺されるという恐怖が、若林を凶暴にした。
傍にあった花びんを投げつけ、ひるんだところを、思い切り投げ飛ばした。
二宮の身体が、宙を飛んで机に激突し、呻き声をあげて、動かなくなった。
若林は、驚いて、屈み込んだ。
「おい！　大丈夫か？」
と、声をかけたが、返事がない。二宮は、口から血を吹き出している。
（救急車だ）
と、思い、電話を探したが、見つからなかった。
「くそ！」
と、叫び、若林は、部屋を飛び出した。
エレベーターで一階へおりたが、管理人は、もう帰って、いなくなっていた。
若林は、近くの公衆電話まで走って、一一九番した。
五、六分して、救急車が、サイレンを鳴らしてやって来た。
若林は、マンションの前で待っていて、救急隊員二人を五階へ案内した。
二人は、部屋に入り、二宮の身体をみていたが、その一人が、
「もう死んでいますよ」

「死んでる？」
若林は、愕然として、もう一度、二宮を見つめた。
「間違いなく、死んでいますよ。心臓がとまっている」
「とにかく、病院へ運んでください。何としても助けたいんだ」
「病院へは運びますが、警察にも連絡したほうがいいですね」
「なぜ、警察へ？」
「死因に、不審な点があるからですよ」
と、救急隊員はいった。
確かに、そうだろうと、若林は思った。自分が投げ飛ばしたのだから。
「とにかく、病院へ運んでくれ」
と、もう一度、若林はいった。
救急隊員は、二宮の身体を担架にのせ、車に運んだ。
若林も、救急車に乗り込んだ。が、走り出してから、ゆき子に連絡しておくのを忘れたことに気がついた。
若林は、あわてて、車を止めてもらい、
「連絡しておかなければ、ならないんです。あとから、すぐ駈けつけますから」
と、いった。
病院の名前と場所を聞き、若林は、もう一度、マンションに引き返した。五階の部屋に戻ったが、まだ、ゆき子の姿はなかった。仕方がなく、若林は、部屋にあったメモ用紙に、ボールペンで、
〈至急、N病院へ来てください。　若林〉
と、書いて、また、マンションを出た。
タクシーを拾って、N病院の名前をいったが、タ

クシーが走り出すと、急に、疲れが襲いかかってくるのを覚えた。

今日の出来事が、まるで悪夢のように感じられた。いや、悪夢とまではいかなかった。ただ、当惑し、混乱しているだけだったからである。

3

N病院に着くと、パトカーが一台、前に着いていた。あの救急隊員が、連絡したのだろう。

病院の中は、この時間なので、うす暗く、人の気配はほとんどない。

若林が入って行くと、そこにいた救急隊員の一人が、警官に向かって、

「この人ですよ」

と、若林を指さして見せた。

二人の警官が、緊張した顔で若林に近づいて来た。

「あんたが、犯人だな？」

と、片方の警官が乾いた声をかけてきた。

「犯人？」

「そうだ。二宮良介は、死んでいる。これは、殺人事件だ。あんたが、殺したんだろう？」

「正当防衛ですよ。向こうが、木刀で殴りかかってきたんで、仕方なく、投げ飛ばしただけです。それは、調べてくれればわかるはずだ」

と、若林はいった。

「それは、もちろん、調べるよ。しかし、あんたには、署に来てもらう」

と、警官はいった。

若林は、その場から、鹿児島中央警察署に連行された。

中央署では、藤村という若い警部が指揮をとるこ

とになったが、容疑者として連行した若林が警視庁の刑事と知って、驚いたようだった。
言葉遣いも、急に丁寧になった。が、若林の言葉を信じたかどうかは、わからなかった。
「今、被害者の部屋を調べています。あなたの証言どおりなら、正当防衛が認められますよ」
と、藤村はいった。
「川上ゆき子という女性は、まだ来ませんか？」
と、若林はきいた。
「探しているんですが、まだです。夜が明ければ、出頭してくると思いますよ」
と、藤村は楽観的にいった。
「しかし、N病院へ行っているという置き手紙をしてきたんですがねえ」
「あなたに、話をつけてほしいといったんでしょう？」
「そうです」
「それなのに、こんな事件になってしまったので、彼女は、動転してしまったのかもしれませんよ。それなら、落ち着いたら、必ず出頭してきますよ」
と、藤村はいった。
夜が明けた。若林は、丁重に扱われたとはいえ、留置されて、夜を明かした。
死んだ二宮良介の部屋を調べていた刑事たちが、帰ってきた。その中から、藤村警部が、若林のところへやって来た。が、その表情は、ひどく険しくなっていた。
「嘘をつかれちゃ困りますね」
と、藤村はいった。
「嘘って、何のことですか？」
「木刀で殴りかかられたので、仕方なく投げ飛ばしたといわれましたね？」

「そのとおりだから、ありのままをいったんですよ」
「しかし、若林さん。あの部屋をいくら探しても、木刀なんかありませんでしたよ」
と、藤村はいった。
「そんな馬鹿な。一メートル以上の木刀でしたよ。このとおり、私は、左腕を殴られているんです」
と、若林は、アザのできた左腕を見せた。
「それなら、なぜ、あの部屋に木刀がなかったんでしょうね？」
「わかりませんよ」
「もう一つ。あなたは、部屋の中に電話がなかったので、外に出て一一九番したといいましたね？」
「そうです。いくら探しても見つからなかったんで、仕方なく外に飛び出して、救急車を呼んだんです」
「これを見てください」
と、藤村はいい、ポラロイドで撮った写真を見せた。
間違いなく、あの部屋だった。
「左隅に、電話が、ちゃんとあるでしょう？」
「あッ」
と、思わず、若林は声をあげてしまった。
そこに、白い電話機が、低い台にのって、ちゃんと置かれていたからである。
「この電話は、本当に通じるんですか？」
と、若林はきいた。
藤村は、苦笑して、
「かけてみましたが、ちゃんと通じましたよ」
「誓っていいますが、ここには、電話はなかったんですよ。不思議で仕方がない」
「それなら、なぜ、電話があるんですかねえ」
と、藤村はいった。その眼は、若林の言葉を信じ

ているものではなかった。
「この電話は、前からついていたんですか？」
と、若林はきいた。
「それも調べましたよ。この番号の電話は、二年前から、この部屋についているものです」
と、藤村は冷たい語調でいった。
昼過ぎになって、やっと、川上ゆき子が出頭してきた。
しかし、若林には、直接会わせてはくれなかった。
藤村が彼女を訊問したあと、その結果を持って、取調室で若林に話してくれた。
「彼女から、いろいろと話を聞きましたよ」
と、藤村は相変わらず冷たい調子でいった。
「それなら、私が嘘をついていないことを、わかってくれたでしょう？」
若林は、期待を籠めて、きいた。
「半分は、事実でしたね」
「どういうことですか？　それは」
「まず、彼女が、あなたのお父さんと、五年間、同棲していたことは事実でした」
「そういったはずですよ」
「しかし、借金について、話し合ったというのは、嘘だといっていますよ」
「嘘？　どういうことですか？」
「川上ゆき子は、借金なんかしてないといってるんです」
「そんな馬鹿な！　一千万近い借金があって、その返済を迫られている。殺されそうだから、私に、話してくれと、いったんですよ。二宮という男は、サラ金をやっているんでしょう？」
「そうです」
と、藤村は肯いてから、

「しかし、川上ゆき子は、一円も借りていないといっていますよ。確かに、彼女は、銀行に六百万円を越える預金があります」
「それなら、何をしに、私は、二宮に会いに出かけたというんですか？」
と、若林はきき返した。
「それですがね、亡くなったあなたのお父さんが、二宮に三百万円の借金をしているんです」
「おやじが？」
「そうです」
「間違いないんですか？」
「今、二宮のやっていたサラ金の店を調べています。それで、二宮は、返済できないあなたのお父さんに、暴行を働いた。これは、医者の話でも証明されたんですが、あの病院に運ばれたとき、明らかに殴られたと思われる痕が、何カ所かあったというんです」
「――――」
「川上ゆき子は、そのことをあなたに話した。すると、あなたは、顔色を変えて、二宮に会いに行った。あわてて止めようとしたのだが、間に合わなかったといっています。つまりあなたは、亡くなった父親が二宮に乱暴されたと聞いて、カッとして、彼に会いに行き、殺してしまったんだ。もちろん、最初から殺すつもりはなかったとは思いますがね」
「違う！」
と、若林は叫んだ。

4

若林刑事が殺人容疑で逮捕されたことは、警視庁捜査一課に、衝撃となって伝えられた。
翌々日、上司の十津川と、同僚の亀井刑事が、鹿

児島に飛んだ。

若林の留置されている中央署に行き、今度の事件を担当している藤村警部に会った。

若く、長身で、現代風の男だった。

「若林刑事は、お気の毒だという気もしているのですよ」

と、藤村は穏やかな調子でいった。

「気の毒というのは、どういうことですか？」

「若林刑事の気持ちもわかるということです。数年ぶりに会った父親は、死亡していた。それだけでも、悲しいわけです。その父親が、サラ金から借金をしていて、そのサラ金の男が、父親に対して殴る蹴るの乱暴をして、それが入院の直接の原因と知った。カッとして、相手の男のマンションに乗り込み、投げ飛ばし、死なせてしまった。最初から殺すつもりはなかったと思いますが、投げつけて殺したことは、本人も認めているんですよ」

と、藤村はいった。

「すると、殺意はなかったことになりますね？」

「そう思いますが、そのあとの処置が、よくありません」

と、藤村はいった。

「どういうことですか？」

「二宮良介が倒れて動かなくなったとき、すぐ一一九番すれば、あるいは、二宮は助かったかもしれないのですよ。ところが、若林さんは、わざと部屋の電話を使わず、外に出て、公衆電話から一一九番しているんですよ」

「彼は、そんな男じゃありませんよ」

と、亀井がいった。

「それなら、なぜ、部屋の電話を使わなかったんですかね？　眼の前に電話があったのに」

「それは、わかりませんが――」
「さらに、若林さんは、二宮が木刀で殴りかかってきたので、やむなく投げ飛ばしたといっているんですが、現場に木刀はなかったんですよ。少しでも自分の罪を軽くしようとして、嘘をついたんでしょうが、心証は悪くなりますねえ」
と、藤村はいった。
「他にも、何かありますか？」
と、十津川は、冷静にきいた。
「若林刑事は、川上ゆき子が借金をしていて、頼まれて、二宮に話をつけに行ったら、いきなり木刀で殴りかかってきたといっているんですが、いくら調べても、彼女は借金をしていない。借金をしていたのは、亡くなった若林刑事の父親だったのです」
藤村は、その証拠として、一枚の借用証を十津川に見せた。
確かに、若林の父親の名前で、三百万円の金額が書き込まれていた。
「これだけですか？」
と、十津川がきくと、藤村は、むっとした顔で、
「これだけあれば、十分でしょう」
と、切り口上でいった。

5

そのあと、十津川は、県警本部長に頼み込んで、留置中の若林に会わせてもらった。
若く、元気な若林も、さすがに青ざめて、疲れ切った顔になっていた。
「配属早々、こんなことになって、申しわけありません」
と、若林は、十津川の顔を見るなり、頭を下げた。

「そんなことは、構わないさ」
と、十津川は笑ってから、
「ただどうも、ここの警察の話が信じられないんだよ。君らしくないからね。わざと救急車を呼ぶのを遅らせたとか、木刀の件とかがね。本当はどうなのか、君の話を聞きたかったんだ」
「正直にいうと、私自身にも、よくわからないんです」
と、若林はいった。
「じゃあ、電話の件から話してくれ」
と、十津川は促した。
「確かに、あの部屋に電話はなかったんです。だから、外へ出てかけました」
「だが、電話はあった？」
「そうなんです。あの部屋に、ちゃんとあったんです。二年前から引いていたといわれました」
「君が、興奮して、見つけられなかったんじゃないのか？」
と、亀井がきいた。
「それはありません。１ＤＫの部屋ですよ。それに、部屋の隅に台にのっていたというんです。見逃すことなんかあり得ませんよ」
若林は、むきになっていった。
「木刀の件は、どうなんだ？」
「間違いなく、二宮は、木刀で殴りかかってきたんです」
「いきなりかね？」
と、十津川がきいた。
「そうなんです。私は、川上ゆき子に頼まれて、話し合いに行ったんです。ところが、彼女が座を外した瞬間、傍にあった木刀で、殴りかかってきたんです。殺されると思いました」

「話がこじれてということではなかったのかね？」
「違います。これから、話をしようとした瞬間です。今から考えると、木刀を用意して、待っていたとしか思えません」
「しかし、二宮が、なぜ、君を殺そうとするのかね？」
と、亀井がきいた。
「それが、わからないんです」
「二宮良介という男に、前に会ったことはないのかね？」
と、十津川はきいた。
「いくら考えても、初めて会った男です」
と、若林はいった。
「川上ゆき子という女は、どう思うね？」
と、十津川はきいた。
「嘘つきです」
と、若林はいった。
「しかし、君に嘘をつく理由は何だろう？」
「それも、よくわからないんです。私に嘘をついても、仕方がないと思うんですが」
と、若林はいった。
若林に話を聞いたあと、十津川と亀井は、川上ゆき子に会いに出かけた。
彼女のマンションは、鹿児島市の盛り場の近くにあった。
十津川たちが行ったとき、ゆき子は、化粧をすませて、これから店へ出るところだった。
「働かないと、生きていけませんものね」
と、ゆき子は小さく笑ってから、
「若林さんには、本当に、申しわけないことをしてしまいましたわ」
と、いった。

「どういうことですか？」
と、十津川がきいた。
「亡くなった、若林さんのお父さんのことですわ。二宮のサラ金から、三百万円の借金をしていて、暴力団あがりのあいつが、お父さんに殴る蹴るの乱暴をしたなんて、若林さんに話さなければよかったと思っているんです」
「ええ」
「若林さんが、あんなにかッとして、二宮を殺してしまうなんて、思わなかったんです。何年も家を明けていたお父さんなのに、愛していらっしゃったんですわね」
「若林刑事は、違うことをいっていますがねえ」
と、亀井がいった。
「そうですか？」
「あなたが、二宮に借金をしていて、あなたに頼まれて、話をしに行ったんだと」
「それは、違いますわ。わたしは、一円も借りていませんし、借金をしていたのは、若林さんのお父さんなんですよ」
「あなたも、二宮のマンションに行ったんですね？」
と、十津川がきいた。
「ええ。若林さんが二宮の家を聞くので、案内したんですわ」
と、ゆき子はいう。
「二宮を救急車に乗せたあと、あなたに置き手紙をしたと、若林はいっているんですが、その手紙は見ましたか？」
「いいえ」
と、ゆき子は首を横に振った。
「すると、若林刑事を案内したあと、あなたは、二宮のマンションには行っていないということです

か？」
「行っていませんわ。わたしには、行く用がありませんでしたもの」
と、ゆき子はいった。
「若林刑事のお父さんとは、五年間、同棲していたそうですね？」
と、亀井がきいた。
「同棲していた時期もありましたし、別のマンションでという時期もありましたわ」
「愛していたんですか？」
「さあ」
と、ゆき子は首をかしげてから、
「愛していたこともあったし、同情のときもあったし、いろいろですわ」
と、いった。
そのあと、ゆき子が、店へ行く時間だというので、十津川と亀井は、彼女のマンションを出た。
すでに夕闇が広がっていて、ネオンがまたたいている。
ゆき子のような水商売の女たちが、そそくさと歩いている姿が見えた。
「あの女を、どう思いますか？」
と、歩きながら、亀井が十津川にきいた。
「まだ、わからんね」
「しかし、彼女は、嘘をついていますよ」
と、亀井はいった。
「つまり、若林刑事は、本当のことをいっているということだろう？」
「そうです」
「しかし、それが、今、通用するかな？　鹿児島県警は、明らかに、若林刑事が保身のために嘘をついていると、思っているよ」

「なんとかして、若林を助けてやりたいですね。捜査一課に来たばかりですが、優秀な男です」
と、亀井はいった。
「どうやって、若林を助けるね？」
「わかりませんが、彼は、きっと、あの女にいいように利用されたんですよ」
と、亀井はいった。
「しかし、若林自身、二宮良介を殺したことを認めているし、現実に、彼の父親は、三百万円を借りていた。助けるのは、大変な仕事になるかもしれないぞ」
「わかっていますが――」
「若林は、すぐには送検されないだろう。ゆっくり考えてみようじゃないか」
と、十津川はいった。
二人は、ＪＲ西鹿児島駅近くの喫茶店に入った。
鹿児島市には二つの駅があるが、鹿児島駅より、西鹿児島駅のほうが、市の中心地に近いのだ。
店の中は、すいていて、話をするにはよかった。
コーヒーを注文してからの話になった。
「若林が、事実を話しているのなら、川上ゆき子が、嘘をついていることになる」
と、十津川は煙草に火をつけて、亀井にいった。
「彼女は、嘘をついていますよ」
と、亀井はいった。
「そうだとすると、なぜ、彼女は、若林に嘘をついたんだろう？」
「問題は、そこにありそうですね」
「一つ考えられるストーリイがあるよ」
と、十津川はいった。
「どんなストーリイですか？」
「川上ゆき子が、若林を利用して、二宮という男を

殺そうとしたというストーリイだよ」

と、十津川はいった。

「なるほど」

と、亀井は肯いたが、すぐ首をかしげて、

「しかし、もしそうなら、なぜ、彼女は、本当のことを、最初から、若林にいわなかったんでしょうか？　父親は三百万を二宮のサラ金に借りていて、殴る蹴るの乱暴を受け、そのせいで入院し、結局、死亡したわけです。それを、そのまま若林に伝えたほうが、若林は、かッとなるはずですよ。それなのに、川上ゆき子は、自分が二宮から一千万円を借りて、その返済を迫られているから、話をつけてほしいと、若林にいったわけです。なぜ、そんなことをいったのか、わかりませんね。話し合いに行ったとなると、若林は、二宮を殺す可能性は、少なくなるわけですから」

「木刀の件は、どう思うね？」

と、十津川がきくと、亀井は、

「あれも、若林の言葉が、正しいのだと思います。そう考えないと、彼が可哀そうです」

と、亀井はいった。

「すると、こうなるね。若林は、話し合いのつもりで行ったが、二宮のほうは、最初から木刀を用意しておいて、いきなり若林に殴りかかってきた」

「そうです」

「勘ぐれば、ゆき子は、二宮に若林を殺させようと考えて、彼の所に行かせたことになる」

と、十津川はいった。

亀井は、コーヒーをひと口飲んでから、

「そうですね。そうなるんだ」

「しかし、二宮は、逆に若林に殺されてしまった」

「そうです」

「もし、そうだとすると、ゆき子は、なぜ、若林を殺したかったのかという疑問にぶつかる。若林の話では、彼女は、初めて会った女だというし、その言葉に嘘はないと思うね」

「川上ゆき子は、若林の父親と五年間暮らした女でしょう？　若林に、その間の苦労に対して、いくらか払えといい、若林がそれを断わったからというのは、どうですか？」

「しかし、だからといって、若林を殺したいとは思わないだろう？　弁護士に頼んで、金を取ろうとするんじゃないかね。現に、彼女には借金がなくて、六百万円の預金があったんだ」

「確かに、そうですね」

と、亀井も肯いた。

しかし、これでは、疑問は残ってしまうのだ。

十津川は、ゆっくりとコーヒーを口に運んでから、

「カメさんは、あの川上ゆき子をどう思うね？」

「美人じゃありませんが、男好きのする顔でしょうね。水商売に向いているんじゃありませんか」

と、亀井はいった。

「若林刑事の父親のほうは、どうだ？」

「どうだといいますと？」

「若林刑事の話だと、女にはマメな性格だったといっている。それに、昔は腕のいい職人だったらしい。だが、金がないどころか、三百万の借金のある初老の男だ。水商売の川上ゆき子が、惚れる相手だろうか？」

と、十津川はきいた。

「タデ食う虫も何とかといいますが、ちょっと、不似合いなカップルではありますね」

と、亀井はいった。

「五年も、同棲していたという話は、どうだね？」

「正直にいって、信じられませんね」
「だが、タデ食う虫と、君もいったが――」
「調べてみましょう。本当に、五年前からの仲だったかどうか」
と、亀井はいった。

6

その日と、次の日をかけて、亀井は、死んだ若林の父親の人間関係を洗い、また、川上ゆき子について、聞き込みを行なった。
十津川が動かなかったのは、二人で歩き廻ったのでは、目立って、ゆき子に警戒させてしまうと思ったからである。
若林は、留置されたままだった。彼は、二宮を殺したことは認めているのだから、釈放されなくて当然だった。
十津川と亀井は、一昨日と同じ喫茶店で、コーヒーを飲んだ。
「何かわかったかね？」
と、十津川は期待を持って、亀井にきいた。
「やはり、若林の父親と川上ゆき子との仲は、五年前からではないみたいです。若林の父親は、二年前から、旭荘というアパートに住んでいましたが、川上ゆき子が、訪ねてくるようになったのは、せいぜい、一年ほど前からのようです」
「関係があったことは、間違いないんだな？」
「そう思います。それに、若林の父親は、その一年間に、例のサラ金から三百万円の借金をしています。多分、彼女に貢ぐためだったと思います」
「それなら、彼女が、恨むことはないわけだな」
「そのとおりです。したがって、そのために、ゆき

子が若林刑事を殺させようとしたとは、考えられません」

と、亀井はいった。

「すると、他の理由か？　だが、若林は、個人的に川上ゆき子を知らなかったといっている」

十津川は、そういって、考え込んだ。

一本二本と、煙草をたて続けに吸っていたが、

「若林が、変なことをいっていたな」

「どんなことですか？」

「父親の遺体のことだ。彼がそのまま東京に運びたいといったら、彼女は、この鹿児島で焼いて、遺骨にして、持ち帰るようにすすめた。すすめただけでなく、勝手にその手続きをしてしまっていたんだ。若林が強く主張したので、これは中止されたがね」

「若林にしてみれば、父親の遺体を東京に運んで、母親に、正式に葬式をさせてやりたいと思ったわけですね？」

「そうらしい」

「ひょっとすると、それが、怪我の功名になるかもしれませんね」

と、亀井はいって、ニヤッとした。

「カメさんも、その考えか？」

「少しばかり、刑事的な考え方かもしれませんが――」

「この推理が正しければ、若林刑事を助けられるかもしれないな」

と、十津川はいった。

十津川は、鹿児島中央署に行き、署長の石田に、

「お願いがあります」

と、いった。

石田は、眉をひそめて、

「若林刑事の釈放要求なら、駄目ですよ。彼自身、

殺したことは認めているんだから」
「それが無理なことは、知っています。私のお願いは、若林の父親の遺体を解剖したいので、それを許可していただきたいのです」
「しかし、それは、心不全とわかっているんじゃないんですかね？」
「そうですが、不審な点もありますので」
と、十津川はいった。
「しかし、遺族の許可が必要でしょう？」
「それなら、長男の若林に話しますよ。私が話せば、きっと、彼も、解剖して調べてくれというに違いありませんから」
と、十津川はいった。
石田は、仕方がないというように、肩をすくめて、
「私から、大学病院へ話しておきますよ」
と、いってくれた。
「感謝します」
と、十津川は礼をいった。
冷凍されていた若林の父親の遺体は、大学病院に運ばれた。
「何を調べるんですか？」
と、外科医が十津川にきいた。
「死因です」
「死亡診断書を見ましたがね、これは間違いなく、心不全の症状ですよ」
「私が知りたいのは、心不全を起こした原因です」
「原因？」
「そうです。ずばりといわせてもらうと、何かの薬が使われたんじゃないかと思っているんです。心不全と同じ症状を起こす薬があるわけでしょう？」
「もちろん、ありますが、それが使われたというんですか？」

「そうです。それを証明したいんですが、可能ですか？」
「もし、薬が使われたのなら、血液中に、残っているはずですから、わかりますよ」
「それなら、すぐ調べてください」
と、十津川はいった。
翌日には、結果がわかった。電話してくれた医者は、
「血液中に、現在、使用を禁止されている薬が見つかりましたよ。その薬の名前をいいますか？」
「その薬は、心臓発作を引き起こすんですか？」
「だから、禁止されたんです。それを、多量に与えられた形跡がありますね」
と、医者はいった。
「多量に投与されれば、必ず、心不全を起こしますか？」
「九十九パーセント、起きますね。特に、入院患者なら、起きなければおかしいですよ。しかし、なぜ、こんなことをしたんですか？　医者がやっても、何のトクもないし、家族ですかね」
「それを、私も、知りたいと思っていますよ」
と、十津川はいった。

7

「若林の父親は、殺されたんですか？」
と、亀井がきいた。
「間違いなくね。薬を使ってだよ。もともと、肝臓の薬だそうだが、心臓発作を起こすことがあるというので、使用禁止になったそうだ。多量に与えれば、間違いなく、心臓をやられるといっていたね」
と、十津川はいった。

「やったのは、あの女ですか？」
「そうだ。川上ゆき子だ。他には、考えられないよ。だから、一刻も早く遺体を焼いて、証拠を湮滅しようとしたんだ」
「しかし、なぜ、そんなことをしたんですかね？」
と、亀井がきいた。
「そこが、問題だな」
「若林の父親は、二宮のサラ金に、三百万円の借金があったわけでしょう。それに、財産があるわけでもありません。なぜ、殺したんですかね？　重荷になってきたからですかね？」
と、亀井がきく。十津川は笑った。
「それなら、あっさり、放り出すよ。重荷になったが、なかなか別れられないというような、殊勝な女じゃないね」
「すると、理由は？」
「一つだけ、理由は考えられるじゃないか」
と、十津川はいった。
「保険金ですか？」
と、亀井がきいた。
「他にあるかね。若林の父親は、腕のいい家具職人だ。それに、まだ五十代だよ。かなり高額の生命保険に入れるんじゃないかな。川上ゆき子が、甘えた口調で頼めば、若林の父親は、喜んで生命保険に入ったと思うよ」
「さっそく、保険会社を当たってみます」
と、亀井は気負い込んでいった。
亀井が、鹿児島市内の保険会社を片っ端から廻った結果、予想どおり、若林の父親が六千万円の生命保険に入っていたことがわかった。
「面白いのは、受取人の名前です」
と、亀井は戻って来て、十津川に報告した。

「川上ゆき子じゃないのか？」
「もちろん、彼女の名前はありましたが、もう一人、例の二宮の名前が書いてあるんですよ。サラ金の二宮です」
「二人の受取人？」
「そうです。保険会社の話では、若林の父親が、この二人に大変、恩になっているので、どうしても二人を受取人にしたいといったそうです」
「二宮のほうは、三百万を借りているから、いわされたんだろう」
と、十津川はいった。
「これで、ゆき子が、若林の父親を殺す動機もわかったし、さらに、二宮を殺す動機もあったことになりますよ」
亀井は、嬉しそうにいった。
「二宮を殺したかったとすると――」
と、十津川は考え込んだ。
「そうなんですよ。川上ゆき子は、若林をけしかけて、二宮を殺させたんじゃありませんかね。二宮が死ねば、六千万円の生命保険は、自分一人のものになりますからね」
「しかし、必ず、若林が二宮を殺すとは、限らないだろう？　第一、若林は、けしかけられて人を殺すような男じゃないよ」
と、十津川はいった。
「確かに、そうですが――」
「こういうことだと、思うんだよ」
と、十津川は煙草に火をつけてから、
「川上ゆき子にしてみれば、二宮が若林を殺してもよかったんだよ。殺人犯になって、刑務所に放り込まれてしまえば、それでも、六千万円はゆき子がひとり占めできる」

「ええ」
「そこで、若林を会わせる前に、二宮にこういっておく。若林は、刑事で、どうやら父親が毒殺されたことに気づいたらしい。このままでは、保険金はおりないし、二人とも捕まってしまう。だから、若林を殺してくれとね。それで、二宮は、前もって木刀を用意しておいて、いきなり殴りかかったんだろう。二宮のほうが、若林を最初から殺す気だったんだ」
「しかし、失敗して、逆に、若林から殺されてしまいましたね」
「ああ」
「それも、ゆき子の計算に入っていたんでしょうか？」
と、亀井がきいた。
「もちろん、考えていたと思うね。抜け目のない女だからね。逆に、若林が二宮を殺してもいいんだ」
「それはわかりますが、二宮が怪我だけですんで、すべてを自白してしまう危険があったんじゃありませんか？」
と、亀井がきいた。
「それはなかったんだよ」
「なぜですか？」
「電話だよ」
と、十津川はいった。
「若林があわてて一一九番しようとしたら、部屋に電話がなかったので、仕方なく外へ飛び出して、外の公衆電話から一一九番した。あのことですか？」
と、亀井がきく。
「そうさ。若林は、飛び出して行く。その隙に、川上ゆき子があの部屋に入って行って、倒れている二宮にとどめを刺す。だから、二宮が、怪我だけですむことはあり得ないんだ」

と、十津川はいった。
「木刀も、そのときに始末したわけですか？」
「そうだよ」
「しかし、電話は、どうなんですか？　あの部屋には、実際には、電話はあったんですから」
と、亀井がいった。
「現場へ行ってみようじゃないか」
と、十津川はいった。

8

翌日、二人は、二宮が住んでいたマンションに出かけた。
彼の部屋は、まだ立入禁止になっていた。十津川は、そこにいた管理人に警察手帳を見せて、部屋に入れてもらった。
電話機は、間違いなく、部屋の隅の台の上にのっていた。
「これが、若林には、なぜ見えなかったんですかね？」
亀井は、不思議そうにいった。
「簡単なことさ。そのとき、なかったからだよ」
と、十津川はいい、電話機に近づくと、コードを探ってみていたが、
「カメさん、やっぱりだ。差し込みになっているんだよ。あのとき、ここから外して、電話機は押入れにでも隠してあったんだと思うね」
と、いった。
亀井も、コードの根元を見た。電話台でかくれていたが、確かに差込み式になっていた。
「じゃあ、ゆき子があらかじめ抜いておいたんですか？」

と、亀井がきいた。

「彼女が勝手にそんなことをしたら、二宮が怪しむさ。多分、彼女は、若林を会わせる前に、二宮にこんなふうにいったんだろう。若林を殺してほしいと頼んだあとにね。若林は、東京の刑事だ。もし、部屋の電話を使って一一〇番されたら、すべてが終わりになってしまう。だから、電話は隠しておいたほうがいいとね。二宮は、その言葉を信じて、自分で、電話を隠しておいたんだと思うね」

と、十津川はいった。

「なるほど」

「川上ゆき子は、若林が一一九番しに外へ飛び出した隙に、三つのことをしたんだよ。二宮にとどめを刺し、木刀を始末し、そして、電話を元に戻したんだ」

「やるもんですね」

「だが、二宮が死んでしまった今、それを証明するのは難しいんだよ。若林の父親の死が殺人とわかっても、はたして、薬を与えたのが、ゆき子と証明できるかどうかわからないし」

「彼女に、決まっていますよ」

「もちろんだ」

「保険会社には、若林の父親の死が、毒殺の疑いがあると、教えてやりました」

「それで、保険金は？」

「書類が完備していたので、支払われてしまったそうですが、毒殺なら、弁護士を立てて、返済を川上ゆき子に要求するといっていました」

「それは、面白いな」

と、十津川はいった。

二人は、外に出た。

「まず、鹿児島県警に、若林の父のことを話してお

こう。毒殺とわかれば、若林の扱いも少しは違ってくるはずだ」

と、十津川はいった。

中央署に着くと、十津川は、石田署長と藤村警部に、若林の父親の死の真相を伝え、二宮殺しについて、自分の推理を話した。

「すっかり、心不全と思っていましたがねえ」

と、藤村はその件では納得した様子だったが、

「若林刑事が二宮を殺した件は、どうも納得できませんね。突然、本当は、川上ゆき子が殺したんだといわれましてもね。当の若林刑事が、自分が殺したと自供しているし、川上ゆき子がとどめを刺したという証拠もないわけでしょう？」

と、付け加えた。

「若林は、自分が殺したと思い込んでいるだけです。まさか、川上ゆき子に、罠にはめられたとは、思っていないでしょうから」

と、十津川はいった。

「必要なのは、証拠ですよ」

と、署長がいった。

「それは、私が見つけますから、若林を送検するのは、待っていてください」

と、十津川はいった。

「本当に、そんな証拠が見つけられますか？」

と、藤村はきいた。

「見つけますよ」

と、十津川はいった。

だが、十津川にしても、別に成算があるわけではなかった。

亀井が、小声で十津川に、

「今、川上ゆき子のマンションに電話してみたんですが、いませんでした。この時間では店に出ている

はずもないし、逃げたんじゃないでしょうか？」
「逃げたか」
「なにしろ、六千万円の保険金の返却を求められていますからね。それに、若林の父親の毒殺がバレたとなれば、六千万円を持って逃げ出したとしても、おかしくはありません」
「彼女のマンションへ行ってみよう」
と、十津川はいった。
二人がゆき子のマンションに着いたのは、午後二時前である。
管理人に、ゆき子の部屋を開けさせて、十津川と亀井は、中に入った。
寝室のベッドの上に服が散乱し、入口にも、何足かの靴が放り出してあった。
「あわてて、出かけた感じだな」
と、十津川は部屋の中を見廻しながらいった。
「六千万円と一緒にでしょう」
と、亀井がいう。
「それに、預金通帳や印鑑も一緒らしい」
と、十津川はいった。洋ダンスの引出しも、全部、開いていたからだった。
「何処へ逃げたんでしょうか？」
「多分、この鹿児島から、出る気だろう」
と、十津川はいった。
「出るとすると、飛行機か、列車ということになりますね」
「彼女は、運転はできるのかな？」
「車は、持っていませんよ」
と、管理人がいった。
「まず、空港へ行ってみよう」
と、十津川はいった。
十津川は、亀井と、タクシーを拾い、鹿児島空港

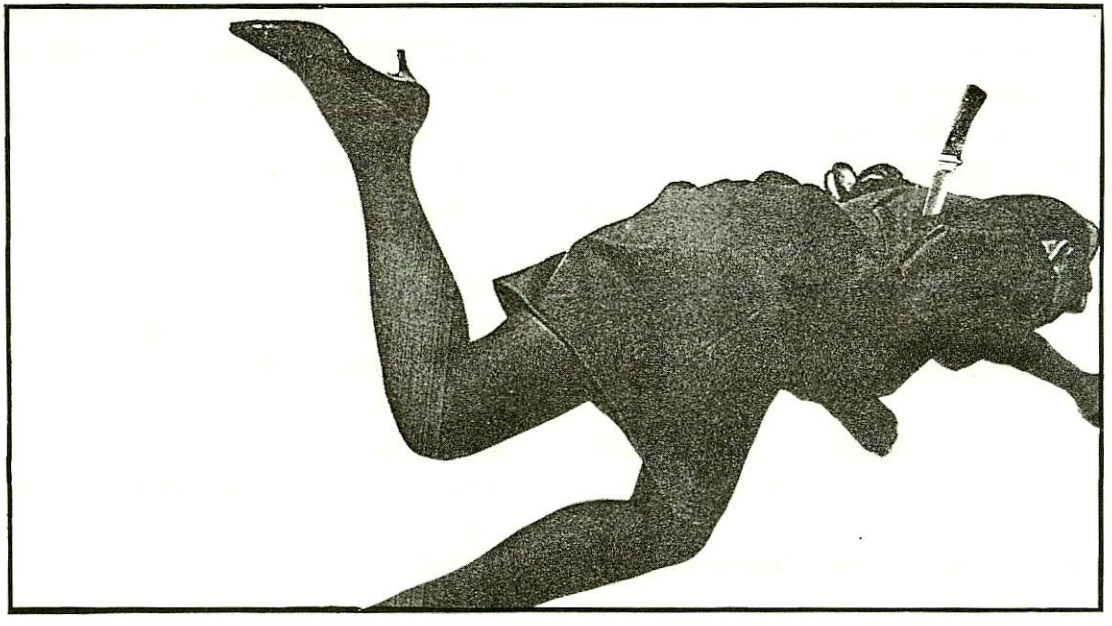
に飛ばした。
空港に着くと、ゆき子の人相をいい、搭乗しなかったかどうか、聞いて廻った。
鹿児島からは、東京、大阪、名古屋、福岡、それに沖縄に便が出ている。
だが、どのカウンターでも、川上ゆき子と思われる女が切符を買った形跡はなかった。
二人は、またタクシーを拾い、JR西鹿児島駅に向かった。
タクシーを拾って逃げるのは、運転手に顔を覚えられてしまうので、多分、彼女は避けるだろう。とすれば、あとは、列車だけしかない。
だが、こちらは、乗客の数が多いので、目撃者を見つけるのが、大変だった。改札掛の眼を頼る他はないのだが、川上ゆき子を見たという証言は、なかなか得られなかった。
十津川は、駅から藤村警部に電話をかけた。
「川上ゆき子が、逃げました。列車を利用したと思うんですが、どの列車かわかりません。そちらでも、なんとか調べてもらえませんか」
と、十津川は頼んだ。
「やってみましょう。十津川さんは、どうされるんですか？」
と、藤村がきいた。
「しばらく、西鹿児島駅で、聞き込みをやってみます」
と、十津川は答えた。
改札掛の他に、ホームにいる駅員たちにも当たってみた。
だが、ゆき子を見たという駅員は、見つからなかった。
「参ったな」

と、十津川は吐息をついた。
もし、川上ゆき子が消えてしまったら、若林を、助けられなくなるかもしれないのだ。
十津川は、腕時計に眼をやった。午後四時に近い。こうしている間にも、ゆき子は、どんどん、鹿児島から離れて行ってしまうのだ。東京や大阪のような大都会にもぐり込んでしまったら、探し出すのは難しいだろう。
「十津川さん！」
と、突然、呼ばれた。
振り向くと、藤村警部が、息をはずませながら、駈け寄ってくるのが見えた。
ホームにいた乗客の何人かが、何だという顔で、こちらを見ている。
「どうしたんですか？」
と、十津川のほうからきいた。
「彼女が、見つかりました！」
「何処でですか？」
「西鹿児島発、博多行きの特急『有明(ありあけ)36号』の車内です。死体で見つかりました」
「死体で？」
十津川は、亀井と、顔を見合わせた。
「そうです。背中を刺され、トイレで死体で見つかったと、大牟田(おおむた)の警察から報告があったんです。熊本と大牟田の間で見つかったそうです」
と、藤村はいった。
「それで、六千万円の入ったバッグは、見つかったんでしょうか？」
十津川は、きいてみた。
「いや、所持品は、ハンドバッグだけだったということです」
「犯人が、持ち去ったんですよ」

と、亀井が小声でいった。
藤村は、十津川に向かって、
「われわれは、これから大牟田へ行きますが、十津川さんは、どうされますか？」
「そうですね」
と、十津川はちょっと考えてから、
「私は、行きたいところがあるので、あとからにします」
と、いった。

9

十津川は、西鹿児島駅から出た。
「なぜ、大牟田へ行かないんですか？」
と、亀井がきいた。
「死んでしまった人間から、何も聞き出せないからね」
と、十津川はいった。
「しかし、この鹿児島で、どうするんですか？」
「川上ゆき子を殺した犯人に、会いに行くんだよ」
「犯人が、わかっているんですか？」
「もちろん、わかってるさ」
と、十津川はいった。
「しかし、誰が――？」
「彼女が殺され、六千万円が奪われたので、犯人がわかったんだよ」
と、十津川はいい、タクシーをとめた。
乗り込むと、十津川は、運転手に行き先を告げた。
着いたのは、郊外にある大きな家の前だった。
亀井は、その家の表札を見上げて、
「内藤？　誰の家ですか？」
「若林の父親が入院していた病院の院長の自宅だ



よ」
と、十津川はいった。
「あの病院のですか？」
「ああ、自宅を聞いておいたんだ」
「院長が、犯人ですか？」
「使用禁止になった薬は、普通では、手に入らないだろう。手に入るのは、病院関係者だよ。そう考えれば、院長が若林の父親の毒殺に関与しているに違いない。とすれば、川上ゆき子は、その見返りを約束しているはずだよ」
と、十津川はいった。
「すると、六千万円の保険金の一部を、院長にやる約束をしていたということですか？」
と、亀井がきいた。
「それがなければ、入院患者を毒殺するなんてことはしないだろう」
「それなのに、川上ゆき子は、六千万円を持って逃げ出したので、怒った内藤院長が、特急『有明』の車中で殺し、六千万円を奪ったわけですね」
「そうだよ」
「そして、ここへ帰って来る――」
「私の推理が、当たっていればね」
と、十津川はいった。
亀井は、落着きがなくなっているようだった。待つのは、どうしてもいらだつものである。
「ゆき子の死体は、大牟田の手前で見つかったといっていましたね？」
「熊本と大牟田の間だ」
「すると、犯人は、熊本で降りた可能性が強いですね。特急『有明36号』は、熊本と大牟田の間は、ノンストップですから」
「多分ね」

「熊本は、確か、一四時五五分着です。そこから、引き返すとして、間もなく、帰って来なければおかしいですが」

と、亀井はいった。

十津川は、笑って、

「カメさん。相手は、悪いことをして、帰って来るんだ。多分、暗くなってから帰るんじゃないかね」

「そうだとすると、時間がありますね。落ち着きませんね。早く、戻ってくればいいのに」

と、亀井は、舌打ちをした。

だが、十津川の予想どおり、内藤は、なかなか帰らなかった。

陽が落ちて、暗くなった。

午後八時過ぎになって、やっと、タクシーが門の前でとまった。

男が、一人降りた。大きなスーツケースを持っている。

タクシーが走り去るのを見送ってから、男はスーツケースを持ちあげ、門を入ろうとした。

十津川と亀井が、その前を塞ぐようにして、飛び出した。

相手はぎょっとした感じで、立ちすくんだ。

十津川は、ライターをつけて、その明かりで男の顔を照らし出した。

「内藤さんですね？」

「なんだ？　君たちは」

と、内藤院長が声を荒らげた。

「前に一度、病院のほうに、お邪魔したものですよ」

と、十津川はいい、相手の鼻先に警察手帳を突きつけた。

暗かったが、内藤が狼狽するのがわかった。それ

でも、語調は荒く、
「警察が、何の用だね？」
「そのスーツケースの中身を知りたいんですよ」
「これは、着がえなんかが入っているんだ。明日、旅行に行くんでね。病院から、持って来たんだよ」
「中身を拝見できませんか？」
「なぜ、君たちに見せなければいけないんだ？　そこをどきなさい。用があるんなら、明日、また来てくれたまえ」
「明日は、旅行にお出かけになるんじゃなかったんですか？」
十津川が、皮肉ないい方をした。
「それは――」
と、内藤がいいかけるのに、亀井が、
「とにかく、拝見！」
と、叫んで、いきなりスーツケースを奪い取った。
「あッ」
と、内藤が叫び声をあげた。
亀井は、構わずにスーツケースを地面に置いて、ファスナーを開けた。
ぎっしり詰まった一万円札の束が、現われた。
「川上ゆき子殺害容疑で逮捕する！」
と、十津川はわざと大声で怒鳴った。

10

スーツケースには、殺された川上ゆき子の指紋があった。
その他、特急「有明36号」の車内で、内藤を見たという目撃者が現われたりして、内藤は、自供を始めた。
十津川は、それでも不安だった。若林を助けられ

るような証言が得られるかどうか、わからなかったからである。何といっても、肝心の川上ゆき子が、殺されてしまっているからである。

翌日、藤村警部に呼ばれて、亀井と中央署に出かけて行くと、いきなり、

「若林刑事を、釈放しますよ」

と、笑顔でいわれた。

「本当ですか？」

「本当です」

「しかし、どうして、彼の無罪が証明されたんですか？」

と、十津川がきくと、藤村は、

「内藤院長の自供ですよ。彼は、なるべく自分の罪を軽くしたいと思ったのか、川上ゆき子がどんなに悪い女か、べらべら喋りましてね。彼女がどんな計画を立てていたかも、すべてわかりました。二宮殺しの一件もです。そのあと、ゆき子は、内藤に向かって、自分の頭の良さを、トクトクと喋ったそうです」

「二宮殺しは、私の想像したとおりだったんですか？」

と、十津川はきいた。

「ほとんど十津川さんの推理どおりだったようです。若林刑事と二宮が争っているとき、ゆき子は、自分の計画がうまくいくかどうか、息を殺して、マンションの外で見守っていたようです。若林刑事が飛び出してきたので、すぐ五階まであがって行き、まだ息のあった二宮を、そこにあった木刀で殴りつけて絶命させ、その木刀を持って逃げたそうです。ああ、電話も直してです」

「その話を、彼女は、内藤院長に聞かせていたわけですね？」

「自慢げに、話していたそうですよ」
と、いって、藤村は笑った。
「内藤は、いくら貰うことになっていたんですか？」
と、亀井がきいた。
「二千万です。つまり、内藤、ゆき子、そして二宮の三人で、等分に六千万円を分ける約束になっていたそうです。それを、そっくり持ち逃げされたんで、内藤は、かッとしたといっていましたね」
「ゆき子と二宮とは、どんな関係だったんですか？」
と、十津川がきいた。
「内藤の話では、一時、二人は同棲していたこともあったようですよ」
と、藤村はいった。

*

二日後、若林は、東京で、父親の葬儀を行なった。
喪主は、母にした。
翌日、若林は、十津川に、
「母が、嬉しそうな顔をしていました」
と、報告した。

■初出誌

阿波鳴門殺人事件　別冊小説宝石（光文社）　一九九〇年爽秋特別号
死体は潮風に吹かれて　小説宝石　（光文社）　一九九〇年新春特大号
ある刑事の旅　小説宝石　（光文社）　一九九〇年十一月号

この三編をまとめるにあたり、『十津川警部の逆襲』と総称しました。（編集部）

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（〒112－11）
光文社出版局

長編推理小説　十津川警部の逆襲

1990年12月20日　初版1刷発行
1991年8月30日　6刷発行

著者　西村京太郎
発行者　大坪昌夫
印刷者　盛庄吉
東京都文京区水道2－4－26
慶昌堂印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替　東京6－115347
株式会社　光文社
電話　東京（3942）2241（代）

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。（ナショナル製本）
表紙の模様・意匠登録　116613　© Kyōtarō Nishimura 1990

ISBN4-334-02900-0
Printed in Japan



KAPPA NOVELS

「カッパ・ノベルス」誕生のことば

カッパ・ブックス Kappa Books の姉妹シリーズが生まれた。カッパ・ブックスは書下ろしのノン・フィクション（非小説）を主体としたが、カッパ・ノベルス Kappa Novels は、その名のごとく長編小説を主体として出版される。

もともとノベルとは、ニューとか、ニューズと語源を同じくしている。新しいもの、新奇なもの、はやりもの、つまりは、新しい事実の物語というところから出ている。今日われわれが生活している時代の「詩と真実」を描き出す——そういう長編小説を編集していきたい。これがカッパ・ノベルスの念願である。

したがって、小説のジャンルは、一方に片寄らず、日本的風土の上に生まれた、いろいろの傾向、さまざまな種類を包蔵したものでありたい。かくて、カッパ・ノベルスは、文学を一部の愛好家だけのものから開放して、より広く、より多くの同時代人に愛され、親しまれるものとなるように努力したい。読み終えて、人それぞれに「ああ、おもしろかった」と感じられれば、私どもの喜び、これにすぎるものはない。

昭和三十四年十二月二十五日

光文社

〈カッパ・ノベルス〉出版目録

注・この目録は、各著者別にまとめました。なお、順序は、発行順です。
・＊印は品切れ中です。

松本清張 長編推理小説	高木彬光 長編推理小説	笹沢左保 長編推理小説	笹沢左保 長編推理小説	大藪春彦 長編アクション小説	
ゼロの焦点	成吉思汗の秘密	悪魔の関係	残照岬	処刑軍団	
松本清張 長編推理小説	高木彬光 長編推理小説	笹沢左保 長編サスペンス小説	笹沢左保 推理傑作集	大藪春彦 長編アクション小説	
眼の壁	白昼の死角	悪魔の人質	夜の目撃者	処刑戦士	
松本清張 長編小説	高木彬光 長編推理小説	笹沢左保 長編サスペンス小説	笹沢左保 長編推理小説	大藪春彦 長編サスペンス・アクション	
波の塔	密告者	悪魔の沈黙	骨牌の城	戦士の挽歌（上・下）	
松本清張 長編推理小説	高木彬光 長編推理小説	笹沢左保 長編サスペンス小説	笹沢左保 長編推理小説	島田一男 長編推理小説	
点と線	現代夜討曽我	悪魔の誘惑	サンセット刑事	科学捜査官	
松本清張 長編推理小説	笹沢左保 長編推理小説	笹沢左保 長編サスペンス小説	笹沢左保 長編推理小説	島田一男 長編推理小説	
蒼い描点	不倫岬	悪魔岬	悪魔の剃刀	迷宮捜査官	
松本清張 長編推理小説	笹沢左保 長編推理小説	笹沢左保 長編推理小説	笹沢左保 長編推理小説	島田一男 長編推理小説	
砂の器	無情岬	同行者	コンピュータの身代金	継続捜査官	
松本清張 長編推理小説	笹沢左保 長編推理小説	笹沢左保 長編推理小説	三好徹 長編推理小説	島田一男 長編推理小説	
高校殺人事件	逃亡岬	十五階の地獄	殺人者は誇りを持つ	国際捜査官	
松本清張 長編推理小説	笹沢左保 長編推理小説	笹沢左保 長編サスペンス小説	三好徹 連作推理小説	島田一男 連作推理小説	
黒い樹海	愛人岬	背信の詩集	銀座警察捜査線	現場捜査官	
佐野洋 長編推理小説	笹沢左保 長編サスペンス小説	笹沢左保 長編推理小説	小松左京 SF長編小説	島田一男 長編推理小説	
犬たちと殺人と	悪魔の部屋	お前の名は地獄	日本沈没（上・下）	女捜査官	
佐野洋 長編推理小説	笹沢左保 長編推理小説	笹沢左保 長編推理小説	邦光史郎 長編推理小説	島田一男 長編推理小説	
私兵刑事	悪魔の湖畔	血の砂丘	幻の貴人古墳	検視捜査官	

島田一男 長編推理小説
広域捜査官

島田一男 長編推理小説
機動捜査官

島田一男 長編推理小説
特殊捜査官

島田一男 長編推理小説
ミセス捜査官

島田一男 長編推理小説
熱海・十国峠殺人事件

島田一男 長編推理小説
熱海梅園殺人事件

島田一男 長編推理小説
在外捜査官

島田一男 長編推理小説
別動捜査官

島田一男 長編推理小説
新・科学捜査官

島田一男 長編推理小説
特異犯罪捜査官

島田一男 長編推理小説
遊撃捜査官

森村誠一 長編推理小説
首都・第九方面捜査官

森村誠一 長編推理小説
公安機動捜査官

森村誠一 長編推理小説
人間の証明

森村誠一 長編推理小説
高層の死角

森村誠一 長編推理小説
流氷の夜会

森村誠一 長編推理小説
伝説のない星座

森村誠一 長編推理小説
虹に立てる叛旗

森村誠一 本格推理傑作集
影の祭り

森村誠一 長編推理小説
完全犯罪の使者

森村誠一 長編推理小説
列車

森村誠一 長編アクション小説
星の陣(上・下)

斎藤栄 長編推理小説
終着駅

斎藤栄 長編推理小説
黒い神座

斎藤栄 長編推理小説
死刑台の舞踏

斎藤栄 長編推理小説
(まち)

斎藤栄 長編推理小説
花嫁川柳殺人事件

斎藤栄 長編推理小説
副社長

斎藤栄 長編推理小説
鎌倉静の舞殺人事件

斎藤栄 長編推理小説
鎌倉流鏑馬殺人事件

斎藤栄 長編推理小説
タロット日美子の歌麿殺人

斎藤栄 長編推理小説
タロット日美子の列車殺人

斎藤栄 長編推理小説
日美子の唱歌殺人

西村京太郎 長編推理小説
伊豆七島殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
二階堂警部の逆襲

西村京太郎 長編推理小説
二階堂警部の「奥の細道」

西村京太郎 長編推理小説
沖縄殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
極秘指令

西村京太郎 長編企業小説
女重役

西村京太郎 長編企業小説
二階堂警部の反乱

西村京太郎 長編推理小説
寝台特急殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
夜間飛行殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
終着駅殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
夜行列車殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
消えたタンカー

西村京太郎 長編推理小説
消えた乗組員

西村京太郎 長編推理小説
発信人は死者

西村京太郎 長編推理小説
伊豆七島殺人事件

清水一行 長編企業小説
逆転の歯車

清水一行 長編経済小説
欲望集団

清水一行 長編企業小説
ゼロの衝撃

清水一行 長編企業小説
女重役

清水一行 長編企業小説
二階堂警部の反乱

清水一行 長編企業小説
寝台特急殺人事件

清水一行 長編企業小説
夜間飛行殺人事件

清水一行 長編企業小説
終着駅殺人事件

清水一行 長編企業小説
夜行列車殺人事件

清水一行 長編企業小説
消えたタンカー

清水一行 長編企業小説
消えた乗組員

清水一行 長編企業小説
発信人は死者

清水一行 長編企業小説
極秘指令

西村京太郎 長編推理小説
北帰行殺人事件

西村京太郎 トラベル・ミステリー傑作集
ハネムーン・トレイン

西村京太郎 長編推理小説
蜜月列車殺人事件

西村京太郎 長編推理小説
日本一周「旅号」殺人事件

清水一行 長編企業小説
器に非ず

西村京太郎　長編推理小説
東北新幹線殺人事件（スーパー・エクスプレス）
西村京太郎　長編推理小説
下り特急「富士」（ラブ・トレイン）殺人事件
西村京太郎　トラベル・ミステリー・傑作集
雷鳥九号（サスペンス・トレイン）殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
超特急「つばめ号」（イベント・トレイン）殺人事件
西村京太郎　トラベル・ミステリー・傑作集
高原鉄道（ハイランド・トレイン）殺人事件
西村京太郎・長編推理小説
北能登（きたのと）殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
寝台特急「日本海」（メモリー・トレイン）殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
東京駅殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
上野駅殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
富士山麓（ふじさんろく）殺人事件
西村京太郎　長編ニュー・サスペンス
寝台特急「北斗星」（ブルートレイン）殺人事件
西村京太郎　トラベル・ミステリー・傑作集
最果てのブルートレイン
西村京太郎　十津川警部シリーズ①
大垣行345M列車の殺意

西村京太郎　長編推理小説
特急「あずさ」（アリバイ・トレイン）殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
山陰路（さんいんじ）殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
函館駅殺人事件
西村京太郎　トラベル・ミステリー・傑作集
日本海からの殺意の風
西村京太郎　長編推理小説
西鹿児島駅殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
特急「おおぞら」（ハイウェー・エクスプレス）殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
特急「北斗1号」（スーパー・トレイン）殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
十津川警部の怒り
西村京太郎　長編推理小説
パリ発殺人列車
夏樹　静子　交通推理小説
山手線五・八キロの証言
夏樹　静子　トラベル・ミステリー・傑作集
密室航路
夏樹　静子　長編推理小説
花の棺（ひつぎ）
夏樹　静子　長編推理小説
札幌駅殺人事件
夏樹　静子　長編推理小説
Wの悲劇
夏樹　静子　長編推理小説
Mの悲劇
夏樹　静子　長編推理小説
霧の証言
夏樹　静子　連作推理小説
弁護士 朝吹里矢子

西村京太郎　長編推理小説
寝台特急「あさかぜ1号」殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
ひかり62号の殺意
西村京太郎　長編推理小説
「C62ニセコ」殺人事件
西村京太郎　長編推理小説
十津川警部の決断
西村京太郎　長編推理小説
宗谷本線殺人事件
西村京太郎　十津川警部シリーズ②
十津川警部の捜査
草野　唯雄　長編推理小説
ハラハラ刑事危機一髪
草野　唯雄　長編サスペンス・ユーモア
ハラハラ刑事一発逆転
草野　唯雄　長編推理小説
360時間の追跡
山村　美紗　長編推理小説
ミス振袖殺人事件
山村　美紗　名探偵キャサリン傑作集II
恋盗人（こいぬすびと）
山村　美紗　長編推理小説
京都化野（あだしの）殺人事件
山村　美紗　名探偵キャサリン傑作集III
京都絵馬堂（えまどう）殺人事件
山村　美紗　長編推理小説
京都茶道家元（さどういえもと）殺人事件
山村　美紗　長編推理小説
京都・神戸殺人事件
山村　美紗　長編推理小説

夏樹　静子　長編推理小説
わが郷愁のマリアンヌ（上・下）
夏樹　静子　長編推理小説
妻に捧げる犯罪
土屋　隆夫　長編推理小説
C の悲劇
山村　美紗　長編推理小説
小野小町（おのこまち）殺人事件
山村　美紗　名探偵キャサリン傑作集II
百人一首殺人事件
山村　美紗　長編推理小説
エジプト女王の棺
山村　美紗　長編推理小説
燃えた花嫁
山村　美紗　長編推理小説

山村　美紗　長編推理小説
消えた相続人
山村　美紗　名探偵キャサリン傑作集I
京友禅の秘密
山村　美紗　長編推理小説
黒百合（くろゆり）の棺
山村　美紗　長編推理小説
京都殺人事件
山村　美紗　長編推理小説
京都不倫旅行殺人事件
山村　美紗　長編推理小説

山村 美紗 長編推理小説
琵琶湖別荘殺人事件

山村 美紗 名探偵傑作集Ⅳ
恋人形殺人事件

山村 美紗 長編推理小説
京都花見小路殺人事件

山村 美紗 名探偵傑作集Ⅴ
京都・十二単衣殺人事件

山村 美紗 長編推理小説
千利休・謎の殺人事件

山村 美紗 長編推理小説
京都・バリ島殺人旅行

福本 和也 長編ハード・ロマン
新・大阪極道戦争

福本 和也 長編ロマン
極道株式会社

福本 和也 長編推理アクション
58便、応答せよ

福本 和也 長編推理小説
北太平洋の壁

生田 直親 長編小説
原発・日本絶滅

和久 峻三 長編推理小説
新幹線 多重衝突セヨ

日下 圭介 長編推理小説
「野菊の墓」殺人事件

日下 圭介 長編推理小説
新幹線 多重衝突セヨ

伴野 朗 長編推理小説
北京の星

赤川 次郎 長編推理小説
ひまつぶしの殺人

赤川 次郎 長編推理小説
顔のない十字架

赤川 次郎 長編ユーモア・サスペンス
おやすみ、テディ・ベア

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの推理

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの追跡

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの怪談

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの狂死曲

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの駈落ち

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの恐怖館

赤川 次郎 ミステリー傑作集
三毛猫ホームズの運動会

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの騎士道

赤川 次郎 ミステリー傑作集
三毛猫ホームズのびっくり箱

赤川 次郎 ミステリー傑作集
三毛猫ホームズのクリスマス

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの幽霊クラブ

赤川 次郎 ミステリー傑作集
三毛猫ホームズの感傷旅行

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの歌劇場

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの四季

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズのクリスマス

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの登山列車

赤川 次郎 ミステリー傑作集
三毛猫ホームズと愛の花束

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの騒霊騒動

赤川 次郎 ミステリー傑作集
三毛猫ホームズの運動会

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズのプリマドンナ

赤川 次郎 長編推理小説
おだやかな隣人鬼（おに）

赤川 次郎 長編推理小説
三毛猫ホームズの四季

赤川 次郎 長編推理小説
ローレライは口笛で

西村 寿行 長編ハード・アクション
汝は日輪に背く

西村 寿行 長編ハードボイルド・アクション
無頼船

西村 寿行 長編バイオレンス
妖獣の村

西村 寿行 長編警鐘小説
滅びの宴

西村 寿行 ミステリー傑作集
闇の法廷

西村 寿行 長編スーパー痛快
晩秋の陽の炎ゆ

西村 寿行 長編伝奇バイオレンス
風紋の街

西村 寿行 長編警鐘小説
濫觴の宴

西村 寿行 長編アクション
狼のユーコン河

西村 寿行 長編ハード・アクション
黒猫の眸のほめき

西村 寿行 官能アクション
症候群

西村 寿行 長編アクション
魔境へ、無頼船

西村 寿行 長編痛快小説
幻（めくらまし）戯

西村 寿行 長編痛快小説
夢想幻戯

西村　寿行　長編ハード・アクション
無頼船、極北光に消ゆ

西村　寿行　長編ハード・ロマン
沈黙の渚

西村　寿行　長編ハード・ロマン
頻闇にいのち惑ひぬ

西村　寿行　ハードボイルド・サスペンス
監置零号

西村　寿行　長編アクション
蝕られた寒月

西村　寿行　長編アクション
曠野の狼

西村　寿行　長編ハード・バイオレンス
死神ザ・デスソ

西村　寿行　長編ハード・バイオレンス
風の渚

西村　寿行　長編ハード・バイオレンス
道（みち）

小林　久三　長編歴史推理小説
二人の聖徳太子

門田　泰明　長編超時空バイオレンス
影の軍団

門田　泰明　長編超バイオレント・サスペンス
叛撃戦線　特命武装検事黒木豹介

門田　泰明　長編超バイオレント・サスペンス
吼える銀狼　特命武装検事黒木豹介

門田　泰明　長編超バイオレント・サスペンス
黒豹必殺　特命武装検事黒木豹介

門田　泰明　長編超バイオレント・サスペンス
黒豹夢想剣

門田　泰明　長編超バイオレント・サスペンス
黒豹必殺剣

檜山　良昭　長編スペクタクル小説
大逆転！戦艦「大和」激闘す

檜山　良昭　長編シミュレーション小説
太平洋戦争を阻止せよ　新・大逆転ノ

檜山　良昭　長編スペクタクル小説
大逆転連合艦隊ドーバー大海戦 1

檜山　良昭　長編スペクタクル小説
大逆転連合艦隊ドーバー大海戦 2

檜山　良昭　長編スペクタクル小説
大逆転連合艦隊ドーバー大海戦 3

檜山　良昭　長編スペクタクル小説
日本本土決戦

檜山　良昭　長編スペクタクル小説
日本本土決戦遠野の殺人事件

檜山　良昭　長編スペクタクル小説
アメリカ本土決戦倉敷殺人事件

檜山　良昭　長編近未来スペクタクル
日本潰滅

檜山　良昭　長編スペクタクル小説
大逆転！ミッドウェー海戦

内田　康夫　長編推理小説
日光殺人事件

内田　康夫　長編推理小説
津軽殺人事件

内田　康夫　長編推理小説
横浜殺人事件

内田　康夫　長編推理小説
神戸殺人事件

内田　康夫　長編推理小説
伊香保殺人事件

内田　康夫　長編推理小説
悪（わる）党

内田　康夫　長編推理小説
露（ろしゅつ）出

内田　康夫　長編推理小説
白鳥殺人事件

内田　康夫　長編推理小説
白昼の処刑

内田　康夫　長編推理小説
悪女は午前二時に眠る

内田　康夫　長編推理小説
小樽殺人事件

内田　康夫　長編推理小説
長崎殺人事件

勝目　梓　ハード・アクション
迷犬ルパンの挑戦

勝目　梓　痛快ハード・アクション
迷犬ルパンと地獄谷

勝目　梓　痛快ハード・アクション
迷犬ルパンと幽霊海峡

勝目　梓　痛快ハード・アクション
迷犬ルパンと殺人結婚

勝目　梓　長編ハードボイルド・サスペンス
富良野・狩勝殺人ライン

勝目　梓　長編ハード・アクション
殺人路・上高地

勝目　梓　長編ハードボイルド・アクション
髑髏を抱け

勝目　梓　長編ハードボイルド・アクション
修羅の狩人

辻　真先　長編推理小説
迷犬ルパンの大逆転

辻　真先　長編ユーモア推理
四国殺人Vルート

辻　真先　長編ユーモア推理
迷犬ルパンと地獄谷

辻　真先　長編ユーモア推理
迷犬ルパンと幽霊海峡

辻　真先　長編ユーモア推理
迷犬ルパンと殺人結婚

辻　真先　長編推理小説
東海道36殺人事件

辻　真先　長編推理小説
萩・殺人迷路

長井　彬　長編推理小説
広瀬　仁紀　長編推理小説
永田町仕手集団

島田 荘司 長編推理小説
寝台特急「はやぶさ」1/60秒の壁

島田 荘司 長編推理小説
出雲伝説7/8の殺人

島田 荘司 長編推理小説
高山殺人行1/2の女

島田 荘司 長編推理小説
北の夕鶴2/3の殺人

島田 荘司 推理傑作集
Yの構図

島田 荘司 推理傑作集
展望塔の殺人

島田 荘司 長編推理小説
灰の迷宮

島田 荘司 推理傑作集
毒を売る女

島田 荘司 長編推理小説
夜は千の鈴を鳴らす

島田 荘司 長編推理小説
幽体離脱殺人事件

島田 荘司 長編推理小説
奇想、天を動かす

泡坂 妻夫 長編推理小説
踊る手なが猿

胡桃沢耕史 長編痛快アクション
殺人指令千分の一

胡桃沢耕史 痛快推理小説
ベランダ刑事の名推理

谷 恒生 長編伝奇バイオレンス
髑髏伝 ①〜⑤

谷 恒生 長編伝奇バイオレンス
菩薩

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔戦線

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔淫獄Ⅰ〔兇闘編〕

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔淫獄Ⅱ〔鬼宝編〕

夢枕 獏 長編スーパー・バイオレンス
獅子の門 群狼編

大下 英治 長編経済小説
8割の男

胡桃沢耕史 ユーモア・ミステリー
刑事魔人

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔街

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔街

菊地 秀行 超・バイオレンス・アクション
淫殺街

菊地 秀行 長編超・バイオレンス・アクション
淫獣

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔淫獣

菊地 秀行 長編超伝奇バイオレンス
妖魔異伝 淫虐編

菊地 秀行 長編超・バイオレンス・アクション
獅子の門 玄武編

夢枕 獏 長編スーパー・バイオレンス
獅子の門 青竜編

志茂田景樹 長編ユーモア推理小説
快盗とジゴロと孔雀 警視Ⅰ

志茂田景樹 長編ユーモア推理小説
快盗とジゴロと孔雀 警視Ⅱ

志茂田景樹 長編歴史推理小説
信玄の八門秘宝殺人

志茂田景樹 長編アクション・サバイバル・ウォーク
極秘捜査官・影狼

志茂田景樹 長編スタンダード小説
大逆説！西南戦争

志茂田景樹 長編スタンダード小説
大逆説！関ヶ原合戦

井上 淳 長編ハード・アクション
略奪者の群れ

津村 秀介 長編推理小説
諏訪湖殺人事件

津村 秀介 長編推理小説
洞爺湖殺人事件

津村 秀介 長編推理小説
浜名湖殺人事件

深谷 忠記 長編推理小説
0・096逆転の殺人

深谷 忠記 長編推理小説
札幌・仙台 48秒の逆転

深谷 忠記 長編推理小説
「南紀・伊豆」Sの逆転

深谷 忠記 長編推理小説
「法隆寺の謎」殺人事件

深谷 忠記 長編推理小説
「万葉集の謎」殺人事件

深谷 忠記 長編推理小説
「邪馬台国の謎」殺人事件

深谷 忠記 長編推理小説
鈴蘭伝説の殺人

津村 秀介 長編推理小説
猪苗代湖殺人事件

津村 秀介 長編推理小説
宍道湖殺人事件

深谷　忠記　長編推理小説
「博多・熱海」殺人交点
本岡　類　長編推理小説
武蔵野0・8ヒ殺人事件
本岡　類　長編推理小説
大雪山　牙と顎の殺人
岡嶋　二人　長編推理小説
コンピュータの熱い罠
岡嶋　二人　長編推理小説
殺人者志願
岡嶋　二人　長編推理小説
殺人！ザ・東京ドーム
中津　文彦　長編推理小説
千利休殺人事件
東野　圭吾　長編推理小説
白馬山荘殺人事件
東野　圭吾　長編推理小説
11文字の殺人
東野　圭吾　長編推理小説
ブルータスの心臓
栗本　薫　長編推理小説
グルメを料理する十の方法

梓　林太郎　長編推理小説
黒部峡谷殺人事件
梓　林太郎　長編推理小説
殺人山脈
梓　林太郎　長編推理小説
尾瀬殺人湿原
梓　林太郎　長編推理小説
殺人氷壁
梓　林太郎　長編推理小説
冷血山地
森　真沙子　長編推理小説
札幌雪祭り殺人事件
鳥井加南子　長編推理小説
死者の還る渚
生島　治郎　長編推理小説
非紳士協定
皆川　博子　長編推理小説
十和田殺人湖畔
山村　正夫　長編推理小説
妖狐伝説殺人事件
山村　正夫　長編伝奇推理小説
夜の獣
川又　千秋　長編ハード・アクション小説
街
山浦　弘靖　長編推理小説

山浦　弘靖　長編推理小説
特捜ハイウェイ刑事
山浦　弘靖　長編推理小説
東名高速殺人事件
山浦　弘靖　長編推理小説
殺人特急300秒の罠
大谷羊太郎　長編推理小説
悪人は三度死ぬ
大谷羊太郎　長編推理小説
大密室殺人事件
大谷羊太郎　長編推理小説
越後七浦殺人海岸
小杉　健治　長編推理小説
東京岐阜Σ0秒の罠
山崎　洋子　長編推理小説
聖母の牙
折原　一　長編推理小説
北の椿は死を歌う
折原　一　長編推理小説
猿島館の殺人
小池真理子　長編推理小説
紫陽花の殺意
日本推理作家協会編　ミステリーベストセレクション2
紅玉は殺人者
日本推理作家協会編　ミステリーベストセレクション3
熱砂が殺す

澤田ふじ子　長編歴史小説
覇王の女
由良　三郎　長編推理小説
円周率πの殺人
由良　三郎　長編推理小説
二重殺人トライアングル
馬場　信浩　長編ドキュメント
栄光のトライ
小嵐九八郎　長編推理小説
紫桔梗殺人事件
竹河　聖　長編ホラー小説
妖影界
宮部みゆき　長編推理小説
東京殺人暮色
山田　正紀　長編推理小説
蜃気楼・13の殺人
大沢　在昌　長編ハード刑事小説
新宿鮫
吉村　達也　長編推理小説
スターダスト殺人物語
日本推理作家協会編　ミステリーベストセレクション1
紫陽花の殺意
日本推理作家協会編　ミステリーベストセレクション2
紅玉は殺人者
日本推理作家協会編　ミステリーベストセレクション3
熱砂が殺す

清水　義範　長編小説
学問ノススメ挫折編
清水　義範　長編小説
学問ノススメ奮闘編
清水　義範　長編小説
学問ノススメ自立編
難波　利三　長編小説
それ行け！OB課長
綾辻　行人　長編推理小説
殺人方程式
山浦　弘靖　長編推理小説
ノンちゃんの夢
佐藤　繁子　長編小説
山浦　弘靖　長編推理小説
ひとり魔殺人事件

◉最新刊シリーズ

西村京太郎　推理傑作集
特急「あさしお3号」殺人事件

笹沢　左保　連作時代小説
一千キロ、剣が疾る

大谷羊太郎　長編推理小説
西麻布「紅」の殺人

斎藤　栄　推理傑作集
謎の殺人図鑑

島田　一男　長編推理小説
六本木捜査官五重殺

赤川　次郎　長編推理小説
三毛猫ホームズの黄昏ホテル

中津　文彦　長編歴史推理小説
闇の本能寺

今邑　彩　長編推理小説
i（アイ）

胡桃沢耕史　長編推理小説
翔べ！従三位夕霧饗部

菊地　秀行　長編超伝奇バイオレンス
妖魔淫獄Ⅲ〔冥帝編〕

西村京太郎　十津川警部シリーズ③
十津川警部の逆襲

草野　唯雄　長編推理小説
三幕殺人事件

深谷　忠記　長編推理小説
函館・芙蓉伝説の殺人

檜山　良昭　長編スペクタクル小説
大逆転！太平洋大海戦上

島田　一男　長編推理小説
死体鑑識捜査官

吉村　達也　長編推理小説
六本木捜査官五重殺十5

山村　美紗　長編推理小説
愛の殺人流

志茂田景樹　長編スペクタクル小説
大逆説！信玄・謙信日本を奪る

赤川　次郎　長編推理小説
キャンパスは深夜営業

山村　美紗　推理傑作集
北の殺人怨歌

吉岡　道夫　長編推理小説
殺人回廊

小林　久三　長編歴史推理小説
黒バラ荘殺人事件

中津　文彦　ミステリー傑作集
北の殺人怨歌

大谷羊太郎　長編推理小説
東京青森夜行高速バス殺人事件

森村　誠一　長編推理小説
凍土の狩人

高橋　克彦　長編推理小説
春信殺人事件

関口ふさえ　長編推理小説
志茂田景樹　長編歴史スペクタクル
大逆説！関ケ原合戦　大坂の役編

檜山　良昭　長編スペクタクル小説
大逆転！太平洋大海戦中

広山　義慶　長編ハード・バイオレンス
炸裂（さくれつ）

長編推理小説
ラベンダー殺人事件

島田　荘司　長編推理小説
幻想都市

赤川　次郎　長編推理小説
三毛猫ホームズの犯罪学講座

夏樹　静子　推理傑作集
独り旅の記憶

歌野　晶午　長編推理小説
死体を買う男

津村　秀介　長編推理小説
琵琶湖殺人事件

山村美紗

トリックの名手が放つ秀作群！

花の棺
エジプト女王の棺
百人一首殺人事件
黒百合の棺
小野小町殺人事件
燃えた花嫁
消えた相続人
恋盗人
京都不倫旅行殺人事件
京都化野殺人事件
京都茶道家元殺人事件
京都花見小路殺人事件
京都・神戸殺人事件
琵琶湖別荘殺人事件
千利休・謎の殺人事件
京都・バリ島殺人旅行
愛の殺人気流
ラベンダー殺人事件
坂本龍馬殺人事件

名探偵キャサリン傑作集

京友禅の秘密
ミス振袖殺人事件
京都絵馬堂殺人事件
恋人形殺人事件
京都・十二単衣殺人事件

光文社 KAPPA NOVELS

西村京太郎

●〈トラベルミステリー〉シリーズ

寝台特急殺人事件
夜間飛行殺人事件
終着駅殺人事件
夜行列車殺人事件
北帰行殺人事件
蜜月列車殺人事件
日本一周「旅号」殺人事件
東北新幹線殺人事件
下り特急「富士」殺人事件
雷鳥九号殺人事件
超特急「つばめ号」殺人事件

高原鉄道殺人事件
北能登殺人事件
寝台特急「日本海」殺人事件
最果てのブルートレイン
特急「あずさ」殺人事件
山陰路殺人事件
日本海からの殺意の風
特急「北斗1号」殺人事件
特急「おおぞら」殺人事件
山手線五・八キロの証言
寝台特急「北斗星」殺人事件

大垣行345M列車の殺意
寝台特急「あさかぜ1号」殺人事件
ひかり62号の殺意
「C62ニセコ」殺人事件
十津川警部の決断
宗谷本線殺人事件
十津川警部の怒り
パリ発殺人列車
特急「あさしお3号」殺人事件
十津川警部の逆襲

●〈駅ステーション〉シリーズ

東京駅殺人事件
上野駅殺人事件
函館駅殺人事件
西鹿児島駅殺人事件
札幌駅殺人事件
長崎駅殺人事件

●伊豆七島殺人事件
●消えたタンカー
●消えた乗組員
●発信人は死者
●富士山麓殺人事件

光文社 KAPPA NOVELS